

(九) 風の柳 (上)

其力神の如しとて、何人か拜金宗といふ教を立てぬ。信に世間金に勝つべきものはあらじと覺えたり。元帥は是なる葛城の謀思ひのまゝに行はれて、才蔵が動かぬ心の根の菊住も小メが持物になりぬれば、鳥立つ迹へ彈丸を放すものなく、誰に情立つるのあらざるのみか、浮氣男へ面當の小氣味好き事もがな、と其のみ一念に思ひつめたる鼻頭へ、かうある事と攘臂して待ちに待ちたる葛城が、身請せう！ 何處なりとも好むまゝの處に、意氣にでも立派にでも、望み次第の普請して、圍うて置くがどうじや、と思ふ様腹を空せてから饅飯を見せるやうな持つて行き方。此中に毒がありても、食ばでは措かれぬ仕儀に逐迫められたる身に幾許か歡びて、然ぞやお惜みの今までの剛情は、何として私風情が何方をも嫌ひしにあらず。譯を申せば、一夜二夜の假枕は其座の浮氣から、今日ありて明日忘らるゝ仇波の、幾度寄するにも誘はれざりしは、此身の行末を思へばなり。願ふは誠あるお方を見立て、俱白髪の末懸けて替るまじき契をこそ、さもなくばは心の誓を識れる御方無くて、百人が百人浮きたる情を言寄るを、風に柳の障らす待ひかねて、中には竹の雪の強く刎ねしもあり。白金といはると女にても、情の道を知らぬにあらねば、確に誠ある御方と見次第、

置手拭して火吹竹持つとも苦しからざる了簡なるに、生憎今までさる御方には遭遇はで、唯金持てる人、一巾節の上手なる人、能なくて首ばかり奇麗なる人、心は珍らずして裝飾のみ意氣なる人、餘所の藝者はどのやうに思ふか知らねど、才蔵の氣には合はぬ人ばかり。

此社會を泥水といへば、誰か濁に染まぬはなく、譬へば巷渠の中なる花の如く、取上げられてから鼻摘まれむことの口惜さに、我は深山の初櫻、知られで果てなば果てよかし、もし誠に愛でゝ家土産に手折らむ人もあらば、露に濡色の清きところを觀めたまへ、と心に待てる効ありて、今更言ふは異なものなれど、御前の御最貢に預りてより、これぞ誠あり、情深き御方と見たれど、一目二目にてはお心の底の知りがたさに、或時は御意を措き、又は難面遇し、散々火水に鍛へて今日此頃、御前の亦無き可頼しき御志が知れましてからは、彼方より捨てるとおほせられても、此私から離れませぬ。

此上は今までの我はがましき面憎さも、申す通りの志ゆると恕されて、末々永くお見捨なく、お目懸けられて下さらば、住居は何方の裏長屋にても、月顯はに雨泄る軒にても何か厭ふべき。渝らぬお心を便りに、此社會の苦艱を逃れ、一人の御機嫌を取りかねて、朝夕に叱られたき願を、可憐とも哀とも思召して幾久敷、と

挨拶取りてはや素人氣を見すれば、葛城大盡疾に此肚裏を見透し、我計の圖に中りたりとはいふもの、菊住に寝返り打たれたるが悔しさに、我を瑤奥への踏臺にして、男の面を張らむとの底巧を、舌の動くまゝに陰蔽して、言うたもの哉、言うたもの哉。樂屋を見た目には何事も可笑からず。柳橋の才藏と名にし買ふ白金も、今は指頭で切るゝ哀さ。これ窮鳥の懐に入る類。垂天の翼を飲めて鳴聲の悲しげなる、山瀬に見せて氣味好がらせたき此態わ！

我に野心のあらざらむには、此時大口開きて何々と笑ひ、持古しの秋の扇に用なし、と袂を擴うてついと歸る所なれど、容色の好いがどれほどの徳になるか知れぬもの、誠で候の末長くで候のと、百圓出せば米國では學士が買へるさうな、柳橋では色男の株を賣附け、何も存じたる不佞に、馬を指して鹿といふを、一杯吃された顔で毒もいはず、一々嬉しい相好で聽さる我を我の可笑ければ、汝も然や汝の馬鹿らしく、腹で手出すは迷ひの事。こんな縁が唐にもあるか。未覺束なき中なれど、一日にても我庭の花にせば、後は散るとも實を持つとも、其は時候の都合次第。先其までは白痴になりても、男の意地を貫きたれば、費ひし金も死んで愛でたし、と思ふを色にも見せず、それは忝なき芳志、いよく得心とならば、萬事は明日にして

も、早速ながらお才、訂盟の盃。此方の人、お酌。

此名馬を手に入れて御感斜ならず、山瀬を招きて此卓を見よと拳を聯せし喜悅の毗流るゝがごとし、之を拜見させらるゝ身は挨拶に困じて、御樂みの儀と申上ぐるの外なし。此上の依囑は根引の始末、萬事の談判、粹なる足下を煩はさむ。近日事納まらむ上は、古けれども褒美は望次第。足下が之をど目懸けたる品は、此方能く識れり。二の土藏の中なる寶の一品は、何なりとも撰取勝手たるべしと奮みたる言に、過分なる御褒美にて恐入ります。されば此よりと暇乞すれば、雜助小めの二人へ好きな物買うてやれと紙幣の二束、提鞆包の重るほど捻込み、山瀬は柳橋へ行きて之を配當すれば、いづれも目を織め、唇頭に締なくなりて、天竺燻木にされたる猫のごとく、骨まで柔かにして才藏の果報を羨みけり。

それより才藏方へ廻りて萬端を談じ、支度金として金千圓。之は借財の穴埋。養母を別宅させる當分の雜用、足溜ひの式といふにはあらねど、一通爲る事は爲ねばならず。何のかのと雜費を見積りたるなり。月々の扶持を金百圓と定めて、妾宅の經濟は之にて辨じ、榮耀は腕次第たるべし。

普請の落成までは深川の別荘に假住ひとして、明日にも此處を引拂ふべしとの御意を傳ふれば、何も承知

して二三日中にはと言へば、御前の特に申せとありしは、努々華美なる立振舞がまじき事は爲まじき事なり。これ外聞を第一とする御了簡なれば、可成穩便にすべし。其も畏みて秘々用意すれど、誰彼聞知りて話しき沙汰になりぬ。

かゝる目出度事に夜過同様の仕打もなるまじく、まして此處に金看板の顔と、華美は根が好きなる才藏の氣には、世間に義理を缺くほど此の穩便を切なかり、公の秘密にして相應の花を後に咲かせ、菊住も指を啣へて見よがしにして深川へ移りぬ。通子之を悲み、酒も美からず、座敷も寂しき秋の柳橋、といひあへるを聞く毎に、菊住は胸に袴々徹へて、はや後悔の臍を噛まむとすれど、及ばざるを憤れておもしろからぬ心を賺し、なほ熱は高きやうに小メと狂ふは、それ見た事かと世間の嘲の心苦しき、と二つには今才藏に未練ある顔せば、敵無き戦に勝誇りたる小メが我弱みに乗り、可厭なものなら切れたが勝しなご遣られては、それこそ身上の一大事、と只管媚を爲りて、癪もおしましよ、頭痛も揉みましよ、お出懸けには、お服物も直しましよ、と謂はぬばかりの仕向を、女は優しき心と歎びて、此様子にては此中おまへ百までに見えて、人に金もらひ、好いた男を手に入れ、女は大メと秘密を知れるものと洒落けり。

大盡此頃欣々として何事も手に附かざる氣色。とかく深川へのみ駕を回して寵愛限りなく、住居は何處が望みとあらば、閑にても寂しき所は可厭との言、女には尤なる了簡。さりながら寂しからぬ所は熱鬧にて、我通ふに都合よからず。双方の註文に適りたる地は無きかと思案すれば、才藏は向島が意氣にて住みて見たけれど、口元は可笑からず、奥の方は狐が出るとやら、中程は白鬚の近所こそ、人家もあり田圃もありて、風流なれど寂しからず。春は梅見、花見、夏は納涼、秋は草花、冬は雪と、四季の人出ありて浮世にも遠からず。此處に餘り廣からずして風雅なる一構、萬花車に仕立て、秩然と住ひたましよ。家造の誂を言ふまゝに聞けば、どうやら春水の中本にありさうな齋様。軒に葱が釣りたくはないかと茶を言へば、泉水に石の反橋架けて錦魚が飼ひたいといふ。されば龜井戸の天神様に、茶店の株を買うてやろと拵れば、貴方を駄の番と笑ふ。昔はそれにも劣りし餘五郎、と大盡獨り可笑かりき。此深川は假の住居と思へば心落着かず、早く向島に普請して、二階の窓から朝櫻が手水つかひながら見たいと願へば、彼所と極るからは普請は瞬く間、今月中には出来して、來月は四月よな。朝櫻でも夕櫻でも思ふまゝに見せう。其よりは外に見たきものあるべし。同じ花物の中にては鑑を出せば、かつらの花が見たい

三人妻

とは、取つて附けたやうな嬉しがらせと鼻で笑うて、然うでもあるまい。

(十) 風の柳 (下)

四月の十日といふ日、花も此頃咲初めて、百鳥の聲長閑なる日和、今日ごとく向島の新宅に移轉すれば、大盡の指圖なるべけれども何者の才覚か、勝手に諸道具不足無く整ひて、懸けわたしたる榎木、山葵おろし、庖丁、味噌漉、いづれか新ならざるはなご心地快ぞ。

十疊の座敷には天鷲絨氈を布きつめて、那の額の變な字は何といふ意と聞けば、那は篆書といふ文字にて、此家の名なり。語の意は土手の花にも勝される花の香る處、と大盡は嬉しがらせぬ。床の軸、置物、挿花にも心を竭して、違棚の飾物まで一々名ある寶ぞかし。二枚折の花鳥の金屏風は、特に才藏の目に留りて、切りに観むるを様に伴出し、此庭を見てくれと大盡の自慢尤なる風景。轉がしてある石一ツに、何十圓といふがあれども女には解らず、同じくは反橋に錦魚が御意に入りたらむものを。

椽傳ひに居間に入れば、唐木の長火鉢、糸錦の裯、銀の常喜世留まで備はりて、手近なる螺鈿の棚には、茶器一式を飾附け、紫檀の重單筥、時代詩繪の小箆筥、伊太利製の玉細工の手匣など、此中には何を入

三人妻

るゝかと思はる調度のみ。戸棚には座敷道具の品々、見渡して遺したるものも見えず。

旋て二階の二間、茶室、隠座敷、湯殿まで、連れられて巡覽りけるに、唯驚かるゝばかりにて何と言分も無く、萬般十二分に整ひたり。就中寝間の結構は言語に絶えたる贅を盡して、名も知らぬ異國錦の帳を懸けたる、才藏は一目見るより愕然として、見ぬ昔大名高家の御殿もかくやと膽を冷せり。

はや御酒の支度と立騒ぐは、廿歳ばかりの水仕女、素性は山ならで物馴れたる江戸風。舉止優しく働さぶりも鈍からず、今までさるお屋敷に御奉公申せしと見ゆる態あり、小間使は十六七なる女郎の小奇麗にして愛嬌あるは、淺草邊の砂糖屋の娘にて、行儀見習といふ名にて、嫁入までに自力にて衣類拵ふる下心なり。

此外に用心の爲とて、五十餘の老人を附けたり。此老漢の風を見るに、武骨一遍の間に自から威ありて、下賤の相にあらず。律義なる進退、角なる言辭、武士氣質を其儘に、昔は土佐藩にて四十俵取りし男とや。今食ふほどの藝無くて、葛城の手代藤井某を同藩の因に便りけるを、かゝる老漢丁度入用の穴へ推擧されて、今度此家の用心番に、月給五圓にて抱へられけり。名を大谷傳内といふ。劍術上手のよし、下手ではなごさうな名なり。表面は右の名目なれど、内實才藏の浮氣目附を役に、扶持下さるゝ大盡を譜代の主君

三人妻

とも思ひなして、随分忠勤を抽すべき心得、今日才藏の顔を見るより、美色は淫婦の相と、最早間夫ある心構へにて、聊かも油断せず。夜に入れば枕頭に寸延の一刀を引着けて盗人の用心、いかな深夜にも人の氣勢すれば、必らずえへんくといふ用意に、婢ども用事に行くことを怖れず。種々の重寶これで五圓は廉きものなり。

此日一日は閑なる小酒盛して、大盡おもしろく酔を催し、此味外には無き事と樂みぬ。まことや後に柱前に酒、懐中の金は無盡蔵にして、女は希物の艶婦。苦といふものは爪の垢ほども無くて心まかせの娛樂、總懸松でなくとも之を見れば、大方の人は稼ぐが可厭になりさうなものなり。才藏とても、心を通はせし男と切れて、思ひの外なる髻に根引かれたは口惜けれど、今日の心持は萬更にもあらず。今となりて見れば、大盡の心切卒に身に浸みて、義理から捨て難き氣にもなれば、おのづから待遇にも情籠りて、どうやら無理根引の花とは格別の處ありと見るほど、無性に御感に入りて、當分此へ毎日の御入來、御目附大谷傳内、これほど肩を繋むるなりけり。

(十一) 金と女

三人妻

爰に隅田川の沿岸に一町四方の別業を構へて、外見も内證も樂大盡の紳商住めり。日本の雪村素六と歐羅巴にも知られたる男なり。これも生れながらの分限にあらず。信州の山中に敗鱒を誕生日だけ二尾祝うて、三百六十四日生臭も出さず、米の飯は命危き病人ならでは味知らぬ深林に、穴居ならぬ申譯の茅屋をぼつ立て、五月雪消えて櫻寒く、松の焚火に面燃ほりて獸のやうなる人のみ。齒を磨くといふことも知らず、髪は棕櫚の毛と同じ物に思ひて、世中の樂は麓の五郎兵衛が宿で賣る赤馬を、茶椀で五杯呻るを此上なしと心得たる山男の性には、鷹が鷹か、鶏が鳳を生みたる才物。ふと思ひ起ちて山中を飛出し、流れく江戸に來にける頃、上野に戦争起りて、途に金装の太刀が遺てあるれど、拾ひ手の無きより思ひつきて、官軍の兵糧方に雇はれ、膽の太さは命知らずと言はれて、亂軍の中をのさくと寄席の人混を行くがごとく、敵が敗走すれば分捕心のまゝ龍宮の下男が庭掃除しながら珊瑚枝を拾ふもかくやあらむ、と石瓦のごとく落散れる財寶を手まかせに燃込み、味方が負けてさうくと遁出せば、後の雁になりて遺ちたるを拾ひ、いつも亂世であれかしと願ふ程仕事して、戦の息みたる頃には、はや江戸の町に一人前なる商人の懐中にありぬ。

其より追々仕出して、後には諸官者の用途を勤め、随分其筋の旦那衆に氣を着け、二重底の菓子折、下に黄金煎餅の贈物、下月も上月も之に否をいふものなく、雪村々々と最貢にして、外では千圓で請負ふものを顯然二百圓高いと知りても、我腹の痛むにあらねば、雪村に申付けて儲けさせれば、其一割は我へ來るとの心算。萬更自分に宜金を盗む事もならねば、人手を藉りて體よく好事して、髭を擦りて清き顔にて濟せり。ぬからぬ雪村はいつも此輩を玉に使ひて、莫大の利益は、白紙を刻みて紙幣に用ふことなる株を持てるに異らず。十年といふ間に日本の資産家に成上りて、今は世間も紳商と呼び新聞も氏の字を付くるぞかし。此男商機に敏しといへども、十九世紀には馬鹿の數減りて、誰も儲けることを忘れざれば、地道に品物を掴みて幾分といふ口錢の商賈にては、藝者一つ揚ぐることもならぬ大佛、巨い攫利を望まば、幻術にて不思議をせねば行かぬことを悟りて、金と女色を道具に用ひ始め、不自由せる奴は金で抑へ、それで行かぬ向は、女色で鈍らせけるに、凡そ四海に此二重の網を斷るほどの魚なく、面白く我手に入りて、死活自在の力は、此光るものと白いものとに止めたり。いでや種々此仕懸を人の陥るやうに工夫し、一策を案じて、向島は花無き時の田舎、自から往來に人目の遠ければ、と我別荘を爲になる筋の高貴の御方の遊場となし、いつにても御

暇の節は御宅も同様に御越あるやうにと、それくくへ吹聴し、酌人、給仕の名目にて十餘人の艶婦を抱置き、御客來とあれば花の如く衣飾らせて座敷に列べ、雪村は何彼の指圖を言立に御免を蒙りて席を外し、此女どもに東道を勤めさせ、男氣は客一人、女護島に吹着けられて、此に歸化せむことを願はざる男もなし。此中にてお目に留れる女ありと見れば、いづれも控へて其者をお手水に附かせ、無用の者濫りに入るべからずの小座敷へ案内して御機嫌を取るなり。身分ある方々は茶屋待合へ出入ることを憚り、陰遊びの場所無きに弱らせられるに、此所は少しも遠慮のいらぬ一人の別荘、隣に誰の飲むにあらねば、裸踊しても其場ざりの酔紛れ、女どもが轉けて笑みだけに事濟み、而も萃めたる艶婦にいづれ可厭なる形は無く、不自由知らぬ壺中の天地、と一度見えしお方の一度ざりにて思切るはなく、雪村が御用勤むる旦那衆は、此館を又無き處に悦ぶなりけり。一貴顯の優れて雪村を最貢せらるる方より、來土曜日某の誕辰なれば、心ばかりの祝ひの筵を開かむに、夕刻より参れとの御使。難有くお承申して、扨邊に取揃へたる御祝儀の献上物には、百事如意を織出したる西陣一卷、白熊の敷皮一枚、これは特に愛でた品なり。長六尺の油畫一面、少女水浴の圖にて、伊太利

三人妻

聖の墓寫なる裸體畫なり。此外當日席上の飾菓子に、有平細工の蓬萊の島、岨なる瀧には葡萄酒の絶えず流るゝやうに仕懸けたり。此人費合計千何百圓か知らず。日覺しき事と内見せるものゝ肝を潰せり。然れども此千幾百圓の近き内には一位進みて戻ることを念へば、何萬圓掛けても損のゆかぬ商法なり。時刻に伺候して品々を御覽に入れけるに、御機嫌麗しく、此の蓬萊の菓子は家内一同の目を驚かし、聽て手身にして席に持出づれば、一座之を悦ばざるものなく、大人は實にも老いたる小兒なりけり。招待せる客は十餘名にて、無官のものは雪村素六と葛城餘五郎とのみ。其他はいづれも、昔ならば同席かなふまじき方々なれど、兩人を見識られて、友達のごとく物おほせらるゝ御顔ばかりなれば、それく御挨拶申上げて席に着けば隣は葛城餘五郎。

久しく懸違うて會はざりしが、變りたる事もなきかと問はれて、話は數あれど、此席にては憚無く身勝手物語もならず。いづれも着座してお客顔で飲んではおられぬ身なれば、委しくは寛りと後にて、と各自座を立ちて、まづ主の君に壽杯を献じ、それより兩側に別れて御流を載きて廻りぬ。

新柳二橋に一粒撰を絹漉にしたる藝者ども、帶も大鼓に改まりたる白襟紋附、絹足袋の摺足、目八分の通

ひ、給仕は三指にて嚴かなる事訓ふべくもあらず、知らずば馬骨の錦衣きたるとは見えざる閑雅。半玉は皆一様の束髪、友禪染の振の袂を蹴へして、花間に鶯の木傳ふ風情なり。

やがて酔の回りかけて話聲も高くなる頃、此中に最も浮氣の君辛抱しかねて、これは餘り堅うて酒が染みぬ。いづれも騒がれてはどうぞ、と口を切れば、對坐に兩の小鬘禿けて、願髻に鹽の混れる御方、いつも柔かなれば、今宵は慰みの爲め四角張りて、左様然らばで飲むはどうじや、と仰せらるゝ口の下から、酌せる女の手を取りて、此間は我を盛漬して逃げをつたな、おのれと怨じかけたまふ。先の御方硝子盃を置きて、髭の濡るゝ麥酒の雫を拭かせたまひつゝ、我等は武家育ち、席の暖まらぬ間に飯食ふ修行せし身なれば、之が辛抱ならぬにはあれねど、日常放縱に身を持てる女輩が、然そやと不便でならぬゆゑといへば、此座の姉妹なる藝者末席より、御聲のせし方を頼みて、此方は恐多き申分ながら、四五歳の砌より小笠原流に躰けられし身なれば、御心配は御無用に遊ばされまし。此方が一同勝手と挨拶すれば、哄然満座の大笑となりて崩れ出し、亂軍の中の功名、我勝に馴染を生擒にして御側に引付け、なほ逃げむとするは袂を膝に敷きて放されず。各自好敵に亘合ひて、酒戦今を酣と見えたりけり。

三人妻

葛城の上席におはする方は顔に座中を見廻し、今日は柳橋の才藏が見えぬが、如何せしぞ、と御前の女に尋ねるを、餘五郎心に可笑く、御前御杯をと紛らせば、尋ねられたる女は鼻の心で笑ふやうな顔して、才藏は落籍まして、御前へよろしくと申しましたといへば、落籍たかと稀有なる眼色。臍に落しかねたる様子にて、何者に落籍されしぞ、と思はくのあるやらむ、根問したまふ。女は餘五郎の顔を見遣りて、上州とやらの大盡根引して、今は淺草邊に居りますとやら、其後また會ひませぬゆる、委しき事は存じませぬと申上ぐれば、好き藝者であつたと述懐めかしくおほせられぬ。此時ぐつと膝を揺らぐに驚きて振向けば、素六が聲を澄めて、聞けば到頭お手に入れたさうな。其願末がちと承はりた。度しても願はるる哉、知られては憂むも罪深し、と憂身を憂せし始終より、今は白鬚の邊に匿ふまでを語れば、那の女を手に入るとほどの濡事師とは知らざりけり。此頃に睦じき所を拜見といへば、易いこと、一六三八は出張日なれば近日御入を待つ。とは嘘にて、四九、二七、五十も會日なるべし。春雨しよぼくと昨夜より降續け、十時までも恥掻道具片附かぬ日和を候ひ、推参可申さ心得と笑へば、雨の朝に限らず、當分はまづ其仕合。成らば夕方より御出にて御一泊も苦しからず、と其上を行かれ、素六は舌を捲きて、當る

べからずと顔を撫で、黙りけり。
餘五郎杯を差して、他の事より足下こそ、近頃向島に美形を萃められ、貴顯への御馳走此上無く、いづれも御意に稱ひて、世界に無い圖との噂耳に入りぬ。下賤の某には候へども、其道には志篤きに免じ、三千歳の壽を保つてふ仙桃を味はせたまへ。某の君の特に心を懸けたまふ如きは、比類希なる媚骨のよしにて、甘露口中に満ちて齒牙三日香しとやら。さほどの名樹御手に入りたる果報、身を省みて羨ましき限なり。いかで近日内見を許されまじきやと言へば、少しく思附きて始めたに、案外圖に中りて御覺愛でたく、心を得たる取計ひと至極の上首尾。いづれも賣色の臭味無きもののみを聚めたれば、何や彼や問の抜けたる處多く、左右痒き處へ手の達かざるを、蜜柑も酸味あればこそ、甘さが望ならば砂糖といふものあり、と彼通がりの君の御詞。何にしても思召に協ひたるが此方の仕合。此頃に御問もあらば、手裁の野花御覽に入れたく、香は無けれどお目にとまりたるもあらば、一枝なりとも二枝なりとも隨意に手折らるべし。身は花守の曲もなし、蝶にも如かざる次第、と舐めた顔もせずして語る。

二人のひそく話聞はざれど、隣の君、此席にて俗なるかな儲話、妓前に米價を説くなかれ。飲めくくと

三人妻

各々杯を突附けられ、話ばそれなりに飲出し、満座の浮れ立つを、兩人席末に拱手して、荒磯の殿の如く、一向落着きたる顔にて身を硬うして見物する風情無さ。酌に来る藝者にお氣毒様といはるとほどの氣毒、歸途は新橋と思へども、もはや遅しと吹き合ふ中に漸くお立ちといふ聲置しく、茹でざる章魚ほどぐにやりぐにやりと、左右の女に扶けられて歸るもあれば、斷頭臺上月如霜と、亡友が絶命詞を舞ふ手頭半玉の目を拂うて、堪忍せいと遞ぐるもあり。思はくの女を曳きて、わざと暗きを行くあり。それぐの歸姿、似たるは覺束なき行歩のみ。

波のごとく押出せし跡には、藝者二三人と半玉ばかり遺されて一處に凝まり、杯盤狼籍として電燈の光白く、窓の外に樹枝を渡る風の音の聞えぬ。主人の殿の見えざるを聞けば、はや臥床に入られたるよし。あれほどの藝者をいかしたると尋ねけるに、御關係の方々何と言うても肯かれず、無理に手を取り馬車詰にして、今宵のお土産にお持歸り。我等は酉市の賤賤と、沽むかなの氣色も見ゆるに不便を覺えて、此女どもを相手に半時ばかり酌交し、又の日と玄關に立出で、御者を呼べば疑惚聲にて驅來る。おのく馬車に乗りて別際に、餘五郎素六を呼びて、近日是非といへば、此方よりもといふ間に鞭の音して、門外の大路を左右に。

(十二) 雪 盡 し

大盡才藏を我物にして三月餘になりぬ。何百人に騒がれて、柳橋の春色一人の身に繋りける女を、神にも指をさませず獨り占めて、金の力とはいひながら、難有く大事に懸くるならむ、と他の思はくとは格別に、此頃少し鼻につきて、内の瓜核も古し、豊頬をば、那ほど目に入るやうになりけり。さりとして才藏が可厭にはあらず、不用の品ならば譲つてくれぬかといふ人には、未だく首を掉るべし。無くては不足に思はるれど、在りて格別の珍重にもあらぬ折から、雪村の別業に不思議の代物ありと聞くより、はや浮心になりて、其をといふ念熾にして已まざれば、近き内に素六を尋ねむことをのみ樂みけり。男 心と秋の空とて、女は同音に男を卑して、おのればかりを操の堅きやうにいへど、歐羅巴の諺には、女心と冬日和といへり。これにて女にも氣紛れはありと知れて、男 女を論ぜず、隣家の冷飯は好きものと思えたり。とりわけ金持てる輩は、おのづから心おどりで、道ならぬ慾を起し、わざと仇なる戀を求めて、陋しき樂を食るなり。金無く問のあらぬ人は、不善を念ふを得ずして、あるほどの慾は米に奪はれ、月に半日講釋場に行きて樂めり。金無きは不自由の目に見えたるを、拵けて清貧を甘ぜよとは、其身の徳の闕けざらむ爲の用心な

三人妻

三人妻

れかし。
 来には御前と敬はれて、上流社會に籍を置けば所謂紳士なり。紳士といふは金持といふことにはあらず、諸人の手本となるべき人を指せる名義なれど、今は金ありて美しき衣服着れば、誰もかく呼ぶ慣習。餘五郎も理屈は無き錦きたる木拾にて、そんな事は糸瓜の皮とも思はず、我拵へた賞にて好きな真似するに、故障言うて来る所はない筈の丁簡にて、其處がどうも金持の面白さ。死身になりて人の稼ぐも、我儘の利かぬ世間に我儘をしたさの望ばかり。錢無しどもの要らざる理窟を言はうより、出来ることなら我等が真似の半分もして見よと、昨日の一儲に四萬圓は少ない分、未だ今月中に咄と入る口が三つばかりと豫算濟して、これから一保養と雪村の別荘へ馬車を驅れば、主人は二三日見えぬといふを電話にて呼寄せ、今日は我をも貴顯待遇にして馳走して給はるまいかと頼めば、貴殿はいつもく壯なるかな。我は今年四十八、貴殿よりは纔三歳の兄なれど、全く女氣を絶ちて、千の事ばかり心に懸るに、さりとは凄い血氣と誓むれば、乾びた言いうて我を誑かす氣の狸老爺、跋延しの樂筋の種は皆揚りて、此耳底にあるものを、我と共に百歳までも生きて浮かれむと言ひはせて、胸燃た了簡と言入るれば、然らば御同然に今が盛よ、と早速の承引。

三人妻

行けば一々不思議の間を突内して、表座敷に席を設けて、早く用意といへば、茶を巡る女は十七八、御守殿粧にして、黒縮緬の小袖に向島の雪景色の袖模様、帯の織出しは白茶地に色紙短冊を亂して、雪の秀歌名句を書いたり。いかさま、向島雪村の侍女、あれの名を都鳥といひはせぬか、隅へは置かれぬ美形なり、誰の持物と問へば、隠れもなき好人、某の君の御意入。いかなる望手ありとも我の外には、とまで御聲懸り有りて、君の御扶持にも預かる程のものなりといふ。
 我も今日は貴顯なるに、始めての顔にて手土産無くては稱ふまじ、と家内の人数を糺して二百圓出せば、貴顯の方々は這慶事餘りせぬものと素六は笑ふなりけり。
 膳の出づるを合圖に、廊下の足音長く續きて、出るわく。同勢十二人今日を曠と着飾りて、座敷の口に花壇を見るとき居列びて、一齊に頷ぎ、又更に唯今の御禮を申して餘五郎の前に隠り、其の中に最も年長けたるが二十二三の女、御酌と居去寄る。餘五郎盃を擧げてづとと胸せば、いづれも染色は異れど、襦袢模様は雪盡しにて、此女ばかりは更けたりとて、雪の若菜を板模様にしたなり。或は雪の松、雪の梅、雪輪、雪笹、雪月花、之はどれも解けるの謎にはあらで、雪村に因ませたる物數寄と覺ゆれど、見るに消ゆるばかりの

三人妻

思するに、縁無きにもあらずと餘五郎目を細くして悦べり。
 唯今お酌申せしはお聞及びのもの、名を角とはいへど豊頬を怪まれな、と洒落に紛らして其と知らずれば、
 成程々々と言はれて、さつと顔を赧め、少し退りて俯さぬ。其可憐廿歳越えたる女とは見えぬ。此真似ばかりは故として成らぬ事、と餘五郎一廉目利して、先お近附の證に一杯とあれば、おつゝ載せて、酌する手に目授すれば、心得て雨滴ほど滴しぬ。返杯は餘五郎益々と受けて、一同へ杯上げたけれど、迷惑なる人もあるべし。此方とても一々の返杯に預かるは面倒なり。何事も手取早きが當世なれば、大きな物にて一度に受けたし、皆も惣懸りにて一度に酌したまへ。之にて受けむ、と有合ふ銀の杯洗の水を捨て差出せば、素六手を拍ち、見事なる御手元拜見と、箸をおきて見物す。女どもは興がりて、二本の銚子を交代に持ちて十二人酌すれば、酒は器の中に浪打ちて、見るから小氣味好し。
 此酒は十二人の酌なれば十二口に飲むべし。一口毎に下物無うては可笑からず。これも一同交るゝに箸取りて、我髭髯を推分けて口に投込まれよといへば、之はついに聞かざる葛城殿の一藝、所望々々の聲の下、それ飲むぞとがっぷりやれば、十五になる靜といふ子が、玉の如き手に携、肴を一口挟み、袴の中なる古

井月に、惻々嗷して慌て箸を置く。後の下物の川意は好きかと飲めば、十六になる宮といふが、振袖を左の手に抱きて、雷のやうなる我口を開きながら生薑を入れぬ。

呼吸をも繼がせず十二人下物を挾めば、約束通り一滴も残さず飲乾して、隨せるやうに杯洗投出し、これが昔に在りしと聞く、驚飲か、ほうとばかりに大息を吐きたりけり。

大量にもあらざれば、此三合ばかりに酔を發し、折しも糸の音がせでは素麴に辛子無きに似たり。此酒を骨まで沁ませるには、是よくと撥取る手振に、餘五郎左利なれば、我知らず右の手の上れる態の可笑きに、女ども取外して一度に哄と笑ひ、之も愛嬌になりて面白き方と囁かれけり。

三弦弾けと素六の指圖に、少女二人立ちて二挺持來れば、お秋お蕨とて顔も好けれど、藝は又其上を行く二人が謳出したる吾妻節にて、墨田川に寄せたる新唄を弾けば、残る十人妙音を絞りて魂も蕩けよと謳ふ。此節幽雅にして艶あり。文句卑からずして濃に情籠れり。鬼のやうなる武骨も此節でやられるれば、忽ち筋弛みて骨殖れ、四角の膝もおのづから解れ、轉輾りて嬉しがる希代の媚藥なり。況んや餘五郎、酒に性無き腸を此一曲に掻撈られ、之を引導に往生の途げたやな。身は崩れて死ぬとも厭はじ、今一曲、あれ其

三人妻

三人妻

聲の好き、此節が耐らぬ。最一度今一遍と無性に所望して、聴きつゝいつか假往生の肝を立つれば、此處は廣間の寒に風や引かむ、小座敷へと素六の辭に、十二人懸りて、土塊に落花の粘きたる如く、大の男を手昇にして奥へつれゆき、紗綾の蒲團に緞子の夜衣、錦の房付枕、寢覺の觀には枕頭にお角を附けたり。

* * * * *

いかい馳走になりて近頃の快樂。我が遊びたさばかりに遠無き身の主人を呼寄せ、無理を願ひて然ぞや迷惑に思はるべし。最早歸らむと立上るを、お角は少時と呼鈴を鳴せば、先に酌に出たりし少女の一人が、徐に紙門を開けて入口に手を支へぬ。

御前はと問へば、先刻日本橋より急の御使にて歸らせられしが、御客様御目覺の上は此由を申上げ、ゆるくお遊びあるやうにとて、次間に御酒の支度も出来てをります。其を此へと言付け、葛城に今一献といへば、否にもあらず、餘り長坐は嫌はれの基と、眩まつ座に着けば、杯盤出でたまは酒になりけり。席間の賑はしき酒事とは趣を異にして、献酬閑に、戯言も身に浸みて興深し。半日ばかり一人にて附添へば、お角も解けて、三指の中に心易き處の自から見ゆるは、葛城が腰据ゆる氣にもなりたる美味なるべし。

三人妻

夕暮より飲始めて十時過ぎるまで杯を収めず。夜も更けぬれば今宵は泊りたまへと切りに勧めむれど、二三日の中にはと此處を出で、本宅へは道遠し、久しく打絶えたるお才の顔をも見ばや、と白髪へ行きて戸を叩けば、支關に寝たる傳内、應と答へて小窓より手燭を差出し、殿様の御出と喚けば、家内騒がしく人々驟起きて、お才は暖衣の上に被風着て、出迎ふる姿の寒げなり。

馬車は選して内に入り、奥の小坐敷に通じて、湯は無きか、茶が欲しいといへば、お才は躬ら火を吹きて、冷えかゝりし湯を暖めつゝ、近頃弗と御出のあらざるは、外に増花といふも古けれど、其に外ならぬ御樂筋の今宵もお歸りがけか。いそがしきお身にも此後は一週間に一度はお顔を見せたまへ。我物にしたから可いわと捨置き給はば、徹が生へて如何もならぬやうになるべし。其頃顔のひりくするは、其所爲か知らぬと頬を撫づれば、餘五郎阿々と笑ひて、餅も徹が生へてから格別味の出るものなれば、其方を其の意にて、旨くしてから十分食ふ氣なれば、捨置かるゝとは思ふべからず。龜裂が入りては所爲無ければ、大事にして風に當らぬやう、大きな袋に入りて戸棚の天井に釣られて時節を待つべし、と鼻涙もひりかけぬ言分。其口の憎さと流盼にかけて何も言はず、但恨を呑むやうなる態を見せぬ。

三人妻

煎初の茶に舌鼓して、急須に二三杯流しこみ、酔うたくと寢床に入りて、翌日の十時頃に目覚むれば、はや馬車は迎へに來りて、手代頭の林田より、出社あるべき旨の書面枕頭に在れば、今日は久しぶりにて暢りと飲まむと思ひしに、とうやら雪村の別荘で言ひたさうな言を此處の間に合すれば、お才はお門連と打笑みて、さほどの御志もあらば、今日御用濟の上、昨夜のやうに寄道せず御出下さらば、一時が二時までもお待ち申します。但し然るまでに敵が生へませぬかといへば、餘五郎罷を撫でも、是非來て見せう。

(十三) 佩刀の鏽

餘五郎はお角の情に絆されて、二日経ちての今日、然に奪はれし心の、間になれば色に忘れず。向島の戀ひしけれど、雪村の迷惑を思へば、押懸けて酒飲ませ給へとは鐵面皮の至なり。さればとて月に一二度の首尾にては、此熱を冷し難し。好工夫もがなと案せしが、假令彼は賣物ならざるにもせよ、素六も金銀は身が冷ゆる大毒藥と怖るゝ質にもあらざれば、損のゆかぬやうに持懸けて口説かば、事は易からむ。と雪村の商店を京橋に訪へば、今朝一寸見せまして直に他出致しました、と二十四五の風俗生意氣なる若手代、語調尾揚に應へぬ。何方へか、行先を知らせたまへと言へば、知れかねますと面倒なる顔色。若き女が物を

三人妻

問へば、無用の心切を盡して、男子或は年寄には不愛相なる、此年齢の常なり。女は弱きもの、誰も扶くる志はありたきものなれど、一層弱き年寄を酷くする事更に理なし。我主人を尋ぬる人に不禮なる、いよく奇快なる了簡なり。かゝる不心得の奴世間に多し。二度買った女郎に頼まれて、理無く心中する輩は此仲間より見立てらるゝぞ。這度男には目も懸けず、佐分利氏に會ひたしと言放てば、店に居合せたる四人の若手代、揃うて氣に吃はぬ顔して、一人が濫々立上り、御姓名はと尋ぬれば、葛城餘五郎と名乗る聲に、いづれも吃驚して卒に立騒ぎ、百眼よりも手早く笑顔をつくり、搦手の音を立てゝ世辭いふこと限りなし。始に取次ぎし男氣輕に階子を駈昇れば、支配人佐分利數馬急足に下來りて、葛城を見るより腰車く、まづ此へと應接所に案内して、茶と煙草火よと躁ぐ。

格別の用事にはあらざれど、ちと御面談申度事ありて態々参りたるに、御不在とは遺憾なり。御出懸先を承はりたくてと言へば、今日は桃谷伯爵方へ伺ふ由申道せし。歸りの程は分りかねるとあれば、此上尋ねべき事も無く、執務の妨碍せる段を詫びて立出でけるが、桃谷へ追行きて會ふほどの用にあらず、さりとて此儘歸るも鈍し。白髪へと命すれば、駿足飛ぶ如く轉て長堤にかゝり、雪村の別荘を過ぎむとする時、門内

三人妻

の新樹縁深く、兩三聲の啼鳥我を呼ぶかと心變りて、今日は間なる女ともが午睡の夢を驚かし、寝
 亂髪を笑うてやらむ、と馬を駐めて門に入れば、奥を蔽せる網代垣の二曲、折れて支那の正面に出づれば、
 馬車一輛石階の脇に控へて、馬も見えざれば御者も馬丁も影無く、裏の流に飲ふならむ。今まで幌の上に
 鳴ける蟬の人の足音に驚き、垣の外なる合歡木の幹に飛びて徐に鳴音を續けぬ。
 近づきて馬車を見れば、丸に釘貫は桃谷伯爵の紋なり。扱は彼を引込みたるか、素六の肚裏も讀めて、こ
 れは特に遠慮すべき客なり、内へ入らむは心無き業なれど、雪村に一目此處にても會ひたく思へど、我在る
 を知らすべき因無きに困じて佇むを、何處にてや認めけむ、給仕の女一人驅來りて、ようこそ御入來と
 いふを、お客様には内々にて、殿様へ通じてくれよといへば、呑込みて入りけり。
 奥よりの足音、聲ははり靜にして男とも想はれず、と耳を飲て、窓下の薔薇の花を見入りたるに、御前様と
 聲懸けられ、見れば、素六も粹かな。一目に肉の動くも其理、實は之に用あるお角なり。小座敷へと竊に言ふ
 は難有し。されども今日のお客はと牛もいはず、知れぬやうにして、手を取らぬばかりに引上げ、此前
 轉駢の間へ案内して、今日はようこそと、素六の指圖か知らねど、我を待兼ねたる所爲。かうされる理は無き
 にと首を捻れど、胸に落ちやることなり。

三人妻

今日は少し話ありて來れるが、彼方に客のあるに我へは構ひたまふな。座敷に此方一人無くては、十五夜に
 雨降るも同じかるべし。早く行て拜ませよといへば、我の行くまでお合手せよと申付けられたれば、お邪魔
 ながらそれまで御辛抱遊ばしと、羞らひつゝやうく言出でたらむやうなり。
 實は主人には會はでも可けれど、と持たせかけむとすれば、此方も左様存じてと素六のぬつと現はれたるに、
 餘五郎度を失ひて、爲やう事なしに笑へば、實は此方には用無しとや、其は餘り現金と申すものなり。わざく
 御挨拶に罷出でたる素六の顔を立て、何なりとも一言仰せらるべしと言へば、細語には随分嘘もいうて、
 嬉しがらせるも方便といふをお角が聞答め、多度御方便を難有うぞんじます、と不意の挾撃を餘五郎物
 ともせず、方便ならぬ實を言うて見れば、双方に用ありて参りたるものなり。まづ御主人の方を纏むるまで、
 其方は次に待つべしといへば、畏まりてお角は座敷を出でぬ。
 扱改まりて用といふほどの事にあらざ、さるを今朝は社を尋ねて、此處までも逡懸け來たる某を、それでも
 葛城餘五郎かと嘘はれな。

三人妻

玉の^{さか}肩^{せき}二重底の念入、色には脆き男の、ふとせし事より浮身を^や寝して、今更面目も無き仕合、と冒頭のみにては話の筋が分らず。手短く其後をといへば、先日御馳走より病付きて、日夜彼者の忘れ難く、家は外になりて、魂更に据らざれど、此處は何をいふにも浮世の外なる別荘、思ふまゝに訪來む自由の利かざるより、心はいと亂れて、此處面も戀ゆるにや、衆の^や瘦せたるといふに、我ながら蓋かしくも可笑し。用とは此處にて、いつにても此方勝手次第に此門の通行なりて、唯一目の首尾をも心まかせにしたき願、聞届けられなば此上の望も無し。但し本筋の客來ある節は、遠慮すべきは勿論なれど、かく道ならぬ事を申出るも、切無き心の餘と、^ま枉げて御免しあるべしといへば、素六も然るもの、餘人ならば唯^んとは言ふまじき所なれど、此男の富は平民の帝^{みかど}ともいひつべく、こればかりの事を枷^{かせ}に此方からも無理の利くべき末を見込みて、猶^い豫の氣色も見せず、事も無げに打笑ひて、扱^あ承はりて驚き入りたる御執心、聞えし柳橋の強者^{がうもの}お才の方をお手に入れられたるも御尤と、今やうく思ひ中^{あた}れり。

此家は御存じの組織^{しきみ}に出來たるものなれば、本筋の客無き折は、暑中の火燵も同じく、睡用ある者もあらざれば、有無をいはず御望に應ずべし。但願くは此處へ出入らるゝ事を^{ゆめ}努^め人に語りたまふな。もし過りて客

三人妻

筋の耳にも入らば、遂には珠履^{しゆり}の跡に^{こけ}苔^けす始末にも成行かむ。それだに御含み下さらば毎日の御出も苦しからず。彼者一人にて事も足らざらむには、十二人片端から御佩刀^{おんばか}の鏽^{さび}もしたまふべし。何も厭ふところにあらず、と世に快き挨拶。さりとは恐入りたる御大氣。眠の覺めたる心地して、今になほ胸裏^{むねうら}の清しと。さらば御言に甘えて、毎日も罷越すまじけれど、随分快懐^{うらやま}く御門を出入るべし。之は御客來中お邪覺申して、然も無體^{むたい}なる願事^{ねがひごと}も慥^{かな}へば長座は御迷惑、と別を告ぐれば、今日は御閒の身ならば此處にお預けなさるべし。彼の者は彼方に顔出さずとも一向差支なければ、奥の小座敷にて餘所を憚りつゝ、涼しき物にて一盃^{ひな}飲まれて、一睡^{ひな}なさるゝ内には、片陰も出來て御歸に次手よし。此を濟ませ次第白鬚への思召か、日中の風は川岸にて此處に勝れる處なし。栗^栗の滴^{しづくた}るやうな月を葉越に眺めて蛙^{かはづ}を聞くは、御別邸が無類なり。日没まで此處にて寛りとしたまへ。中座は御免と立ちけり。

餘五郎望外の首尾を悦びて、素六奴隷無き我頼を牡丹餅打にして、唯は措くまじ。旋てどれほどの事を強^{わた}るにか有るむ、と北窓の前に足踏伸べて、何の花の匂ひが、持て來る風を枕に、木葉^{このは}を炙^{あぶ}る日の色を眺めて、やや睡氣^{あつ}催^{もよほ}けるに、お角は水淺黄の縞^{まじ}に衣更へ、真白^{まじ}の膚^{かわ}は袖に透^すきて寒泉^{かんせん}玉^{たま}を浸^{ひた}し、一目見るより午^{あつ}熱

三人妻

は風に霧の散ることく、此座敷に涼しくなりぬる想して、今日はまた格別の姿、江戸に名所の角田川には、これほどの女無くてはと、はや戯れかゝれば、手にせる蘆柄團扇にはたたくと鼻頭を扇がれ、息の止るほど嬉しきにぞありける。

此日を飲暮して、晩涼水の如く、これから人の杯を憶ふ時、身の措所無き蚊の聲に、惜き別れの夏の夜は、鴉より憎きものありと言捨てに立上れば、庭の聞ければ御見送り申すべし。灯持て来るまで此處に待ちたまへと行かむとするお角の袂を捉へ、いらぬ事すな。闇が仕合の粹なる天に對して恐多し。酔うたぞ、儼るぞ、肩かせ、とお角に縋りて戸外に出づれば、葉末の露に面を拂はると具合がどうも謂へまい、と故と恐がる木下闇に曳込めば、お角は聲を揚げて、其樹は毛虫の巢といふ間に、ころりと餘五郎の肩に墮ちたるものを、之かと威す氣で摘みたる手觸に、はつと投捨て、居たくと駈出せば、お角の蒼くなりて叫ぶ聲に、内庭に盤逐ひたる七八人の女ども、何事かと前後を争ひて此處に聚り、毛虫と聞くより身を縮めて浮足になる處へ、餘五郎捨りたる紙を撮みて、此中に大きなのがと持來れば、わつといふ聲四方に散じて遁廻るを、面白がりて逐懸ければ、涙を出して泣くもあり、石を手にして身構ふるもあり、少時響動めきける

三人妻

に、何時やら背影を匿して見えなくなりけり。
餘五郎獨り大笑ひして、逃げをつたわと四面を詢し、そろりくと垣の曲りへかゝれば、待受けたる六七人一度に聲を揚げて踊出づるに、咄嗟と驚くを見て、復讐と喚びて遁散る。殘れる一人の笑聲は、お角かと言は、唯とは難有し。有繫に實はありけり、と手を執りて門外に出れば、御者は車の戸を開けて控へたり。世中にこれほど割に合はぬ、冴えぬ役はあるまじく覺えぬ。主人が彼方へといへば、雨にも雪にも面を露して、へいくと馬の臀を鞭撻き、仔細らしく手綱揺繰りて、道なる人を叱るばかりが役徳なるべし。むかし愛子の御者の揚々たりしは、参朝の途中の顔色にてやありけむ。其をさへ女房は氣性ものにて、間拔なる此方の人、と蹄の泥の鼻下に潑ねたる面を哈ひしとかや。葛城が御者の喚は何者か知らねど、此態を見せたらば何とか言はむ。旦那は奥にて艶婦を對手に數々の娛樂、酔うて寝て覺めて酔うて、正午から今まで凡七時間、此間門外にて卷笈の四五函も吃し、砂に塗れ、日に照らされ、馬の囁語を聞けども可笑からず、賦の勘定もして見て尙可笑からず、日のある中は馬の蠅を逐ひ、夜に入れば蚊に苛まれ、人は閑なるほど苦しき事なしといふに、さりとて御者馬丁の退屈は幾許ぞや。之をも忍ぶべくむば、歸りて隣の寶を

も数ふべし。されども閑なるは、なまなか忙がしくて錢にならぬよりは勝し、と當人たちはさほど苦にもせず、時間長く待たざる時は、車の内にて花合せといふ事をして慰みぬ。此根生でこそ御者も勤まれ、世には眞影流の達人にて、櫓の棒擧げて犬殺になれるもあり。

(十四) 煎餅屋の娘

約束はこれより白鬚へ行くべきなれど、此所にて樂は足りたるに、風は涼しくとも月は佳くとも、蚊に食るゝが可恐し、と馬を南頭に立直して、日本橋なる家に歸りぬ。

翌日は逆れ難き用事ありて、夜に入りても忙しく、十時過る頃やうく我 驅にはなりけれども、おのが家にもあらぬ月下門を敲かむは、寮 守を始め其外の女共の手前、主顔なる振舞の迷惑を念はざるは心無し。素六も聞かば面白からざるべし、と今夜は内に寝る事に定めて、麻子の酌にて久しぶりの寝酒を飲めば、此婆もはや心まで洞びて、若き時とは格別の相違なり。

家事向の雑談一通り済めば、金儲ける話、儉約の話、養生して長命せよの話。全く女房氣になりて、酒の席には置かれぬ代物に戀り果てたり。酔うて腕の割 青出して、木遣節唱ふ元氣は無さかと嘲れば、男は死

ぬまでも其氣合にてよし。女は世帯持ちてからは、紙に澁を引きたるやうに、外見はよろしからでも、物の用に立ちて、丈夫向なるを最上とするものなり。夫の酒の對手して、葛籠の後なる三味線取出し、今は行らぬ流行唄を齒抜聲して唸るを面白き了簡にては、九尺二間の家内にも治まることにはあらず。五厘が菜漬買ふ世帯にては、米を漸消 炭を掴み、下帯も洗へば便所の掃除まで、手一つにするが役目なれば、某所小町とか福助 娘とか言難されし娘にても、半歳とは経たぬ間に世帯寂びて、時雨る庭の菊のやうに見る影はなくなるぞかし。又は官員の奥方、大家の内儀、米薪に屈托無くても、分に應じたる苦勞といふはあるものにて、身代よろしければ其だけに氣を使ふことの劇しき譯は、自身 眠せざる大將の、器量人に優れざれば勤まらぬに同じ。

此心配苦勞の爲には、牛乳を飲み、肉を食へ、湯は何十度と定め、住所は山の手、と醫者の指圖通りにしても何にかなるべき、肉おちて色の悪しくならぬまでも、血氣自然と衰へて、容貌の醜うなるは免れ難し。男は然りとも知らず、女房と疊は新しきがよしなど、と言ふ口の歪まざるを難有しとも思はず、内の噂の昔に變れる姿に愛相盡して、餘所の女に狂ひ散らし、我女房の衣類を盗出して不義を樂むもあり。お岩の芝居

三人妻

を見るに、伊右衛門といふ奴女房が煩ひ惱める床の、蚊帳を引剥ぎて質入する處あり。世間の亭主の非義非道なること、大小はあれども此鬼の心意氣に露違ふ所なし。之れを思へば、凡そ人の女房は給金無しの炊、妾といふものゝ如し、給金くれても此様にされては、誰か腹立ちて逐出するものあるべき。さるを女房は愚痴も大聲には言はれぬ事になりて、天下にありとあらゆる滿らぬものゝ惣本家なりけり。恠く夫に飽かれ疎まると因を何かと念へば、妾の醜く、容の淺ましくなれるが爲なり。之をまた何ゆゑにかといへば、世帯の苦勞するに外ならずして、此苦勞は道樂にする事にあらず、家を懐ひ夫を懐へばなり。その女房の難有き事は思はず、面の皮が茶色になりたるばかりを大恩に換へて、疎むといふ事畜生もすまじき無道なり。身賃にして朝暮の烟も颯げかぬる家に犬ありて、之に教へられ、垣の根方を掘りて莫大なる金銀財寶を一緘に獲む人あらば、此男は犬を何とかせむ。純子の袖に載せて三度に牛の精食を食はせ、跪れたらば骨を葬り、皮を祭り、守神にも崇めて、其家の續かむ限りは祭祀を怠らざるべし。人の女房の其家に功ある事、金銀財寶の形こそ無けれ、其にも劣らざる重寶になりて、畜生の出来ぬ事を能く爲る人を、犬よりも酷たらしう取扱ふは、更に謂無きことなり。さればにや、女は罪深きものにて、前生

三人妻

の報に因りて、かくは生出でたるぞ、と説教にもいはるゝ身の因。果を啣ちつゝも、女房となれば家を治むるが役とて、其だけは爲すにも置かれねば、身を慎み心を堅くして、世帯の監督を勤むるぞかし。此大役を持つ身の、放縦にして埒の明くべきや。なるほど我を人の昔ほど問ふものあらば、憚らず湯島天神の矢場女、異名を蜘蛛のお重と名乗るべし。されども楊弓の的の規ひ方はと尋ねむものには、今は日本の葛城餘五郎が妻麻子と座を正して、無禮の舉動あらば目通りを退すべし。さる身分の御方が驚らばしき猫の皮を膝に上げ、賣女に等しき色言葉に戯むるべきや。藝者が欲しくば新橋、柳橋、御馴染のある方より召したまふべし。此方は器量萬夫に優れ、素手より此身代に仕上げしほどの御方なれば、尋常の男のすなる道樂を爲たまふを、悪しと咎めするにはあらず。親より預りたる金にあらねば、一代に皆無にしたまふも御意次第、其も亦善。されば此方の今の行ひに非を打つにもあらねば、さらしく愚痴をいふにもあらず。但一言の、割青出して木遣節唱ふ元氣は無さかとおほせられし、元氣がちと瘰に障りて、それよりは數百層倍の元氣あればこそ、此家の女房が勤まるといふ事に、お心の着かざるにや。物の陰なる花は人の見てくれぬが口惜さに、よ

三人妻

しなき事を申して、定めて御酒の不美まじかるべしと笑へば、又叱らるゝか知らねど、女房がいつまでも年寄らぬものならば、藝者買ふ世話もあるまい。そりとは仰せの如く今夜の酒の不美、飲むほど醒むるが不思議なり。

山やま神のかみの靈れい驗げんはどれほどか知らねど、これなれば内に臂しりも据すらぬ筈。人間四十を越してからは、血氣日々に衰行くばかり、此時滋潤じゆん回春くわしゆん劑ざいを投なげざれば命いのち保たもち難がたし。蠟ろうの數かずの一筋も殖ふさぬやうにせむとには、唇しん頭とう一片の紅べに、淡粧たんそう白粉はくふんの臭におひにあらざれば、外ほかに何か奇効ききうを奏そうすべき。不老不死の薬といふも是れなりけりと、昨夜ゆうべの長談ながだん我われへ言いふにはあらずといへりし言質ごんしつを取りて、今朝も早く飛出し、四ヶ所の商社を巡りて、商あひの模様を監まるに、今年ことしは近年ことしに無なき好景氣こうけいき、仕事は皆上り坂のどんく拍子。一年は袖そで手てして遊びても、冥理みやうりには盡まじき利りあり、と直ただ様雪村ゆきむらの別莊べつしやうへおつ飛しけり。逢あふ度毎たびごとにお角かくの風情ふうじやうに澤つが、心意氣こころげは耐たらぬほど面白く、どうやら本物の様に見えて、附燒つけやき又またとも想おもはしからざる處あり。之では捨てゝは置かれぬ氣になりて、餘五郎よごろうの心こころはいと聞きになりぬ。夏なつの日長ひながけて風かぜ洲す簾せを弄あそび、疊たたみに實梅みづめの影かげ重おもく、花はな稀まれなる關せきの床とこに仍なほ香かほる小座敷こざしきに端居はしるして、物思ものおもは

しげに團扇あむぎの柄えを嘔かむお角かくの姿すがたを熟つくく見入れば、身内みうちよりとろくと脂あぶら出でる、此儘このままに肉にくも落おちて、骨ほねばかりの餘五郎よごろうになるかと、氣きも心こころも消き々くになりぬ。之を花はなに喩たとへたならば、日影ひかげを眩くらく、少し面おもてを背そむけたる紅梅こうばいのごとし。お角かくとは下作げさくなる名なを呼びたるもの哉、紅梅こうばいといふ名なにせよ、と商人あきんども有あり雅みやびの心こころを動うせり。

可厭こえんがるものを無理むりに紅梅こうばいにして、名附親なづけおやが引手物取ひきてものらすべし、と槍垣やぶを金時給きんときたまにして、紅梅こうばいの花はなには小粒こつぶの珊瑚さんご、幹みきの蘇苔そがけには「えめらるゝ」とを鐵てつめたる差櫛さしを造つくらせ、嬉うれしうなる顔かほを見るが樂たのしに、行度毎ゆきごとの手土産てみやげの中には、お角かくの心に染そまぬもあれど、高金たかかねを吝しんまざる品しなのみなれば、これにしても可厭こえんなるは無く、身のまはりの一切いっせつ悉しつく餘五郎よごろうの心こころを籠かごめたる物ものばかりなれば、之を着飾きざりて他ほかの席せきへ出でづるに、野中のなかに一本いっぽんの牡丹ぼたん咲さきたらむごとく、お角かくばかりが優あれて目立めだてば、客きやくは肩かたを擡ためて、彼かれはと我われ馴染なれぞめを棄すて、此女このむすめの名なを多く呼よぶことになりぬ。

其實じつじつお角かくより肩目美かためづみ、さ女むすめ二人ふたりあれども、木棉もめん着きて立並たてならぶ時ときの外ほかは、身みに着きく諸道具しよたうぐの立派たてななるに、五割方ごごわりお角かくに風情ふうじやう添そひて、人ひとは此中このちゆう第一だいいちの艶婦えんぷと見紛みまがふなり。之を聞きく餘五郎よごろうの喜よろこびは、いよく發奮はつふんの基もととな

三人妻

三人妻

りて、思ふまゝに金を費して、恐なる親の我娘を祭禮の舞踏に出すほどの張になりて、我見る目よりは人に響けらるゝを樂むほど餘五郎の感弱強く、日本一と賞れたる男の肩衣外して、迷へば賢愚も無差別なり。なるほど在五中將は忍ぶ闇夜の垣の崩れより、犬吠して通ひたまひしに、御存じの烏帽子狩衣姿にて、脱けさうなる靴を召されし御状は朝臣なれども、茨に面を撞かれ、脊中に泥を粘けさせられし御心意氣のほどは、とんざろ坂の芋右衛門が頬冠の鼻唄に唐蜀黍の茂みを押分けて、入る月を惜むも同じ理なり。唯譯も無く埒も無く性根を亂して、暮はるゝ身は聲男も情からぬにや、外に又思はくありての事か、それは朋輩も識らず、誰の目にも着くは、お角が此頃の様子、浮く時は留度も無く浮かれ、沈む時は病あるがごとく沈みて、一念此の男に打込みたる氣色を見道すものなかりき。

此事いつか素六の耳に入りけれども、聞かぬ顔にて何とも言はずりき。唯女ばかり十餘人の、姦しごと、お角の仕合を妬む餘り、部屋々々にて陰言は更なり、折に觸れては酒の席にて、客の前をも憚らず、謎のやうに此事實を微見かせば、誰彼聞知りて、相手の誰かは知らねど、事實は一々證據ありと、お角を捉へて諷するもあり。何の事か知らず、聞かざるに紅梅と呼びて、水破抜たる氣の御方もありけり。

三人妻

餘五郎が迷へるほどの熱度にてはあらざれど、お角も此罷を憎からず思染めける氣色にて、訪來る日を樂みに、會へば半日は放さず、歸してからは朋輩に誦らるゝを結局、婿の様子なり。今宵も餘五郎を還して、千話の名残は仍耳に留まり、思はず獨り笑まるゝ顔を木間の月に掩して、蚊帳に涼しごの入るまで開けたる窓に掛れつゝ、其身の行末を慮ふるに、此處にいつまで抱へられて、僅の衣服出來たりとて、何にか成るべき。女の身の賣るべき花は色のみなるに、年老けて肌理疎うなれば、構ふもの無きと、今は彼等が卑卑むる男に、頼むやうにして添うてもらひ、一生味噌澁藪けて芥溜の傍に老果つるは口惜じからずや。

親は築地に其日暮しの鹽煎餅屋。活計の苦しさに我に色を賣らせ、月十圓の給金にて此家に住込ませ、其内七圓を家の扶助に、兩親も此頃は襤褸を下げず、折々は魚類も食へらるゝほどになりたるが、我十七の年よりはや色を賣らす下心に、妾の口を望みけるが、いづれも相談にはならぬ安妾の申込のみなりけるに、我容色を惜みて滅多に賣らず。後の出世の端緒ともなるべき高家の對手をこそ願へ、一月限にて馳の道の旦那取るは、可厭な事と更に取合はざりしに、此年の春此方の話を聞きて、家内中の望む所、と早速上

三人妻

りて奉公して見れば、中に入りし男の言に違はず、御殿がりの家内の模様。御給仕する御客様は、新聞にて御名を聞くよりは、拜謁なるまじき雲の上なる歴々の御目通に出で、角よくと親しく御言を下したまはる冥加なき。おのれも煎餅屋の娘の顔はせず、尊き御方に、酒の席とはいひながら勿體なき言を申懸け、其をも御心に障へられで、御情を懸けらるゝ仕合は、親ともは固より己にも夢のやうにて、譯が分らぬほど出世したる身になれば、又此上が考へられて、出世といへば、出世といふやうなもの、御酒のお對手なれば取も直さず藝者なり。御意は括かれず御枕の塵を拂ふ身は、女郎に異ることなし。誰れと一人に定まりたる妾ならば、其れにて身も落着き、行末も心易けれど、今の有様にては何時暇の出やうも測られず。よし又暇が出ても、三十四まで主持ちては、風引きて薬一つ飲むにも、茶碗を戴かねばならぬは愁し。

さればとて此處を出で、身を定めむにも、裾摸様の紋服着て綿帽子冠りて見すればとて、出處は知れたる煎餅屋のお嬢様を、奥様といはせる器量人は婿にはならじ。左右は此處に馴染める人もあらば、身を任せて未々の事を計らむもの、と忘るゝ間は無かりけるに、いかなる神の引合せか、詭へに寸分違はぬ葛城様。

大盡の名は日本國中に鳴渡り、妾百人持ちても差支無き身分ぞかし。

此人に頼までは、と初めての契りの夕より念はざりしにあらねど、我を一時の玩好か何ぞや、心の知れざる人にむざとしたる事言出して、慾深と底を見られなば、憎からぬ思も忽ち消えて、其場から離るゝは知れたる事なり。焼櫛したる茶碗の打付ても、其處からは割れぬまでの日が経たでは、滅多なる事は言はれどと氣を撓めて待ちたるは今日此頃なり。十に九まで否とは言ふまじ。泣付ても身脱してもらねば、又と恚る時節はあらじと、横になりてから、餘五郎口説の文作を種々に工夫したりけり。

(十五) 砂糖餅

餘五郎總に素六を談じて、毎日にも来て遊ぶことを允されければ、我持物のごとく遠慮無しに舞込みて、彌が上に、酒食の雑用まで心配に及ばれては、なかく來難うなりて、折角の御志が嬉しからず、と受取らぬといふを無理に取らせて、門番庭男にまで行直りたる心附して、女等へは手土産とて、折々現金を握らすれば、誰か餘五郎の類繁見ゆるを厭ふものなく、盛夏の氷水ほど喜ばるゝに自ら肩身廣く、馬車を支關まで横附にして、車輪の軋る音を聞けば、ありたけの女ども何を捨てても走出で、綺羅花のごとく居並びて迎

三人妻

三人妻

ふるまで、氣障がられぬ人にはなりけり。
 此上は心措かれず、我も本筋の客のやうなる顔して、随分精出して通ひぬ。今日はわざと夕暮より来て、ゆるりと宿る氣か、馬車を遣せしは上首尾、とお角は心に喜びて、酔のまはらぬ前に、眞面目にてお願ありと言
 出せば、こは改まりたる言かな。我等が中に遠慮は無き約束、とは誰もいふ句なれども、多くは外れて逃ぐる
 輩の言草なり。屹度聞いて下さるか、と先念を推すも例なり。まだ入用の此首だけは遣られぬが、其外の
 事は聴くにして、承まはるべし、と膝に手を置けば、お角は促し、慥したる風情、之を見せて、二三分は男の心を
 鈍らせ、聽て言出すかと思れば、「あの」といふ辭を断々三つ四つ續けて、屹度聞いて下さるかと思
 寄添へば、正せし膝は斜に傾きて、冗いこと、と美しき横顔眺めて玉の緒の揺ぐ時、此奉公のいかにも愁け
 れば、身儘になりて始終御側に居たき願、と舌を操りて甘えたる音を出せば、餘五郎打笑みて、我には聊
 かも異存なければ、雪村が放すまじければ、今といはず、時節を待てと言へば、悲しき肩して答、無く、身
 を背けて燈火の陰に向ひ、紅梅の刺繡したる手巾を兩手に括りて歎歎の音を、餘五郎聞答めて、肩
 越しにお角の顔を覗き、泣くかと怪みつゝ、いかにしたるぞと拗ねたるを燃向けむとすれば、わつと手巾を顔

に當て、泣くとは心弱き女かな。其願慥へずとは言はざるぞ。雪村が抱への其方は主ある身ならずや。
 我何程の金銀を積まむとも、此處に無うてはならぬ女、放さじといへば其までなり。それども、其方が一通
 の奉公人ならば、親の大病と言立てとも、暇乞ふ便はあれど、給金出す上に、年季の中はいかなる事ありと
 も選ぶほどの約定にて、三年縛りの手宛まで受けしからは、買はれたる體なり。それとも雪村が慈徳す
 くて、其方の色を賣るばかりの心ならむには、些細の金にて埒は明くべけれど、さにはあらざる此家の呼
 物。向島の脊に人の出づるも櫻あればなり。尙又雪村は八方へ目を配り、今も油断なく艶なる面を索めて、
 拂底を覗ける最中なるに、其方を手放さむことは思ひも寄らじ。

此の理窟が分らぬか、長く待てと口言はず、其間辛抱せよと育むれども、わざと頑是無く不肯して、い
 と涙に咽へば、餘五郎はお角が持てる手巾を奪ひて、いつまで泣くと答むれば、袂に換へて泣顔掩せり。
 此上は言ふことなく、雨に惱める姿を下物にして二三盃手酌で飲むを、お角は衝と身を起して銚子を取上げ、
 又彼方向きて俯しになりけり。
 酒は取られる、お酌には泣かれる、希有なる晩、と昵語をしかけ顔に、敗けば、お角は聲を曇らせ、取られる

三人妻

三人妻

も泣かれるも皆あなたの不實から、旦那様が放すか、放さぬかは、お話を遊ばされての上ならでは、善も悪も知れぬものを、始めから放さぬに獨斷して、逃げたまふ御了簡よな。さりとて思ひ違へて、今更爲方無き深陷。恚る不實の人が忘れぬとは、よくく因果の上の因果よと泣伏せば、様子ありげなる言の聞捨になり難く、仔細を尋ねれば、御胤を宿したる證據ほど、成程合點行く物を見せぬ。

見るべきものを二月見ずといふ驗はなけれども、乳頭の稀黒うなりたるに争ひかねて、此上は雪村も承引すべし。明日にも談じて見むと言へば、お角はやうく涙を飲めて、お心には進まぬながら、是非無くといふやうなる御口氣、それにては少しも嬉しからず。懣ひに此家を出てから捨てられむより、捨てらるるものならば今の内、此場で捨てたというて下さるが情ぞとあれば、餘五郎眼に笑を浮べて、所望とあらば随分捨てても苦しからずといふ顔を、お角はつれぐと打目成り、聽て又泣聲になりて、所望とは誰が申しました。あなたは嘯と不意に取附かれて、轆けかゝるを床柱に支へられ、何の彼のと擧足取りで、喧嘩仕懸の強談は其意を得ず。胸には在餘るほど實も情も籠れる男なれど、色の道には未だ修行足らず、性來口不調法にして、人の悦ぶこと言ふ術を知らざれば、かの風とかいはれて口で殺す事は不得手ゆゑに、心にも無く

三人妻

て氣に障る言いふも折々なれど、面を見ても知れかし、この蒙茸の髭髯で、男傾城のやうな口上がいはいれうか。言多きは品少し、見たよりは食うて味ある餘五郎、色に持つては徳用の代物なり。今夜の所は涙も出さず、愚痴もいはず、いつものやうに睦しう飲むべし。明日は談じて見て、肯かぬと雪村が意地張るならば、我も意地になりて、身脱さすべし。天へ昇りて日を握むといふにもあらず、高が女一人の出入に何程の事のあるべき。馬車に載せてつうと伴還り、一杖もらうたと後から聲懸けて濟む事なり、と手に取るべく言うて除けぬ。

餘人ならば如何あらむ、葛城餘五郎なれば其程のこと諱はるまじと念へば、お角も心落着き、冷えたる燗を更へて、おのれも前祝と常よりは通して、亂るほど男は面白く、ついに覚えぬ今夜、と餘五郎も杯の數を重ねて、夜の更るまで樂みけり。

此男流石に非凡なる膽ありて、酔うても動むる所は動むる了簡、確として動かされず。これほど打込みたる女の側に、窮無き樂を捨て、今朝は大事の用あることを忘れず。迎の馬車に飛乗りて出社を急ぎ、社長室の風通好き椅子に睡たき顔もせず、支配人重役等に應對して、千里前の金銭を坐ながら手攫にするやうな

三人妻

る舞 策を、宿 醒の頭腦から苦も無く割出して、心閑に一本の葉巻を薫らし、一碗の珈琲を吸りて直に立出で、雪村の商社を訪へば、折よく居合はせたるを、晝飯にとて引出し、我車に乗せて冷じき奥二階に眺ひ、首からお角の事を言出せば、推慮に違はず、彼は呼物なれば、今は手放しがたしと言ふ。其は此方にて承知にて、恚く押附がましく願ふには仔細のある事なり、と妊娠して早二月にもなれば、長くは彼所にも置き難きに、今は其ぞと人の知らざるを幸ひ、宿許へ下ぐる分にて此方へ賜はらずや。其代には御迷惑にはならぬやうに計らふべしとは、金 嚙を食せむとの意なり。素六開終りて、最早服れたるか。砂糖餅と女子は服るものに極りたれど、色を賣る身には大きな瘤なり。勿論彼所には置き難けれども、腫物も退けば舊の體に復り、年寄らぬ間は幾度の用にも立つべきものなれば。下されぬかと餘五郎の間へば、折角の御頼なれども、代りのあるまでは進ぜ難し、と思の外見事なる拒絶に、女々しく強ふるは餘五郎にあらず。然らば此事は水に流して、今まで通りに出入らせたまへ。慾には限無く、我儘ばかり願うて申譯なし、とおどなし言分に、御挨拶痛入りたり。別業へ御入來の儀は構ひなけれど、毎々女輩へ御心着は以後御無用になされたし、と堅き挨拶の中に食事も濟めば、素六は二時に來客ある由を言立て、近日を契りて歸去を急ぎけり。

(十六) 南無三寶

素六が此女を放さるに所以あり。かの別荘に抱へたる女の十餘人、歴々の御方に仕ふる身なれば、夜は眞綿に顔を覆ひ、横入にして仕舞ふやうに見せられたれど、撲いて血を出させる外は、何を爲うとも疵のつく物品にあらずれば、素六は好きな真似して、いづれか御多分に洩せるは無かりけり。さる事と知られなば、此箸取らるゝ方もあるまじけれど、嫌ひにはあらざる彼老爺の事なれば、と疑ひつゝも其ぞと確に見ぬ事淨く、舌 鼓を打ちて喜ばれぬ。玉の器に盛れる八 珍も、座敷にて見れば咽の鳴るを、料理する所を窺はば、食ふ氣には成られぬも同じ理なり。

世を憂しと捨つる人はあれども、米の飯に飽きたるものを見ず。何歳になりても女は可厭ならぬ人の心を和げ、死後の執着ならぬ爲、寺の本堂の天井にも女の姿を畫くを思へば、忘れぬ物と見えて、客のある夜は素六も酔うて此處に泊り、閑の日は折々遊びに來り、銀の鏡にて白髪を抜かせ、柔かき手髪に鏡を延して一人々々對手にして試みけるに、お照とて十八になれるが心性初々しく、百人が百人見て可厭とい

三人妻

三人妻

はぬ容 貌。美しくして物静なるは、魂のある人形のごとく、道具で謂はば時代時給の文画なるべし。素六も此を見立てて濃 厚と粧らせ、名を聞かれたらば何姫と言へば謂はぬばかりに仕立てたれば、われながら側へ寄るは勿體なく覺ゆるばかり綺麗なるを賞玩して、茶一碗持て來るも、お照ならでは氣が濟まざりしが、餘五郎お角を手に入れて、俱浮れの面白さうなる摸樣を、餘所ながら見るに不圖心變りて、一夜の酌に此女を招きて戯れけるに、主人の威光ばかりにもあらず、疊に二三度の馴染もあれば、難なく御意に従ひて、其夜より枯るゝも同じ野邊の草とお照は朋 輩に此怨を語り。

今となりて素六は愈々結構なる物を、むさど人に貸したる疎忽を後悔して、我庭なる柿を根に啖はれてしまふ意氣地無さ、と賊を見て繩綱ひかくる思案の最中、いつも彼奴めは一手先の捷く、與れど大きく出られて、ちと遣られぬ譯ある事は隠し、今度ばかりは一番先を越す覺悟にて、體好く斷りけるに可厭な顔もせずして退込みしは、先方にも苦肉の計略ありと見えたり。敗を取らば大きな野呂松、と鞭聲頼りに馬車を飛ばして、向島の別荘へと急がせたり。

疾風の砂を捲くがごとく淺草並木まで來にける時、後より御者の名を呼ぶ聲に馬を駐めて、素六は窓より

差 覗けば、二人に刺曳かせたる腕車をひたくと寄せて、帽子を取りて一禮するは重手代の笹川なり。

彼件はいかに運びたるぞ、と尋ぬる聲の下、至極の上首尾に就き、御面談申さでは克はざる事ありて、これまで御踪を追ひました。此處は往還にて長く車を停め難し。委細は途上申上ぐべければ、直様御歸あるべしと馬車に乗遷れば、車は南を指して走りけり。笹川より始終の様子を聞けば、豫ての計畫首尾好く運び、三人の競争者を排倒して、請負は我手に落札せり。是といふも主任の某姓が一方ならざる盡力にて、此報酬は昨としてもらふぞと仰せられし由を語れば、素六は領きて、是皆向島の酒の効能、今に始めぬ事なれど、彼川莊は實に我家の金穴なり。

そこで我を召さるゝか。いかにも急の仕事なれば、其の様に頼みたく、外に是非とも面談したき義もあれば、歸り次第社長を遣はせとの御意といへば、之より直に伺ふべし、と明日から着手する手筈を授けて、笹川を途中に下し、素六は麹町なる某姓の自宅を訪れけり。

萬城餘五郎は見事に斥られて、外に爲む術もあらざれば、恚る時には鐵血政略で行くが一手、と即座に思付きて一散に向島へ飛ばし、お角に會うて素六の承引かざる趣を語れば、いかにも胸には思中なる事あり

三人妻

三人妻

れども、途方に昏れたる顔して、此上は何として下さる。我も意地になりて身儘にしてやるとの御言は忘れませぬ。反古にはしたまふなど言はれて、反古にせまいとて今日来た男の寸方を聞き、と何やら嘆けば、御志のほどは嬉しけれど、さうしては貴力の御迷惑、また二つには恩ある主に餘りの不義理なれば、そればかりは、とは心弱し、我迷惑にも其方の不義理にも、ならぬやうなる肚ありて爲る事なり。手後れになりては事難し、急げくと促き立つれば、お角は部屋に驅入りて、秘藏の諸品を身に着け、嵩張る物に思ひ遣りて捨離けれど、持出づることの克はざるを口惜がり、また外に忘れたるものもや、と小篋箱抽出し、手文匣開放して機旋せども、事の急なるに心惑ひて、日頃大事の品も思出されず、指環を袴と穿めたる両手を膝の上に置き、算笥の前にしやんと坐りて投首せる處へ餘五郎忍來りて、思なる慾を乾し、見苦しき跡を見られて嘔はれな。一品といへども今身に着けたるものゝ外は持出すべからず。取散らしたるものを舊の如く形附け、座敷の亂れざるやう始末すべし。女郎の驅落とは違ふぞ、と審められて卒に慾を離れ、舊の座敷に復りて四邊の様子を候へば、葛城の來る日は女ども皆粹を通して、呼ばねば出て來るもの無く、表坐敷にて遊ぶもあり、部屋にて午睡するもあり、此坐敷はいつも閑なるものに極めて、半日人聲せずとも見

に來るもの無ければ、お角は玄關に忍び出て、餘五郎の馬車に乗れば、心得たる御者馬丁は高話をしつゝ、空車を曳還るがごとく疑して門を通れば、お角は敵膝を冠りて身を伏せたるを、人無き車と門番は一目見て直に坐睡りぬ。續きて餘五郎も立出で、待たせたる處より同乗して、巖に才藏の腰懸にせし深川の別荘へ連込みけり。

素六は用果てて夜に入りたれども、心急かれて明日を待たれず、向島に來て見れば、取締のお八代といふ女目色を變へて、先刻よりお角の姿見えず、宿へも人を出したるところと聞きて、南無三寶、葛城は見えずりしかと尋ねれば、なるほど四時頃お入來にて、ついぞ無き御歸の早さを怪しくは存じましたれとお件れなされし様子も無しと治郎助(門番)の申立に、何時何處より驅出せしやら、一向合點が参りませぬ。取締は私の役目、何とも申上げやうがござりませぬ。草を分け、瓦をおこしても、探し出さずとは面目無き顔色。素六は騒がず、宿を尋ねたりとて居るべき様なし。在所は大方知れたれば、と聞くよりお八代は膝を進めて、御前はお角の在所を御存じとや、それは何處と二度呆るゝ。

お角の部屋を見しかとの訊問に、一應調べしが格別變りたること無く、着のみ着のまゝにて出ましたる様子。

三人妻

三人妻

夜にもあらぬ眞晝中の事なれば、正門より出でしならば、治郎助の見付けざる筈はあるまじきに、葛城様の空馬車の出でし外には、何も見すと申すからは、裏の垣を踰えて待つ舟などのありて、川を遁げしか。對手は葛城様の外はあらざるやうに想はるれど、彼方がと七分まで信ぜざるは迂闊なり。葛城が揚出せしに極りたれば、今に及びて騒ぐとも、効無し。爰時此儘に捨置け、と心の辭勃は色に見せざる落着顔に、お八代は三度呆れて、深き仔細のある事ならむ、と我が落度にもならず、お小言を戴かざるを、幾俵にして部屋に退りぬ。

今日並木より引還さずば、今度も後手になる事は無かりしに、わづか四五時間の差から、腹立たしや奪取られて、我は馬鹿な面になりけるよ。一度彼の手に落ちしからは、物が物だけに取戻さむは面倒なるべし。握りては容易に放す男にあらず、一時の洒落にして嘘から實を出す氣は知れたれば、家暮らしも懸合もならず、さりとして持主の素六が指を啣へて、この儘見ておる譯には行かず。普通の雇人ならば左も右も、情を懸けし女なれば、男の一分に關する事なり。何としてか取還すべき、と獨り思案に暮れて飲む酒も酔には成らず。好き手段を考へて考着かざるほど、餘五郎が無作法過ぎたる爲方に腹立ち、群來る蚊に煽癩發し

て、女どもを皆喚び、風口ばかり開けて前後を取巻かせ、手毎に團扇を持ちて扇がせけるに、風あたり強くして盃の酒は溢れ、煙草の火も持たぬに、これではならぬと三人ばかりにして、徐に扇がせつゝ、本木の花のお照の酌に少しは酔も出で、此頃上達したる義太夫を聞かせむ、酒屋でも寺小屋でも好きなものを望むべし。お八代に太棹を持來いと旨遣れば、入達ひに小女は入來りて、葛城様より御手紙と文笥を差出す。披き見れば醉筆と覺しき字體にて、角事妊娠中は此方にて世話したく、當分預り置く旨を洒落まじりに認めたり。

案に違はず餘五郎が伴れたりけり。其肚も此方の思はく通り、何處までも洒落にして、結極は洒落流れの眞面目にしてのけむと謂ふが手と見えたり。硯を持てとあれば、給仕の一人が蒔繪の硯箱持來りて墨磨れば、返書も亂筆御免の醉中に、よろしく頼む趣を亦洒落交りに走らかし、文箱に納めて、之を使のものへ渡し何處より來たるか、先方を尋ねよと吩咐の通りを訊せば、使の男日本橋よりと答へて歸りけり。

素六聞きて、日本橋とは虚偽にて深川なるべし。由無き事を蔽せしものかな。我が逐懸けて訪ぬる事と懸念せるか、素六も一匹の男なり、取返せばとて餘五郎の爲しやうなる陋き手段は爲まじきに、さりとは馬

三人妻

三人妻

鹿念入れて可笑や。翌日腹心の某姓を深川へ差向けしに、餘五郎不在にてお角に會ひければ、まづ常人の了簡を聞くに、向島を逃げたるは全く葛城の度 鐵なれども、世話してくれと頼みしは自家にて、雪村方の奉公に不服などのあるにはあらねど、行末を案じて見れば、いつまで彼處に在るべきにあらず。單身の落着きたさに脱出せし罪は輕からねど、御謝罪は二三日中に餘五郎より人を以てすべしとの事なれば、其上にて御話合ひ下さるべく、旦那様には重々濟まぬ譯なれども、御迷惑は懸げざるやう取計らはせむと申せば、私もそれを頼にいたして、會はれぬ筈の貴方にもお目に懸りますと膽の据りたる口上を、歸りて其儘語れば、素六一度は憎き言分と腹立てけれども、慾に轉びて餘五郎に身を委さむ意の女を、骨折りに取戻した所で面白からねば、此處は大腹中を見せて餘五郎に氣毒がらせ、後に旨い事する餌に用ふが割方、と商人は何するにも算盤を離さず。大方の男色慾には大事の命をも要らぬ氣になる所を、素六が錢勘定にしたる手際は、一代に於ればどの身上拵へる男の考量は格別のもの、と後に聞きし衆の語合ひけり。

四日過ぎて、葛城より彼始末に就きて談したしとて、四天王の一人なる赤澤藤馬といふもの來りぬ。世才六分に學識四分の化合物にて、英國にても才子と言はれし「けむぶりつじ」大學の法學士なり。神妙に

三人妻

今も官に在らば、秘書官ともあるべき身なるに、小手の利過から仕損ぜし事ありて職を免ぜられ、才無くても馬鹿律義の奴が安泰のお役所勤は、釣堀で魚捕ると同じ事にて可笑からず、とそれより術を韜みて世を遊び、何するにもあらで色酒に興じ、新橋の藝妓六十餘人に英語の綽號を附けて行らせしは此男なり。

名を傳らむための奇行世に聞えて、野に遺賢ありと葛城に識られ、今重く用ゐらる幕賓なるが、高が女一人の出入に恠る人を役ふべきにはあらねど、餘五郎の名代として故と事を重々しくし、勵めて素六が感情を害せざらむが爲なるべし。

いかなる筋かと赤澤の演ぶる所を聞けば、彼女を餘五郎が妾にしたく、就いてはお角の身の代金千圓にて狂げて譲られたし、と謂ふが大體なれど、之を赤澤の辯舌にて、玉を轉すごとく、何處を捉へて撃込む所も無く、聽くもの迷はされて夢中に唯といはせる上手、千圓が物を一萬圓にも賣附くるは、此舌頭の運用ばかりなり。

素六は一言もいはず、大様に時々打笑み、打鎖き、言ふだけの事を一通り言はせて、彼女は金錢には換へ

三人妻

難き大事の品なれども、葛城殿が我不承知をも肯入れず、竊かに連出せしまで御執心なるものを、戻せとは心無きに似たり。又身の代とありては十千萬圓にても不足なれば、何も申さずに彼女を進上致すべし。随分末長う祝がりて遣さるるやう仰せられ下さるべし。明日にも深川へ向けて彼が荷物を届け遣はさむ、と奇麗なる挨拶は花叢に蛇ありと氣味悪く、赤澤は辭を盡して、此方よりも志なれば、申出でたる金額は受納あるやうに、と脱けども乞へども更に肯かず。さては後の崇怖るべしとは思ひけれども、其は其時の事にして、彼女を戻せと強く出られむよりは、當座なりと形の附きたるを役目の仕合にして、然らば仰せの趣を主人に傳へ、再び御面會を願ふ事もあるべしとて歸れり。

第六は翌日お角の荷物を深川へ送りて、此女の事はふつと思ひ捨てけり。それより二日経て、葛城方より右の禮として貽り來したるは、水神瀨に半身を現して、兩手に怪魚を撃ぐる大理石の像なり。惣高七尺餘、今も向島の庭なる泉水の中に立てるを、人戯れに呼びて身替秘藏といふぞぞ。

(十七) 尺八の稽古

差當りてお角を圍ふべき家無し。とても新らしく普請するものなれば、其方が望む處に建つべしと言へば、

三人妻

苦しからずば、此處に置きたまへ。外に望む處もあらずとは、變りたる所好かな。表の垣も古び、庭も手を入れざれば思ふままに荒れて、坐敷の壁も痛く黒み、光るものは椽ばかり。向も悪くはなけれど、構造の宜しからぬにや、いつも雨の日の如く其處等の薄闇きは、半日居ても氣の閉づる家を、何處に見處ありてかと尋ねれば、女心を喰ひたまふな。私出世は深川にて、此町盡頭に十餘年住みける頃、此家は江澤といへる金貨の住居にて、お鈴とて私に二歳上の美しき娘あり。長唄の師匠の同じかりければ、いつしか中好くなりて、數ある朋輩の中に我ばかりは、友にしても好きもの、親御にも慕ひまれ、毎日に御對手に呼れて遊びしは此次の間なりき。我家は貧にして、六疊四疊二間の棟敷長屋、二階は物置に掛けたる猿梯子の、踏めばひしくと音する茅屋に比ぶれば、此家を御殿ほどに思ひて、食事には菜の數々、菓子に月棚に山の如く、同じ人間に生れながら、お鈴様の仕合はと可羨の餘り、我一度は慙る家に住みて、正月着るやうな衣服を寢衣にして、此半分の榮耀して見たしと浸々思ひしが、其娘が十四の春父御の病死ととも身代分散して、母御もお鈴様も夜通同様に何方知れずなりて、今に何の音信も聞かず。此家の造作變りたる所多けれども、見覺の面影はなほ残りて、庭の竹蓐時に變らず、子供に復れる心地して、漫に其頃の

三人妻

懐かし。初一念の届きたると思へば、住荒れたる此家こそ、我には玉の臺なれ。傷みたる所に手入れして、此處に住まはせたまへと言ふ。

さる由緒ある古蹟ならば、何様其望も理なり。十分修復して見苦からぬやうにして取らすべしとて、日ならず注文通に手入して見れば、舊が舊の普請なれば、葛城の妾宅と人に知られて、愧かしからず幽しき構になりぬ。

お角といふ名を賤しとて紅梅と呼換へ、かの銀公が唐衣、さては寝る夜の重りて、秋の牛ともなりぬるに、其後は更に腹の脹るゝ氣色も見えず。乳頭の色も其儘にて張れる様子は無く、身體は常に復りて、妊娠にてはあらざりけり。お角は之を悲みて、餘五郎の顔見る度に返らぬ愚痴をいうて、可厭がられぬ日は呵らるゝなりけり。

一月餘此女にのみ心を奪はれて、白鬚のお才が事はふつと忘れたるを憶出して、まづお角も我物に極れば、これから死ぬまではお膝に手を載せて、おとなしう我を待つものぞ、今日に限りたるやうに顔見に行かでも、首尾は心のまゝと安心して、無沙汰したるお才を尋ね、口説をこかけられて困らせられて遊ばむも、氣が堪

りて一興なるべし。多忙に久しく遇はざりしが、また老女にもならぬかと入れば、お除様にて老女にはなりませぬが、干物になりました。それにつけても御前の若々しさ、深川邊にて近頃人魚の揚りたる由、大方それを召上られし所爲なるべし、と洒落に寄せて心ありげの言様。扱は露顯か。こゝまで電話の通ずる筈無ければ、邪推の偶中かも知れず、と何食はぬ顔して居れば、段々と鉗を露し、ちくりくと痛めらるゝを、それでも知らぬ顔しておれば、随分精しく秘密を陳へ立つるに驚きて、其まで奈何してと問へど、笑うて言はず。散々に弄られし上、以來深川へ二度行かば、此方へも二度といふ約束にて事済み、もじ此規則を破るに於ては百圓の罰金。其も善。また外に、今までの無沙汰の償罪として、此間願ひし煙草に金煙管を添へて。其も善。

お才に會うて見れば、此道は本場仕込の柳橋の尤物、紅梅のお角が何程好うても、地女の及ばぬ處あり、と又もや御意が變りて、此方も萬更ならぬ御前の氣色。取留めるは此時の待遇一つと、此上は無く好くすれば、其夜は御輿座りて機嫌麗はしく、白鬚の道を二度とは忘れぬ枝折を心に立てられて、必ず二三日内には来る氣にて歸りぬ。

三人妻

深川へ行けば又其氣になりて、紅梅の初々しき裏に無量の情ありて、媚を作らぬに媚あり、故ならぬ所爲に謂はれぬ悦しき所ありて、是亦三日とは見ずにおられぬ煩惱の種は、此處にも、彼處にも、心は二つ身は一つ、色に間なき馬の足、車上江南の夢は月下山東に覺めて、執を捨てず通ひけるに、麻子は之を識れども悋氣せず、お才は妬かず、紅梅は怨まず、女三人寄りて羨しからぬも、間の隔たればなるべし。

餘五郎深川にて飲む時は、折々お才の噂を始めて、此間は恠あつた、那してくれた所は此方には無い圖。那でどうも忘れられぬと、さほどにも無かりし事に柄をすけて、向島に限るやうにいへば、逆も比較にはならぬ生野暮の私と、顔を背けて拗ねる中の可愛さ。地女は此處が有難くてならぬ、と此の手をお才に懸けて見れば、牛の頸皮を撫でたほども利かず、張合の抜けた悔しさに、痕跡も無い事作りて、凡そ女といふ女の中の飛切無類大極上々といふは紅梅なり。第一容色は花にも月にも喩へがたく、美女にして貞女、柔和にして情深く、義理堅くして實意あり。琴瑟書畫の四藝に通じて、香花茶の三道を辨へ、歌も詠めば針も利く。諸禮は小笠原にて陪舞は四川なりとかや。實に色には飽きたる葛城餘五郎が、少しばかり陥りて一寸苦勞せしも理とは思はずや。其方などもちと付かるやう、お紅衣の古いのも戴いておくべしと手強く出れば、

お才は物々しやと冷笑ひ、惚話といふものは男が男に聞かせ、女は女同士語合うて、指めりもし替もして可笑きものなるに、然りとばよく吐場無き下水泥臭い事を聞されます。さほどに有仰らるゝは一目見てくれの謎らしき陰自慢。折角の御志を無に致すも如何なれば、お目見を願ふべし。彼方より輕々しく御入來のあらぬとならば、私から出向きましても苦しからず。御都合次第にてこれから伺ひましても、私には差支はござりませぬ、と當の外れた言をいはれて、餘五郎は首を掉り、其方なぞがお目通りを願ふ事、寔に以て恐多し。退れ、分を知らざる女め、と大束に極付ければ、それほどまでに言はれて、推しても拜みたま御方にはあらず。されども之は常談にて、田圃を庭の此の田舎に住みて、友無き徒然を慰めかねたる身に好き對手なれば、識る顔になりて往来し、心も合はば末々の力ともなりもならぬすべければ、近き内に引合せたまへ。小本にもあるやうに同胞同様睡しうして、彼方の琴に私の三味線、御前も今から尺八の稽古して、三曲でも合せて遊ばし、このやうな樂はあるまじ、と遠藝者の風流を願へば、餘五郎大笑して、三曲の仲間入は免してもらひ、二曲を飲みながら聞くことにして、近日日を極めて會はずべしとて、此事を紅梅に話せば、會ふは可けれども、勤せし人は慢くて、第一私のやうなものはお才さまの對手にならぬ意氣地無し、

と擇ばぬものを推して勤むるほどの事にもあらねば、其儘暫し沙汰止になりぬ。
(十八) 談義所の譽物

この霜月十二日は餘五郎が亡母の十三年忌にあれば、立還りて法事を營むべし、と父餘兵衛より見苦しき代筆の書狀來にけり。

餘兵衛は今年八十五の、年は取りてもしやんと來いの殿登造、渡守の頼兵衛を生で見るとやうな態ありて、元氣衰へず、足腰達者にて、今の若い奴等は口癖にいふほどありて、死神と組んで負けまじき面魂の銅色の頭顱に古りたる銀の髪を藁束にして、今も餘五郎が産れし茅屋の、傾ける柱に凭れて雨日も座を離せず、手慣れの俵を掴みて、驚るまで土なぶりを廢めぬ氣なれば、日本一の金持の忬も頼にはせず。十七の年家出して二十年の間行方知れず、長々苦勞懸けし不孝の餓鬼は、婆とも相談して勘當ものにしてのけたれば、今は縁無き他人なるに、引取られて世話さるゝ所以無しと、餘五郎が立身せし曉より、數度か詔を入れて、花の都の樂隠居にせむといへど、大きな藥罐頭を掉りて肯入れざれば、餘五郎も是非無く、何も御心任せ、其地にとざられて安樂に暮したまへ。地面を這うて立派に普請し、田地を欲しきほど扶持に

附け申すべしといへば、それをも承引かず。今まで稼ぎつけたる身が本に樂になれば壽命が縮まる。肥も利過ぎては品物の毒になる理窟。我もまだ死ぬ氣にはならぬと我張れども、餘五郎の身にしては捨置かれず、兩親を捨て二十一年苦勞せしは、我一人ばかりが樂になりたま願にあらず、親の喜ぶ顔の見たさもあるに、さりとは七千萬圓といふ寶も持腐なり。我は馬車にて乗廻し、親に蓋被下げさせては寢覺の心懸り、と手甲摩りて脱げども頼めども志太く肯かず。此上の手段に盡きて、餘兵衛が神ほどに崇むる村長の合川李之助を以て段々と説得させ、月拾圓の扶持受くる事を納得して、是だけあれば袖手で食へるものを、萬元結の自鬘頭、昔に變らぬ氣をば餘五郎の持餘しけるぞかし。

今は鬼籍の母も常に之を憂き事に思ひて、孝行なる忬の志に免じ、偏屈は好加減にして樂隠居になれ、と勤めてもく心折らざる夫に添ふ女房なれば、獨り絹の袖無も着かねて、因果の人と愚痴を絶えせず、東京の繁華も見ず仕舞にて草葉の陰に入りぬ。その年回なれば麻子をも同道して、惣勢七人の供廻は金澤十間町に旅籠を取らせ、其中繰三人を具して談義所村に乘込みたり。かく小體に、衣服も金澤にて稍麗末なるに衣更へたるは、いかに我物の金錢なりとて、素性をいへば土百姓の忬の分として、大名の眞似事は天附

三人妻

を知らざる鈍漢、と衣て選りし錦が親父の瘡に障り、散々に呵られし事のありけるに懲りて、御機嫌を損なはざらむ爲の孝行なり。

されども黙義所の馨物、日本一の奴が見えたと、まづ金澤から騒ぎ立ちて、此村は沸くがごとき景氣なり。畦道の細きに百姓ども並木のごとく立續きて、髭が長い、指が光る、と聲高に叫び散らし、麻子のシオーんに驚き、供の繋げたる靴に魂消、あれが噂に高き葛城餘五郎、向山の老爺が悴の出世姿を見るにつけて、東京には大路に紙幣が撒いてあるやうに想ひて、遽に駈落のしたさうな面が彼地此地に目を側てけり。待ちかねたる餘兵衛は二町ばかりも出迎へ、影を見るより兩手を舉げて野良聲を振立て、ひよこ〜と駈來りて、やれ嫁も来てくれたかと殊の外の歡喜。此方衆が來るとて、四五日前に大掃除して疊をも仕替へたれば、見違ふるほど奇麗になつた、と伴れられて行けば、我家の物置より不潔なる茅屋を、夫婦よりは供の者が驚けり。

是も新しくしたる手細工の佛壇に、山茶花を無雜作なる大束に手向け、線香の灰ほど〜と四邊に散りて、燈明冥々陰々として過去帳の面を照せり。夫婦は露前に美々しく供物を飾り、交る〜焼香して怨に回

向してけり。

餘五郎駈歸らしつたか、と門口に頼冠取りて入り來るは、作介といふ百姓。年輩は大方餘五郎に同じく、手織木綿の新しき布子に紺小倉の帯して、千草染の股引尻褌、のつそりとして律義さうな面貌、太き眉毛を下げて黄なる馬齒露に笑ひかけ、園の外に立ちて連に小腰風むるを、餘五郎見るより氣輕に飛出し、新家の作介殿か、よう尋ねて下された。此方の好きな土産を多度持て來た、上らしやれ、誰も遠慮するものは無い。之は私の家來たち、奥に居るは噂じや、と手を取りて引上げれば、着飾れる麻子の姿に怯ぢて割膝に隠り、佛前の供物をまじり〜と眺めて一言もいはず、松の木のやうなる手を揉みて、餘五郎の顔を見ては可憐げに打笑みぬ。

此男は餘五郎が無二の幼友達にて、此地を駈落する時は涙で別れ、路用の補にもと、虎子にせし二朱と五百に、手造の草鞋二足を饌別に與れし情を忘れず、年に三四度づきの便の次手には金銭を送り、五人口豊なる田地迄買うて宛行ければ、親父の代よりも仕出したる新家の作介とて、今は人にも壓されぬ顔。四邊に知らぬ人の居て話し難かるべし。明日の法事の濟み次第、金澤の宿へ同道して、飲みながら寛りと語

三人妻

三人妻

らむとの餘五郎が酔酌に傾き、明日又寺にて會ふべしと、遁るがごとく匆々に歸りけり。

其夜の連夜を勤め、明けば檀那寺にて法事を營み、村中一統へ見事なる配物して、まだ二三日は逗留の意にて一先金澤へ引取り、餘五郎は毎日機嫌伺に談義所村へ通へり。

作介尋來て、一間へ唯二人寛ぎて四方山の昔話。いつか女の噂になりて、此方は今は日本一の物持とて、

何に不足といふは無き身にも、以前は我等と同格なる水呑の小倅、毎日背物背負うて行きし近江町の菱屋の

娘に此方は惚れて、手を一度握つたら死でも段無い、と我顔見る度に口説かれしが、今では那しきの女は飯焚にも役うておやうと笑れて、横手を拍ち、いかにもく、忘れもせぬ菱屋のお峰が事。我も十八の生心に思染めしが、及ばぬ戀と陰ながら惚れたばかりで、どうも成らず仕舞は口惜かりき。あの女今は何處にと

問へば、同じ町なる柏屋に嫁入り、見る影は無く婆になりけり。娘で今も若くてゐるならば、捨てば置くまじきにと笑へば、此方は覺無きか知らねど、あの同胞の最季にお艶といふ娘ありて、今年は二十三四なるが、お峰が其の頃に立勝りたる姿とて、金澤一といふ名代の女、菱屋は疾に潰れて、姉とも中違ひ、亭主持たず琴の指南して暮せるが、お峰の面影ありて一段美しき標致と聞くより、餘五郎好心を起して、追

追來たる此地の馳走は其に如くものなし、向山の餘五郎の氣になりて、三十年の舊時可懐し。志の日も過ぎて精進も解けたれば、遠慮無く賞瓶せうぞ。其女見たし、と宿の亭主を呼びて、好様に計らへとあれば、心易く請合ひ、自身お艶の宅へ出向きて、葛城様の琴を御所望なれば直様御入來下さるやうにと言入るれば、お艶は餘五郎を覚えて、青菜擔ぎて我が家に入らせし男の前に、頭下げて藝を賣らむは可愧しき事なり、と差支るるよし言立て、断れば、亭主は此奴高く賣る氣と合點して、御禮の所は尋常の十層倍でも、此方の望次第になる事なれば、と方角違を言へば、なほく承引かず。譯の解らぬ女、と憎々立還りて、恚の通を申せば、之を持って行き、随分丁寧に頼んで見よと、十圓札を投出され、貰はぬ身の亭主が推戴き、強情は張つて見やうもの、お艶どの巧々やられた。差支がござりまして、と子細らしい先の顔が、之を見せて最一度拜みたい。

(十九) 苔の花

水引かけて金十圓と書せる包を、亭主は恭しく取出して、客商賣の慣たれる辯口、あゝ言へばかう音草の種は盡きせず、否といはれぬまでに説付けられ、無口のお艶は迷惑して、心の不承知を口には出しかねて還ふ

三人妻

三人妻

様子を、亭主は此の包の麻薬が廻りかけた所と悪く見て取り、左も右も無理に推付けて歸らむとすれば、お艶は慌て、金包を隻手に亭主の袂を捉へ、之はお持歸り下されまじと衝着くる、其手を推除けて、私もかやうに二度までお迎に参りたるもの、這顔でもお立て下され。お願ひ申しますると振拂うて外へ駈出で、格子の外より、何分お頼み申します。先刻よりのお待兼ねれば、可成お早くと、談は着いたものにして行きけり。

お艶は亭主の走行く後影を見送りて、十圓が百圓でも此心を動かすことにはあらぬを、よし無き物を遣されたり。あれまでに言はるゝ人の志を反古にせむは氣毒なれど、氣毒には換へられぬ仔細を後にて話さば、謝罪の種ともなるべし。霎時も留むべき物ならず、と彼の金子を袂紗に包みて、腕と下女に届けさせれば、亭主は可厭き顔して不審舞れず、この金高にて不足の苦無し。彼の女今こそ藝人なれ、根性は卑しからぬ菱屋の秘藏娘に育てられ、心正しく氣の善き天稟なるに、對手を見込みて懸直するなどの悪巧のあるべしとも想はれず。さりとて如何なる用のあるか知らねど、家業を外にして急る儲口を見遣すといふは無き事なり。何ぞ深き様子のある事ならむ。今宵が縁合せられずば、明日といふて見るべし、と又々出向けば下女が取次

ぎ、唯今ほどお他出になりましたといふ。

居留主かと様子を見るに、然にもあらず、出先を訊ねれば存じませぬとは、又來らるゝを面倒と、何處へか竄けたるか、此上は是非なく立歸りて、葛城に始終の様子を語り、明日にても参るやう計ひ申すべしといへば、苦しからずとあるに亭主は帳場に歸りて、女房に今日の始末を聞かせ、どういふものであらうといへば、女は女同士、明日は私が一つ行て見ませう、と如在内儀は心得顔に胸を拵き、出懸けぬ前の朝飯頃を覗うて訪ねれば、お艶は會ふが氣毒の三度目、口籠がちの分疏を内儀は打消して、昨日はお差支にて御入來の無かりしを、お客様の本意に思召され、今日はとて昨夜から樂みにしてござらるゝ譯なれば、今日こそはお午前からお出で下されまし、と彼の金包の度々の取遣に揉めたるを慰し、水引の弱りたるを鹽梅して、お艶の前に差置けば、今日も差支と嘘らしき口上もいひかね、さればとて外に断るべき術無さに、後にてと念ひし内證の思はくを明かせば、なるほどと謂ふ氣色も見せず、其は時節にて運は人の力の及ばぬ事。當時は談義所の土百姓でも、器量ありて今名暮しの葛城様、舊の縁を裏にして、金貸せとでもいふならば可愧かるべし。お前様は琴の御指南、お客様と呼ばれて藝を賣らるゝに仔細は無い筈。私等の家業にては、素性得

三人妻

三人妻

知れぬ通りがりの旅人がお客にて、二十錢のお茶代でも、金摺きんずりの請取持つてお禮に出ますれど、身分を問はうなら、随分私等より卑き衆もある、頭を下げて大事に取扱ふは、何も商賣にて是非無き事は誰にもあるものを、お前様が葛城様の前にて琴を弾かれたとて、恥知らずと晒さらふものはござりませぬ。其身の廻まわり合せにて、帽子縫ぼうしぬいふ人もあれば、草鞋わらじつくるも家業なり。お前様も菱屋様お世盛よこしまの事をお考へなされたならば、失禮ながら今の御家業は遊ばされぬ道理。誰を對手あひてになされても藝を賣るに二つはござりませぬ。此を善う御了簡遊ごりょうかんゆうばしまし、と一息ひといきに爽さわやかなることぞかし。

有仰る通り藝を賣るに二様ふたつはなけれど、努々ゆめゆめ餘五郎を慙はづるにあらず、我と我心に愧づるより上なる恥はあらじ、素より慾を知らぬ私にもあらねば、此様なお坐敷は願うても勤めたきは山々なるに、再三のお迎まで受けながら、お断り申すといふも、昔氣質の馬鹿律義には、無理ならぬことと見免みゆるしたまへ。御繁ごいそがし多中を度々御出下さるゝ御深切を無にして、魚膠いそがし無き御挨拶いたしたまひはあらねど、と詞羽ことばけれど確なる覺悟を、内儀は手に合はぬと締めながら、仍なほ未練に動かして見れば巖いそがしなる昔の花と、いよく見捨て、とさまでに有仰るものを強ひてお勧め申しまするも心無き業なれば、と金包を引込ませる時の極り悪き。倉卒そそくに帶

三人妻

の間に燃も込みて、可厭いやな目してお艶を見て見ぬ風。來た時とは半分ほど略したる挨拶して歸るなり。亭主は女房の顔を見るより、どうじやと駈出かけだつれば、苦々くるくしげに首を掉りて、外貌みかたに操らぬ剛情者、談話を聞いて見れば餘り利口りこうでもないさうな。今藝に身を助けらるゝ境界に陥ちながら、店の天井裏つばくらに燕つばきが巢ねをくひ、臺所に飯の番木ばんぎが鳴る家の嬢様の氣位にて、食はずに居ても駄味だみ噲揚せあげて澄すましたいか、と鬨しやうを跨またぎながら其方を眺めて腹の立ちたる眼色。道理々々といふ所なれど、話を聞かねば何とも言はれぬ。お艶様は何と言った。這こんたを、と憎さの餘りに、針ほどの事を千枚通し程に話せば、亭主は小癪こしやくな匹婦あまといふかと想ひの外、鷹たかは死すとも穂ほを啄つまず、流石はな、と賞ほめたが女房の氣に入らず、いつまで色氣のあることやら、流石はな、と氣障きざに鸚鵡あひわかへ返して衝つと奥へ入らむとすれば、亭主は聞えよがしに、流石はお艶様だ鷹たかは死すとも穂ほを啄つまず、鷹たかは死すとも角折つのをらず、と悪い地口ぢぐちに女房佛然ぶつぜんとして立戻り、物は言はで慢こい顔を見すれば、亭主は笑ひながら兎脱うりぬけて階子はしこを駈上り、葛城の部屋へ行かむとして、客あることを思出し、從者つものまで此由を通ずれば、お待兼の御様子なるにと肩を揉めて、左も右も其趣を申上ぐへし、と餘五郎を小陸に呼出し、しかぐと亭主の口上を告ぐれば、唯々いしくと領きて、座に復りぬ。客といふは此の金澤に根生ねうの資産家

三人妻

にて、縣會議員のばりく馬場文平といへば、御所落雁はど他國に識られたる顔なり。

餘五郎思附きて話を變へ、私武骨に似合す琴が大の所好なるが、此處に誰か上手を弾くもの、旅中の徒然を慰めたくと上品に出れば、文平真に受けて、宅の娘どもの指南を頼むに艶といふ女あり。お聞及びもあらむかなれど、藝よりは數段立勝りたる標致好、之を招きてお聽にと言はむよりは御覽に入るべきか。但し眞名の堅氣なれば、琴の外の御所望は請合ひかねます、と亭主を呼寄せ、お艶に一寸參れと人を遣れと吩咐ければ、頭を掻き、ちと譯ありて宅へは參らぬも知れませねば、恐入りますれど旦那様がお召の證に、お名刺を戴きて持參仕りたしと言へば、牛切に四五行認めて渡すを、店の男に持たせやれば、鼠牛切に薄墨の一筆は、十圓紙幣よりお艶には利きの好きこと譯あり。

今日の身と成りたるは總て馬場が情にて、此人の爲には次第によりて、命も捨てねばならぬ恩誼あれば、客といふは餘五郎と知り、あれまでに吃と斷りし夫婦の手前も面目無し、と行かぬ先からはや上氣じて、胸の轟く迄弱き心に、其の愁さをも堪へしむる此一札には、餘五郎が拜金宗の功力も及ばざるなり。私の耻辱はこの義理に易へ難く、太織の古小袖脱捨て、白綾の襟に小紋縮緬の三枚袷、齡に合せて鐵納目は

激み過ぎたり。三線の師匠ならば島田の旬の二十四を、いつも天神に結びて、定る夫無くて色を賣らじとの心には、自から白粉も薄く、或時は素顔に口臍脂のみ。唐繻子の丸帯して、此盛を故と老に見するを我も有繋に悲しきか、帯揚は藤紫の手綱染に、有るか有らぬかに小櫻を散らし、多く見えぬ處に僅の華美をして心を慰むなり。

(二十) 御恩がへし

義理ある馬場の一言に意地の張を弛めて、顔曝す事に覺悟はしたれど、入りかねたるは江口屋(旅宿)の門なり。亭主を三度返し、四度目の女房にまで耻辱搔せ、飽くまで拒絶いひし舌根の乾かぬに、のめくど此方から出て行く不面目は、忍ぶに忍ばれぬ愁さ、行かぬ前の今から心に落へ、來ずともといふ顔して女房の冷笑ふも目に見えて、自から脚の窘むやうに覺ゆるなりけり。さりとて行かぬ事の濟むべきにあらねばど、やうく格子を出合頭に、宿屋の男お迎に參じました、御琴は私かと擔出して、促かるるまゝに行けば、程無く江口屋の店に懸かりぬ。

三人妻

折から人の見えざるに稍心落着き、男に坐敷を問へば、二階の奥。それへと急ぎ階子を昇らむとすれば、夫

三人妻

婦奥より駈出で、これはいふに悚然としたれど、袋の風窺る路無く、今朝ほどほど、まづ女房に挨拶すれば、想の外なる機嫌にて、喋々しく世辭いふ側より、亭主は無上に嬉しがり、ようこそを五つ六つも言うて、お二階へと夫婦揃うて愛相好き待遇に、難所一つ越えたりと思へば、二階の奥に聞ゆる笑語の聲、之に胸は又塞るぞかし。

夫婦は左右より風と紙門を開けば、お艶は袂を取りて小腰を屈め、顔の見ゆるほどに俯きて立てば、お艶かと呼ぶは馬場の聲、と少しく顔擧げて見るとは無しに、目に入る餘五郎の面影に、覺えの無きは理なり、其頃お艶は生れざりき。座敷に入りて、上客なれば、まづ餘五郎へ懇懇なる禮をすれば、頭の骨を動かすばかりなるが膽に徹へ、乞食になりて親の墓参したらむよりも情無かりしに、彼方へお酌をと馬場の指圖に、銚子を取りて進寄れば、猪口出しながら腫を据えて、孔のあくほど顔を視られて、無禮なる男と悔しく、お艶は少しく面を背けつ。

戲言いひかけむと念へども、お艶の威容ありて禮を亂さるに、餘五郎も打込むべき虚無く、文平も座を取持たむと思はざるにはあらねど、お艶の氣質を識れば、むざとしたる言もいひかねて、女一枚入りても坐敷

は浮かず。これではならぬと女房琴を持出し、好所に据えてお艶に目授すれば、會釋して座を立つ時、文平餘五郎に好みを問へば、何にても言ふ、然らばと八千代獅子。

餘五郎が所好とは真赤なる嘘にて、弾出すより咆を催し、聽いてやらねばならぬ邊には薄睡くなりて、寤責の難澁。文平も同断かと様子を見れば、好きとも言はずりし此方が大分の好らしく、折々妙な指して膝の上を弾くに驚き、亭主はと見れば、此奴はちと睡たき顔色、難澁の仲間と可笑く、女房は口を半開にして、筋の弛むほど氣の入りたる様子なり。

餘五郎が所好といふを馬場は真に受け、八千代獅子の終るを待ちて、今一曲いか上手の音調は格別身に浸みて、凡そ凡手の二倍こたへたり。後は酒々、お艶とやら一盞思ひざしを受けてくりやれ、と無雜作に差すを恭しく戴き、返すに清めて、紙取出して丁寧に拭ふなり。

これでは氣が迫りて可笑からず。我を貴人と田舎女の神妙に敬ひ畏るゝならむ。扱は此方から亂れて手本を出さば、彼の氣も和きて、陰氣なる大道具を片附け、小取廻しにて意氣なる三筋を持出さむ、と酔に紛らして戲言の口を切れれば、文平も蕩然としたる目してお艶を見遣り、其方は五年前も今も變らぬ姿、と少し色

三人妻

三人妻

を含める言葉に、堅うても女は作らぬ中に愛嬌ある日頃に異りて今日の素氣無さ。敷石に團栗の落ちたるやうに、生真面目なる挨拶ばかりして撥付くるを、餘五郎は覺らず、言へば言ふほど色氣を持たせたる言ばかりに、藝者を玩ぶ氣かと心に佛然とせしが、文平が主の如く扱ふものに、無禮ありては彼方の迷惑になる事。明日は途中で遇うて顔を背けむとも、此席にては機嫌好く對手するが馬場への義理なれば、何も彼方に盡す事と思はば腹も立たじ、とやうく思願しても、餘五郎の高慢なる顔を見れば、我家の関を頭も得上げず跨ぎし男の分として、悪運一時の榮利に驕り、我より外に人も無げなる舉動と胸に据えかねて、人の見ぬ間にはお艶の眼は自と餘五郎が顔を覗むなりけり。覗めらるる者は好もしげにお艶の姿をつくづく眺めて、いかさま姉なるお峰とのに生寫。目元などは特に同じ鑿型に出来たり。彼人今は如何に暮さるるぞ、と姉の話脱より緒を引出し、文平をワキに役ひてお艶の身上を聴し、いかなる心にて今に夫も定めず、可惜花の盛を深山陰れにして、何日をや人に契らむとすらむ。葉櫻になりては葛餅に添ふばかりなるを、さりとて心得難き了簡かな、と見しは我等の僻目にて、其實深く言換せたる人ありて、障る事ありて、少時遠かれるなどの意氣筋もあるにやと尋ねれば、お艶は思設げぬ顔して、神懸けて然る事無く、固より身の形附を願はざる

にはあらねど、不仕合にして縁遠く、又心に稱ふ方も無くて、うかくと今に獨身の、習覚えたる琴の糸より細き烟の活計となれるに、縁を急がぬ心にもなりてと語れば、餘五郎偽醉を醒して真面目に復り、我顔は知るまじけれと話には聞かざるならむ、餘五郎出生は此談議所にて、十七八の折には島物引擔ぎて、此方の舊時の家へ日毎卸賣に行きしものなり。我等一家は、半は親御のお蔭にて粥をも啜りしことを憶へば、此方には親譲りの恩ある理なり。差出がましけれども此方を世話して、行末確なる身にして進ぜなば、彼世の御兩親もいかばかりか喜ばれて、我にも其ぞ好き報恩の料となるべき。

男にても獨身といへば、親の心の安まらぬものなるに、まして人に従ふを道とする女の、いつまでも縁無くて覺束なき世渡は、亡き親御へ若勞を懸くる、之をも不孝といふべし。

心に稱ふ方のあらぬゆゑといふからは、一生不縁にて果さむ了簡にはあらざるべし。什麼と問へば、懐舊の情に胸逼れるお艶は、頼に答も得ざるを、幾度か什麼々々と問はれて、此有様にて生涯を送らむ意にあらず、縁もあらばと半聽きて、然もあるべし。嫁入は女一生の大事なれば、親類内など泊りに行くやうに心得、飽きたればお暇、と手輕に出入のなる事と思ふべからず。友白髪まで苦樂を一つにする人なれば、隨

三人妻

分見立てト添ふが肝心なり。されども身を思う餘り、彼此と選過ぎて縁を遠くし、其間に齡長け、花嫁ながら女房の姿となりて、賣損ふもの世間に往々あり。謂はゞ此方も其類ならずや。思はしき男無しとて、高の知れたる金澤内にての不足、井中の鮒が文句言ふと同じ事なり。此邊の士女は金澤を日本の都のやうに思うて、此土地に無きものは天下にも無きことと考ふれど、錦繪で見ても知るべし、東京の繁華は常に祭禮のどとく、大道の齒磨賣も髭を生して高帽子冠る所ぞかし。

されば一器量あるものは、皆立身の地と全國より聚りて、田舎に在れば丹頂の鶴ほどの人物も蝙蝠のごとく、夕暮ならでは飛んで行かれぬほど、立派なる男の揃へる割には、美しき女子の拂底なる所なれば、此方などが行て見よ、蟻の路に砂糖を置くほど騒がれて、大勢奪合ふ始末、身體は二つありても足らざるべし。馬場殿然は思さずや、と證人欲しげに文平を見返れば、先方も極らぬ中からの仲人口とは思へど、いかにもく、と毒にも薬にもならぬ挨拶して、讀みかねたる餘五郎が心を訝りぬ。

律義なるお艶は他を疑はず、亡親の恩を忘れず、我身の爲に盡さむとの實意を、便少き心に深く歡び、また金澤一の姿を大都會に輝かさむことを想へば、埋れたる壁の世に出づる心地して、漫に仇なる丁簡も浮立

つなり。

餘五郎はお艶の聽惚るゝ氣色を見て、我物になるに今一息、と魂の揺ぐやうな巧言を多度聞かせ、架空と見せぬ爲に「親御への御恩報じ」を臺にすれば、愚ならぬ女子も迷の闇を探足に深入して、やゝ返す路に遠ざかりけり。

(二十一) 心嬉しき顔

適宜に談話は極めて銚子を更へ、馬場殿はまだ一向に酔が回らぬ御様子。少し行らせたまへと餘五郎前に立ちて飲出し、此人數にては奮まぬ、御免を蒙りて、枯木も山の賑ひに、次のもの皆來て飲めとあれば、陸續と七人坐敷に込入り、いづれも成る口ばかり揃うて、小氣味よく猪口の飛ぶに、面の見好げなる婢二人呼揚げ、忙しき酌に手は動けども、心の働かぬお艶の風托顔、間あれば熱と考へ、呼れて慌忙しく銚子持つを餘五郎は其と睨みて、肚の裏にて笑ひぬ。うかく飲みて最早燈を點すか、と文平は蠟燭の火籠に驚き、お眼と立たむとして腰のふらつくを、曳とな、酔ひました、といかさま大酔の眼色。分厚の舌を出して唇を舐すり、囁語のやうなる語氣に明日を契りて立出づれば、足はXに捻れて踏處を定めず、緩める帯の間よ

三人妻

り金時計に落ちて振り子の如く、お危いと宿の夫婦に扶けられて無難に梯子を下りけり。お艶は店口まで見送りて、時刻を見れば七時を過ぎたり。坐敷に還りて暇乞すれば、餘五郎は杯盤狼藉の中に、名を惜む敗將のごとく獨り踏留りて、床柱の前に戦疲れたる風情なりしが、また話すことありと落着きて、何ほど歸らむと言へど取合はず。夕飯の相伴せよ。急ぐは待たる身か、然もなくばまだ宵なるに、と手を鳴せば女房來りて、彼方へと無理にお艶を捉へて奥まりたる小座敷へ伴れけり。いかなる事にならむかと苦勞せしに、異條無き夕飯の相伴。二人の席を間近に設け、着飾らせたる宿の小娘を給仕に附けたり。

お艶は其娘に物言ひかけて切りに手持無沙汰を紛はせど、箸を取りてからは、見られ勝なる顔の向所無く、始終俯きて物は口に入れども、胸塞りて吭を通らず、冬の夕にも汗かきて、二十四の處女理は無しに男を懼れぬ。

餘五郎狼の志ありて、恠く無理留はしたれど、酒の席にての言を懐ふに、其と同一口頭からは、酔うた面しでも言はれぬ答の望を、今宵の事にあらずと一旦は論めけるが、また勃々となりて、抑恠る事に直談は興覺めて家暮の至り、宜しく亭主を頼みて金錢に口説かせ、可厭な事もいはねばならぬ魂膽は陰にして、錦は

表を見るがよし。我等より上手に口利く奴は聞きもの、と葛城流の奥の手を出さむとせしが、別間には山神のましますに心を置き、婆の耳に入らば、また尻切半天の舊時を擔出して聽聞させらるべし。怒ひに小細工して事を敗らむより、今日の手際にて知れたる文平に聲を懸けさせ、其時は泣いても笑うても組の魚尾鰭をふるも今の間と放して還しけり。

翌日文平を招き、酒間の雑談に紛してお艶を妾にと言出し、此方の力にて従はせむことは覺束なし。ことば貴下より御聲を懸けさせたまはゞ、必ず否は言ふまじと見込みて、無難ながら恠る事も頼入る。何歳になりても此道は格別、よしなに察したまへ、と聞きて文平打笑ひ、扱こそ昨日の御様子に讀めた。縁無き女に彼此と御親切のお言は、合點ゆかぬ事と思ひしに、かういふ御心底にてありつるか。

かねても申せし如く、叩かば鏗然といふべき堅氣なれば、これまで幾度か思を懸けし人のありけるを、皆撥ねて得心せざりき。堅いには折紙附の女なれば、我から言うたとて事の纏らむは請合ひ難けれど、餘人ならぬ貴下の事なれば、肯かぬとも限られず、まこと御望とあらば随分談じて見るべし。お艶事は娘が師匠の縁より出入を始めけるが、氣立の良しきものと見るほど便無き身の可憐さに、及ばずながら我等の世話する

三人妻

三人妻

を力に思ひ、主とも頼まるゝ心に案じらるゝは彼が身の行末。いつまで琴の師匠にてあるべき、女は萬のどく、恃むところ無くては克はざるに、と人事ながら苦勞せる折から、御不便を加へられむとは、願うても無き仕合なれど、他の思ふやうにも無くて、碎けぬ心には如何念ふやらむ。左も右も彼の了簡を聽きて御挨拶申すべし、と骨折りさうな口氣、これで半分は成就した態。もし此男が不字に念うたら、飛立つほどに當人が得心しても、談は破れて了ふべし。

縣會に出では、愚にもつかぬ事を説がましよう喋る男なれど、猫には勝なる處ありて、何かの端には役に立つが不思議、との肚とは大きな差違、辭を卑くして只管頼めば、文平々々と呑込み、日本の紳商天下の萬城餘五郎に頼まれたが膽に徹へて嬉しく、二つにはお艶の出世と歡び、歸りて之を内君に計れば、妾といふ名目がお艶の氣には入るまじと思案せしが、其處等に有觸れたる圍者とは品異りて、格は舊時でいふお部屋様にも劣るまじき資産家の嬖妾。嫌ふと言ふは酷い不了簡。否というたら、恚云うものど能う會得させて、此奉公はさせたが彼子の爲。神妙に勤めなば末の吉のは知れてある事、このやうな世話をしてやりてこそ効はあれ、と夫婦同意の上、まづ妻よりお艶の心を聴くことになりて、迎を遣れば不取敢來りて、奥様の居間へ伺ひぬ。

お師匠様がど可憐げに賣る二人の娘の子を、母は彼方へと遠ざけて、用ありげに呼びましたれど格別の事にもあらず。ふと思ひつぎまじして聴きたまはと、明しては言はねども、良縁のあるやうに言紛らして、いつまでも獨身にてあらむよりは、相應の縁あり次第嫁くが道、と此筋を懇に言聞かせ、それは此方も思ふところ、似合しき方もあらば、何分といふを待ちて、此様なのは言はむ下心を見て、昨日も江口屋にて萬城様が其事を仰せられて、東京へ出よ、力になりて世話してやらむ、と御親切のお言に、其氣にもなりて、昨夜から思案し通しにて、未だ何れにも心定まらず。今宵は此方へ上りまして、御指圖次第に了簡せむとの心得なりしに、幸ひの御招にて、貴方からの御話も私から伺ひたきも、いづれ異らぬ縁談とは、此話の纏りまする瑞相にてや、と心嬉しき顔色なり。

二十四まで縁無く、此上はと諦めて、一生男持たず、氣散りに暮らさむとまで、一時は固く念込みけるも、寡居は不自由といふ理窟が知れて、夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と心着く廉々ありて、稍動き初めたる心に、餘五郎が報恩に世話すべしと言ひしが、焚えむとする火に風の吹誘ひたるごとく、忽ち勢

三人妻

三人妻

ひて、我手馴の事も、唯一筋の絃の音は寂しく、彼此合うてぞ、人の心も和々音色の出づるを思につけて、夫婦の樂も此の理、と味な事まで悟りの種となりて、從來男持たぬ身の氣散じと思ひける、その氣散じは、酒飲まぬ人の酔うて苦まぬを下戸の徳とせるやうに、飲む氣になりてからは、酔ふといふが好まじきに、酒々と言ふぞと心着きて、夫に仕ふる苦勞の裏には、謂はれぬ樂のある事、と卒に悶々となりて、八分までは餘五郎を頼に如何ともなる氣に、殘る二分をば分別に餘せしに、此處からも縁談を仕懸けられて即座に迷の雲晴れ、高砂の浦に旭日千歳の松を照す心地して、何道にも身は縁付くに極めて、文平の妻の言を待てば、そのやうな氣になられたは我等夫婦も喜ばしく、扱此方の思はくも葛城様のお話も同一にて、篤と心底を聞いてくれよとの御頼ゆゑ、いかやうに思はるゝか、尋ねて見ましたまでの事なるが、どうやら得心の御様子にて安堵しました。そこで別に一つ話といふは、これも葛城様のお世話にて、此方が望みとあらば出世の道ありて、先方様は東京に二人と無き御身分にて、お名は日本國中に弘り、身代は葛城様の直下に附くといへば、四五千萬圓の大身代。家來眷屬は百人に餘り、商賈は重手代に委せて御自分は樂隠居。四十にしてお子様無きを憂きことに思はれ、此跡式のやみく／＼人手に渡るも口惜ければ、幾人かお妾を抱へられても

三人妻

其効無く、お一人出来たる女のお子さまは、御病身ゆゑ御相續覺束なく、今一人素性正しく、暇しき樂なごせざりし女を、と八方を尋ねらるゝに、あれば容顏が御氣に入らず、嘯き東京にも是はと思はしき女無くて、拵かしがらるゝを葛城様の憶出されて、艶なればと文平へお話のありけるを、私に了簡を聞いて見よとの吩咐。是は何と思はるゝぞ、動むるではなけれども、と言ひつゝ動むる口上。その家の榮華の様を見るごとく言立て、妾たちの暮向を語るを聞けば、桂を薪にすといふまでにはあらねど、文にも緩らば、玉を炊々とも書くべき贅澤。男にても月五十取る可難しき世に、百圓の扶持といふにぞ驚かれぬる。お艶は妾と聞くより、那樣ものにと、文平の妻が冗言盡すを煩く、噫、人は貧にはなるまじきもの、心正しく行清くても、極れたる事を聞かざるゝぞかし。さりとして既しめむとの意にはあらで、我身の出世とおもくば憊る事をも勧めたまふなるべけれど、日頃の氣質を御存じにてありながら、貧ゆゑには人は盗も爲かねまじく思召さるゝが恨めし、と口數多き女ならはいふべきを、温玉の如きお艶の何に就けても可憐う、語和かに難有き由を述べて、折角のお心添なれど、たどひ味噌澆取げましても真面目なが性に合へばとて、諸ふ氣色の見えざるに、母ともいふべき齡して、さりとは無分別を勧めけるを、今更お艶の手前可愧さに、

三人妻

文平の妻はいかにも感じ入りたる顔して、若いに似合はぬ殊勝なる了簡方、女は誰もさる心懸にてありたし。私ぢやとて元より好ましからず思うたれど、葛城様の御頼に餘義無く言うて見たものゝ、内心には否と言はるゝを願うておました、と話の切目に夕餉の膳出して娘等と呼寄せ、食後の茶には氣の張らぬ雑談に興じて、聽て還しぬ。

奥の間に様子如何と待ちかねたる文平に云々と語れば、然もあるべしと思設けたれど、今に始めぬ堅い女と當惑して、その調子にては我から言うたどて、色好い返事はすまじきに、夫婦して執冗く勤めなば、慾に頼まれてする事など想はれむも心苦し。此上は何も言はぬ事に極めて、在りし次第を餘五郎に挨拶すれば、格別失望せる體も見えずして、ちと殺生なれど慙して、と別に一策を含ませ、跡に一人、雌を留めおくべし。彼は事に馴れたる男なれば、萬事談合して首尾好く計ひたまへどて、禮とは言はで文平方へ貽りたるは、娘二人へ友禪縮緬、厚板の帯地、いづれも對なり。内儀へは白縮緬一疋、文平へハ、ナの大巻五箱、十疊敷の天鷲絨氈一卷、外に四季の花鳥畫しの屏風一双、和亭へ註文中なれば、歸京の上送ることに約して、逗留七日目の朝餘五郎の一行は金澤を引拂ひけり。文平夫婦はかの贈品の義理もありて等閑にしがたく、雌

を我宿に引取りて、家内心を端して懸念に待せり。

妾では、大臣がと言うても否といふお艶の心を奪ひかねたるに、何處までも報恩を根に持ち、餘五郎が媒妁する分にして、馬場夫婦の百方に賺しければ、お艶は日來二無く恃む人の計ひを疑はず、何分にも宜しくと任せて後は、唯わくくとなりて何事も夢心地の中に、善は急げと出京を促れて、近火に遭うたほど慌忙しく世帯を畳み、知己の暇乞も倉卒に、何が何やら理解らずに故郷を離れ、新橋に着きても仍舊なりき。

(二十二) 瑠璃の梁

差當りてお艶を舍くべき家のあらざれば、穢ろしくとも、裏時これにて長途の疲勞を慰めたまへ、と雌は我居宅の二階に請じ、女房に内意を含めて、疎略にすべからずと屹と言渡せば、はて冗いな。近火の折玄關へ名札一枚投込んで来れば、知らぬものにてお翌日尋ねて、一圓づゝ禮するといふ、大氣な御家風は外に類無き御前の、いとしがらるゝ御方を預るとは、借用證文取りたるも同じ事。又御當人も直に位が定りなば、此間中はさつうお世話になりました、と馬車に禮物積んで来らるゝも見えてある、と月棚の隅に陰せる撲滿に、銀貨泉の如く一夜に噴溢るゝ夢かどばかりの歡喜。然ほど深切なるもの無く、大事のくお主のごとく

三人妻

三人妻

册かしこき、召使のごとく立廻りて、隅々まで心を着けて世話すれば、お艶は迷惑して、今更手土産一つ持て来ざりしを悔むなりけり。

轟はお對手を女房に委せて、不取敢葛城へ歸京の顔出しすれば、首尾はと訊ねらる。何も上首尾にて、拙宅に御休息。旅中御懣りも無う、尤も長途の事ゆゑ、汽車の中にて血道發り、それも直に御快く、明日は淺草見物の案内せよなどと、家内におほせらる。御元氣なり。されども左右故郷可憐しく、右も左も見識らぬものばかりに心細き御様子ごようすの傷はしさ、一日も早くお心落着くやう、御不便を被けられたらばと言へば、餘五郎も嬉しき顔にて、促せくな、其處に忽ゆかりはあらねど、其方の許にいつまで預けても置きがたし。假になりとも急に一軒宛行うて、彼の世帯を極めてから寛緩取掛かるべし。鳥は既に我懐に入りたり、と願ねがひ掻撫かきなつれば、煙草好は忙しき中にて一寸一服といふが例なれど、此道は些と違ひまするかど不減口を吐けば、それほど意地様いぢさまでもないわと阿あられぬ。

轟重ねて、彼の御方お馴染無くて獨り寂しがらせたまへば、明日にもお顔を見せて遣さるべしといふ。然らば夕刻より。お待ち申上げますると歸りて、此趣をお艶に告れば、然やうでござりまするかど深く氣にも留めずして、仍女房の東京咄に耳を傾くるなり。

聞いて見るほど、都に住む人は樂き生涯を送ることゝ一筋に思込むは、銀座通の町並、歌舞伎座へ行く女の風俗を見てのみの了簡なり。語るものも故國自慢から聞苦きこととは露ほども言はず、御濠の松に給くは死あり、區役所の前に捨子の掲示あり、裏町横町の露地を入れば、罪無うして配所のごとく棟割長屋、こゝらには隣の庖丁借りて喧突のどつく大晦日の佛さを識らねば、これほど好き處は無き土地に、我も住む身となるが嬉しく、何處を見せうといはるゝ繁華の名所を見物するが樂しく、耳目の慾のみ先に立ちて幼き心にはなりぬ。浦島が子は龍の都に遊び、歸りて七世の孫に逢ひけり。此の男女房もありけむを、我ばかり面白さに、食はずことも忘れて、何百年の流連とは古今例無しの大淫れ、阿房の鑑となりしも、珊瑚の梁、珊瑚の柱に目の眩れしに外ならず。

出入の髪結は天神の名人、此東京に三人とは無き上手なれば、と前夜より女房の吹聴にて結はせけるに、お艶の髪は艶ありて漆のごとく、癖無く濃くして、長きことは座りて疊に曳くを、髪結は下梳の櫛を停めて、世辭ならず譽めちざり、誰様のお姫様に此牛分も上げましたらば、見事なる島田が出来やうものを、結髪に

三人妻

三人妻

は勿體なきお髪、と骨折りたる出来榮は無類上々、下品ならず家喜ならず、容色も之が爲に一段上りたるに、
薄化粧して又二三段上げたり。三ヶ日は我女房にも惚るゝ人心、一結髪、二化粧、三衣裳、美女の此三道具
を揃へたるは、男の目の大毒ぞかし。

物を言はれては興覺むる加州訛。あの不調法なる語氣にても口説は出来ることか、と陰にて女房の獨り笑止
がりけり。二階にては午少し過ぐる頃身仕舞了ひて、華車なる銀煙管に霞立つ長閑さに引更へ、樓下の混雜
は、年始にも見えられぬ御前の御入。料理も此の近所のはお口に合はず、と色々氣を揉みて、遠路を厭はぬ仕
出し。酒は猶更と、葛城が飲料の銘を覚えて其品を取寄せ、御感に預からは一家の面目、と夫婦心を竭して
待ちけるに、三時頃より雪氣の空闊く、寒さ身に染みて足の爪先痺れ、頸元のぞくく、に婢は向られつゝ、
隠して手拭を襦袢の衿に挟み、小桶の外に兩手の輝に息吹懸くる折から、雲落ちて一間前は見えぬ大降にな
りぬ。

今頃は出懸けらるゝ時刻なるに、ざりとは悪いものが降出した、と夫婦顔を皺めて、折角の設けも無駄にな
る事かと眩ましが、徒歩で來らるゝお身ならなば、寒も雪も馬車の中へは降らじ、と思翻して置火燵の用意

三人妻

を急ぎぬ。お髪は手爐に大内を燃らせ、心閑に床の花を眺めておたりけるに、外方邊に噪しく、人の來れる氣
勢と下行けば、餘五郎は毛皮の雨衣に包まりて、古狸の立てるがごとし。例の錆びて太き聲して、えらい
降りて女房に挨拶しつゝ、轟に案内させて來るに出會へば、椽に坐らむとするを、此處では御挨拶が出来ぬ
ば、まづ二階へといふに、お髪も座に着きて、千萬禮を述べれば、及ばずながら何處までも引受けて御心配は
させじ、と立派なる口上濟みて、馬場夫婦の音信を尋ね、旅中の可笑き事どもを轟に物語らせ、二人笑ひの種
にして、程無く膳出づれば灯を入れて、小唄の奏の音の合方靜に飲始め、酔うても仇口を憤み、轟にも其意
を得させて、詭計の端をも氣取らせぬ仕向。他が此席を覗きても、女は藝者にあらず、妾にあらず、情婦に
あらず、疑ふらくは是………途に何者か知れざるべし。折々出づる常談にも色めけることなく、い
づれも席を正して献酬に會釋多く、これでは女を置いて飲む効は無き親類の盃も同様にて、一向可笑からぬ
酒ぶりなり。

十時過に盃を收め、食後に少しく雑談ありけるが、此間お髪は苦しげなる呼吸にて、玉山未だ頼れざれども、
桃花の露重き風情あり。氣毒な目に遣はせました。近日別荘にてお茶を進む折には、今宵の返報に此方甘

味責みせめになるべし。酔過よひぞてお話しすべき用事も色々忘れたれば、是非近きに、と歸るを見送りて、攀ヒづるがごとく階子はしこを昇りしが、遂に得堪えず、長襦袢ながじゆばんのまゝ臥月に入り入れば、枕頭まくらもとに女房は氷蘂ひやうのうくを括り、蟲は丸薬まるぐすりを探し、匣はんざう持て来るは下女の役。酔醒よひさめの水を汲み置きて行きしまでは、寢心うづこころに覺ありて、其後は知らず。

(二十三) 夜半の嵐

客の歸りて間も無く、剝啄とくたくと門戸叩く音すれば、樓下したに獨り居合せたる蟲は、徐に立上りて戸を啓れば、今方歸りし餘五郎が又來れるなり。蟲は聲を低めて、痛く酔はせられたれば、唯今御介抱最中さいちゆう。程無くお寢らるるまで奥にて御休息あるべし、と設けの席に導く。此には彼の置火燵おきたたを移して酒の用意もしたり。まづお一盞いっさんと酌して、様子を見届けて參らむとて出で行きけるが、少時ありて階子を下來る二三人の足音して、僅みづ三四盃よつよりは上られぬに女房が聲も聞は、二階を早く形付けよと言捨て、蟲は又座敷に來り、最早お寢られました。と聞くより餘五郎火燵かたより伸出して、何かと厄介やくわいになりたり。此度の一件、前半は馬場の働にて、後半は全く其方そちの手柄てがらで、褒美は後日沙汰すべし。此後ともお囃の始末に就きては、萬端其方を煩はさむと

あれば、臻いたらぬ身にはござれども御用にも立たば難有かるべし、と額を疊たむらに摩すり付けぬ。襦あがりくちの外まで女房合圖あがりくちに來れば、蟲はいざと餘五郎を昇口あがりぐちまで案内して、度約なかくちは此處等が宵の口と還す。寢間しむべは奥の六疊むすと忍寄れば、女房の料か、身を入れらるゝほど襦の端を開けたり。枕頭まくらもとなる有明の燈火あきあけ幽あやふかにお囃ねがたの寝姿ねがたを見せたるに、冬の夜ながら酔うて熱ければや、胸の半なかばまで夜衣よせの外ほかに顯して、疊なげたへ投出したる腕かたなは玉のごとし。

* * * * *

誰か人の忍び入りたるを夢心地に覺えて、酒氣の失せたる時目覺めざめむれば男あり。心も消ゆるばかり駭おどきて瞼まぶた起おきければ、お囃ねがたと呼びて向けたる顔に又吃驚おどろき、心跳り、呼吸いき急いそしく、愕然おどろとして夢を疑ひ、眞まことを呆あはるゝなりけり。欺あざむかれしか、淺あやましくも襲けがされしか。狼藉ろうじやくなる餘五郎め、非道ひたうなり、無禮むれいなり、口惜くちをや、腹立はらたたしや、と顔色變りて身を顛よはせ、男を睨みつむる眼中めの中より點々と涙を流せば、餘五郎は思の外なる氣色に驚おどきて、こは有なむる外ほかに手無し、と虚言うそも交まじせて我切無わがきりなしき思を語り、連も心に從したがはじと見て、詐いつはりりしも憎にくしとて爲なし事ことならねば、

三人妻

今宵の狼藉は幾重にも此方の過失、と詫びても肯かた泣入るを、なほ言を盡して、行末まで捨てまじき心を明かせど、肯かざるか、泣續くる。餘五郎は切りに口説く、お艶は直泣に泣く、此間に空白みて、戸障より外の色射入り、鐘も鳴り鶏の聲も聞ゆる頃、お艶はやうく涙を飲めたれど、憤怒は未だ釋くべくもあらず、衝と次間に入りて、闇がりの隅に打俯しけり。

撫牛のごとく取遣されたる餘五郎は、彼の様子を候ひけるが、徐に立ちて、次間に泣俯すお艶の後より、曉の寒さに風や引かむと抱起せば、腋に懸けられし手を可思げに振解き、冷にわたれる身を石の如く硬めて、袖に面を掩ひつゝ、壁に向ひて其の獨を守り居たり。

餘五郎は掻巻持来りて着せかけ、あれまでに實を語りければ、心はなほ融けずして難面も泣いてくれるは、さまざまに憎き餘五郎か。將た我情が可厭しきかと寄添へば、脇腹を臂頭に衝れて、酷き爲方を恨みもせず、人の親の子の忤るを賤す氣になりて、十言しへば一言の應だに無きは、弦の断れたる弓を擧ぐに似て、此くらの拍子抜して張合無き事はあらぬに、倦ます挽ます、口の酸うなるまで諄々と、女の心碎けぬべき言の有丈を口説きぬ。

三人妻

お艶は只管男の狼藉を憤り、悔しと胸に餘りて氣も狂はしく、世に、容れられざる大罪をも犯せるごとく、人は知らず天地は知らず、身に添ふ神は思ふことをさへ辱しめたまふに、此罪のみは懺悔にも滅せず、終身徳の疵になりて、其癩永く墓上の石にも留まるべきを、愧ぢつ、懼れつ、悔いつ、陋みつ、胸の紛亂に、目も眩み耳も聾ひて、他の言を分解くべくもあらず。かゝる折にぞ涙ばかりは凝けられて限無く流れける。

餘五郎も幾と持餘して、四壁に浸み入る霜に嘘の後の胴頭ひ、脱捨てたりし裘を引纏ひて、お艶の傍に氣色を視てありしが、此女思ふに勝れる節婦なり。美色を烙鐵に傷けもせて、二十四まで春を諷りて指もさへせりしは、實にも今思中りて、さりとて情無くも不便なる事してけり。此罪を贖はむには、お才お角などのごとく圍の伽ばかりの玩弄物にせず、随分真心を竭して終身の友として得さすべし。矜に紅色のなくなる齡して、少女のごとく泣入る心中を推量れば、有繋に我も面目無くて、慾に任せて恚る悪戯することの不具の行なるを今ぞ悟れる。

彼は身も世もあらぬやうに悲めど、定まれる夫のある身を傷けしにはあらず。女子はいづれ男を持つに極れば、妻といひ妾といひ、名目は違へど、妻も妾なれば妾も妻なり。五十圓とる官員様の奥様とならむより

三人妻

は、五千萬圓の紳商のお部屋様と崇めらるゝことの仕合を、今の間に心着くべし。まして一度にても我自由になりし上は、濡れぬ前こそ露をも厭へ、恠なるからは、と誰も爲る覺悟して、得心するは知れたれど、今は何といふとも肚裏へは入るまじと、故と當惑せる顔して、其の様に泣れては今更面目無く、夜明けて合はすへき顔なければ、之より一先歸るべし。重ねて逢ふまでに篤と分別したまへ、と下りて見れば家内ははや起きて、壺所には味噌汁の臭高く、障子の硝子越に覗けば、庭の立木白々と垣の根方に霜柱立てり。轟出來て、昨夜は如何とまづ尋ねぬ。これ媒約の古き式のよし。餘五郎は苦笑ひして、弱つたと顔を撫で溜息吐けば、事成らざりしかと轟大氣遣にて仔細を問へば、如何様弱るべき段々を聞かせられ、一々肩を擧めて、なるほどと受流すばかり、唯不思議に呆れて言ふべき語も無かりけり。あの様子にては二三日何も食はず、鬱々と物思ふなどの事あらむも圖られねば、さる虚を與へざるやう、わつと浮せて氣の紛るやうに娯まするが肝要なり。大義ながら此の役目は其方夫婦に頼みたり、と懐中より大きな紙幣を擲出して、保養の入費と渡せば、女房も罷出で、屹と御受をいたしぬ。

(二十四) 火澤睽

八時にもなりぬるに、お艶は未だ起きざるにや、下來らざれば、汲置きし手水の湯は大方水になりぬ。女房は竊と昇りて兩戸一枚啓くれば、奥に物音して、總て帯引結むる音のするくと聞ゆるに、二枚目の兩戸を引寄せつと、お櫻眠ましたかと聲を懸くれば、寢過ぎましたといふ聲音の疊れるは、女房も合點ゆきたるべし。兼やくと婢を呼べば、箒拂子を持ちて直に昇來り、手捷く寢道具片附けて掃除を始むるなり。お艶は昨夜辱しめられし身の、面上に其由の書かれたらむとと怯ぢ怖れつと、人無き闇に忍ぶべし、明るき日影、家内のももの見る目に面眩く、身を竦めてこそくと鹽敷に下りぬ。血色勝れず、臉赤く腫れて、涙痕の濁へるに、鬢毛の少しく亂れかたりたる、自から愁表れて憐深く、今朝の餘五郎の言に思合せて、さすがに男の手暴を憎む心も出で、女同志の情には、どのやうにも慰めて氣の葉結を解かせたし、と我は機嫌好くして調子輕に食事を薦むれば、今朝は物も欲しからずと辭むを、上げましたくてわさく調へたる皿の物、せめては一箸と強ひつけて、今朝茶屋より人の來りて、歌舞伎座の見頃なりといへば、暮間は十一時、早う御支度をなされまし。好い處を取らせて置きました。否と有仰りましても肯く事ではござりませぬ。お約束ではござりませぬかと嘖り立つれば、憂き事餘る身は病めるも同じく、氣の沈みて懶げなる生返事を、

三人妻

三人妻

女房煎詰むる氣にて、義理と申うて一幕御覽じませ、お否ならばお歸りあそばさるゝまでと退かぬ言に、やうく向ふ鏡の我が顔は、鈍くも曇られし不淨の皮、と愛相盡きて腹立ちて、眉刷毛投着けて、昨夜を憶出づる無念の涙を滴せば、折角の化粧も體無になりけるぞかし。

是ゆるに由無き者に思を懸けられ、辱しめもされし顔を仍妝るは、また禍を招く氣かとおのれを容めて、無散に洗ひ去りし顔は更に美しく、ま何處までも迷はするに出来たる女と、餘五郎の見ば晒ふなるべし。

歌舞伎座も想ひしほどにはなくて、目は假せども狂言は身に浸みす。見物の花と見ゆる藝者の惣見物、錦に玉を纏みて、粒の揃ひたるは新橋、と女房の敬へけり。男を客にして媚かしく藝を賣るに、梅枝商ひよりは可愧しき賤業と思はるゝに、聞けば多くは無藝にして、手枕に世渡る賣淫とは、誰にも知られたる身上を、愧ぶ氣色のあらざるのみか、藝者がどれほどか辱さるゝやうに、人も無げに座中に幅して、これ見よがしの顔色。さりとては淺ましき了簡、と他の事は謂はれず、我身とて其には違はぬ男の玩弄物になりぬ。比べて見やうなれば、藝者の色を賣るに優るとも劣るまじき、賤むべきは我にして、愧づべきは此の身なりと、心に責めらるゝ切なきに堪へかねて、舞臺も餘所に俯きがちなるを、女房はそれと識れども、手を着け

かねて氣ばかり揉みぬ。お艶は病者のごとく、女房は看病人のごとく、互に胸を痛むるのみ、何の保養にもならず、一向つまらぬ顔にて還りけり。

此分にてはいかなる保養を勸むるとも、憂事の紛ることにはあらじ。端的に割碎いて、飲込ませるが効能もあらむか、と夫婦談合の智恵を推りて、晝は遊山に連行き、夜はまた説得する事に定めけり。

夫婦交るゝ言を盡して、葛城の人物の頼もしく、飽きて棄つるやうの薄情ならぬ證據を數へ立てゝ、一口に妾といへばいふものゝ、妾にも品ありて、玩弄物ばかりなるもあれば、世嗣を儲けむ爲の浮氣ならぬもあり。奥様には男の御子といふもの無く、懐懐はあれども、御病身なれば行末頼みにはならずとて、奥様も御得心にて、これまでに二人もお妾を置かれたれど、仕合悪う、いづれにもお胤は宿らず。おひく血氣の衰へゆかるゝお身なれば、今の内ぞと躁らるゝ折から、お目に留りたるは此方様。金澤の江口屋にて奥様も陰ながら御様子を知られて、あれなればと御夫婦のお心に稱ひ、馬場様もそれはと淺からず歎はれながら、此方様の物堅き御氣性を知れば、打明けて怨とはおほせられざりけれど、俱々に勸めて此方へ遣はされしは、其思召ありての事なり。日頃此方様を子のやうにお世話なされし馬場様御夫婦へ、御身の爲を思はれての

三人妻

三人妻

取計なれば、必ず悪かるべき苦無きに、よく御分別遊ばさるべし。名義は妾といふものゝ、葛城様を一生一人の夫と守りて貞節を盡されなば、女の道に何處か背きたる處あるべき。人の女房にて二十三四にて夫に死別れ、便る方なければ可厭でも再縁せずは身は立ち難くて、浮氣ならで兩夫に見ゆるは世間も許す例なり。

それと比べて之を如何に思召さるや。萬一の事ありて葛城様の先立たることも、一生安樂に暮さるやうに爲置かむとあるからは、末は捨てられて、さうの意のといふ氣遣無く、第一氣樂なるは、普請は望みのまゝの結構なる家に住みて、月々百圓のお手當にて、二週間に一度ほど葛城様の見えらるゝ外は、主無き獨り天下にて、お世嗣の出来た曉には、其上又どのやうなる御身分にならるゝ事か、考へても御覽なさるべし。承まれば、葛城様は此方様のお宅へ、お出入の卑き御身分なりし由。さるものに册かむは、と耻辱に思召さるゝは一理あるやうなれど、古の豪傑乃至は今廟堂にあらせらるゝ顯官方も多くは下賤に生れ、男は裸百貫とて器量次第のものにて、氏系圖を彼此いふは、才能無き落者ものゝ負惜なり。我祖は天日嗣の御末にて其中頃は左にも右にも、とさる學者の詠れたる歌の通り、先祖は誰も同一なる我々の華族となり候

三人妻

多と下り、富人となり乞食と落つるも、皆人々の腕次第なれば、人は生れにて貴からざるは、黄金も金剛石も、足に踏まるゝ土中より出で、恐多くも帝の冠にもなるぞかし。餘は女房の番にて、女はまた女の臍に落つるやう、理窟を放れて事を凡近に取り、義を勘定に發して、膺の關鍵の痛くなるまで論しにけり。白刃を頸に好て、従へと脅かすとも、命を取らむとても厭くまじきお艶なれど、先の一夜の首尾は、猛虎に射たる一箭よりも身の弱りとなりて、心も鈍り、酔はせて忍ばれし我には微塵も浮きし心はあらざれど、襲されし後の所爲無きは、紙に墨を塗りたるも同じ事。其痕を滅さむには、紙を引裂き捨てむ外に術無く、身を殺すにあらざれば、此汚點の去るべきにあらず、命あらむ限りは襲れたる身なり。初一念を後めず、妾を嫌ひて他人に添はく、男二人持つ理にて、これも悪づべし。左右は墨塗られたる紙を墨に染むべきか。それも口惜し。

是非の分別紛々として我心に持餘し、馬場の許へ文して相談すれば、夫婦二通の返事、葛城の世話になれど俱々に勧めぬ。なほ定めかねて易を見てもらはむと言出しければ、中らぬも八封と、凶と出られむことを恐れて、夫婦口を極めて、盤算も同じ理窟、由無き惑ひの種と斥しても肯かざれば、女房附添ひて、小

三人妻

石川に前有といふ翁神通の上手と聞きて、之に便りて吉凶を問へば、火澤睽の上九の變に遇へり。これ始は人を疑ひて讐敵のごとく忌厭ひけるに、其人は更に苦心無く、却て我に親みを求むる象なり。寇するに匪ず、婚媾せむとす、往いて雨に逢はば即ち吉ならむ。されば此方にも疑念を露して和合するを吉とすとは、どうやら女房が先廻りして誂へしやうなる判断、と吉過ても心快からず。猶様々に案じ煩らへども、六分までは此方の物、と竊に葛城へ様子を通ずれば、其夕餘五郎來りて無理に説伏せ、轟夫婦の前にて強制の益事ありけり。

(前編をばり)

(一) 櫻茶屋



春も四月になりて櫻咲きぬ。人の心も陰を出で、陽に浮けば、酔ひもせぬに面白く、歡を爲す能幾時ぞと、不用の財持てる身の撒きたうなる日和、凡そ人の無分別發すは此候なり。

後 葛城大盡念懸けたる女は盡く手に入れて、今は金儲の外に慾無く、こればかりも氣が竭きて、何をか娯樂と、變りたる事を考ふれど、抑娯樂といふは物事不自由の中なる少しばかりの自由にて、さる大名方の染々近侍に御意遊されけるは、

予は一年ほど家來をして見たいと。此ぞ御尤の正中なりける。世間の待受けて樂にする正月も、一向可笑からず過して、天地も若やく花の時節に、錢勘定ばかりしてゐる所爲か、朧月が大きな銀貨に見えて、酒も身に浸みぬと、種々に保養の工夫すれど、格別の智恵も出ぬに困じ、お麻を捉へて、何と春らしき趣向は無きかと、洒落半分に尋ねけるが事の起因となりて、先頃手に入れたる音羽の別荘は、庭廣く櫻夥しく、希なる名木も數ある由にて、此一週間を好時節と聞きぬ。花見して御秘藏の三人を招き、主は同一の三人にも顔を會させ、妾はまた悦しがらせたまふ美しきを拜みたければと、味な註文を、それ可笑かる。唯花

三人妻

三人妻

見にても興無し、一趨向して思ひまむ、と餘五郎乗氣になりて、彼か此かと案じもし、談合もして、横手を拍つほどの事は浮きます。ちと古けれど葎葉張の茶店を出させ、賣物は銘々の工夫にして、一家のもの百人も寄せ、花薫り、人の出盛る中を、姉様冠に目盛じて、錫の煮附、慈姑の團子、横食立飲、思ふままに浮かれて見ばや。花も長うはあらねば、急げと餘五郎がいつもの短氣。招かれたる客は此催を樂み、明日にても苦しからずと頰を延す中に、茶番氣ある輩は我劣らじと、思ひく目論むなりけり。趣向は面々隠して、蓋を開けて、わつと言はするが花なれば、構へて我にも知らすべからず、と三人へ大盡の註文。當日の大役味噌を付けては耻のみにあらず、御機嫌を損じてはと、いづれも半狂亂になりて騒ぐに、お艶ばかりは自若として食着せざる様子、ヒを投げたるぞや、怒る事は古今江戸子に限りて、加賀國の住人には難題なるべし、と人の氣の毒がりけり。お才は柳橋の喜佐太夫といふ頓才即智の男藝者を軍師に頼めば、扇を扇と開きて、腰の邊をばたくと打扇を、随分御心安かるべし。諸事は不肖の方寸に罷在り引承けて、日夜懈無く計を運らせば、お角の方にも油断せず、趣向獨の胸に餘り、手近なる附人の長澤を相手にせむにも、餘五郎が此奴たしかと見立てて附け置くほどの親仁なれば、仁義忠信の講釋は善くするものゝ、洒落を四つ地口二つの外は、其筋の心懸あらざる唐邊僕、膝にも劣れる相談相手と、更に候補者を求めけるに、出入の小間物屋の親仁、昔の放蕩の遺物は、齒脱ながらの美音、清元に千兩注込みを今の自慢にして、其頃は随分悪い洒落もせしといふを後見に頼めば、そんな事ならば身錢を切りても、一向苦しからぬ好物。二つ返事で請合ひ、家業は餘所にお角の家に入浸りて、息子が提灯さげて夜迎に来たりしを、呵飛ばして之に夢中なり。

三人妻

當日の來客は總勢百三十餘名、此中四十人は餘五郎が格別の懇意にて、外は總て我商賈の重役と聞えぬ。音羽の別荘は、五日の間に藪の中なる小草も迹なく、花の木下は箒目清く、土香りて、處々に茅葺、貝殻屋根、葎葉張、黒木造、姿をかへたる十軒の茶店建ちて、護國寺の鐘啼鳥閉に今日は暮れぬ。曙の空曇りて如何と氣遣ひしに、風少し出で、麗なる日和を定めぬ。音羽なる笑青莊の門には、翠柳の縁、濃に二十餘間の流水露地、垣の外なる密竹に暗く、此に心を籠めて幽情の體に造り、奥庭の木戸を入れ、華美さに目覺むる一面の櫻林、何千本の枝頭花重く、人は雲の中を行くがごとし。西の隅に一拱もあるべき普賢櫻の下に錦の幕を張りて、伶人袖を聯ねて妙なる音を立つれば、門に入るもの多時は此處

三人妻

を去らす。休憩の床几を幾處か木間に得て、各十一二なる女童の眉目麗きを擡りて茶の給仕に附け、少しく距りたる物蔭の小屋に、煮茶點心を司るものあり。ほのぐと茶煙を落花の風に颯けたる、いと心憎し。

花見る衆を見るに、いづれか容の可厭なるは無し。今日の爲に衣裳を新に調へたるも多く、綺羅の巷とは是なるべし。唯見る十餘人の女郎の一群一様に紺の日傘をさしかけ、銀地の扇を髣邊に翳して、淡紅天鷲絨の雪駄ちやらくと、美なる面を揃へて、嬌媚かしきこと限無し。此時樂の音の一際清みたるも不思議なり。

或は黒の紋服袴装の五六人、美男揃ひにて来るもあれば、母を劬り、子の手を牽き、妻を伴れたる殊勝なるもあり。衣香、帽影、替の光、黄金鏡、マニラの烟、薔薇の風、女の顔は白く、男の髭は黒く、往來織るが如く、笑語の聲の中を、反古染の袖無羽織に淡黄頭巾打冠りて、白酒や白酒を賣行くは、第四商座の番頭清水某、これは御趣向と褒るものには、格別の大茶碗にて振舞ひ、向鉢巻にて難波鮓と箱揚げゆは第二商店の會計、老妓の島田ほどの簪包を行遣ふ童女とどに一つ宛られて通りぬ。チャリ

三人妻

ネの道化師様に装束をたる男、首筋にその數二百許色々の風船球を結びつけて、西洋唱歌を謳ひつゝ、道化女に装りたる侶にヴァイオリンを弾かせ、拍子をかしく舞ひながら絲を断れば、寶珠の玉の天上のごとく、小氣球天に満ちて、之も興になりけり。此外に種々の思附人笑せとなりて、いづれも花は餘所に、此上はお妾様は何處におはします、と足は皆掛茶屋に向きて急折から、木陰より白鳥片手に衝と走出でたる女房あり。手織綿と見せたる京御召の小袖に、紋縮緬の赤前垂、淡黄縮緬の平袴を片褌して、横櫛露に置手拭したるは、茶見世の噂が酒買ひにゆくと見せて、水際立ちたる美人、彼は誰と吃驚せぬもの無し。跡を追ければ、池の畔の鏡花亭の主、煮染の品々を砂鉢に盛りて、外見を不味くしく、念の入りたる生稻が庖丁。酌に付けたる小女郎の馴れたる舉止は其の筈、一粒撰にしたる柳橋の半玉ぞかし。

三間の出店にも各客満ちて、主婦は八方を駈持に、面白半分の仇口さして、應對の上手と姿の意氣なるに、識らぬものも此の女こそ才藏と目を着けぬ。築山の麓なる四間の掛茶屋は、本宅の小間使、出入の者の娘の受持にて、茶辨當を預るなり。

三人妻

茲に一際自立ちて見えたるは、木間の廣き處を擇びて、五間四方に白と淺黃の段々の縮緬幕を打回して、燃立つばかりの花燈を鋪填め、洋服着たる客の爲には緋天窓絨張の椅子を備へたり。給仕の女十人、白袴に紫の矢飛白の振袖、彌茶の變裏、淡紅緞子の帯を立やの字に、鬱金縮緬の扱を長く結び下げたり。絹足袋、紅緒の草履、高島田にお輕簪、一樣に靚粧を凝せる。面を揃へて、人に思はく的好悪はあれど、色好き姿を恣も能うぞ聚めける。いづれの大名家の櫻狩か、と昔を今に忍ばれて、格別の趣向奥床しき觀なり、と持燧しつゝ、此處は紅梅の受持と聞けば、察する所、自身は姫君の扮装にて、彼几帳の蔭に小陰れ、今に現はれて驚かされむ、と士女目を皿にして四邊隈無く探せども、さるべき影も無し。まことは此小姓粧の中に姿を窺し、女將門の執れを其に見紛らせむ。巧は、飛切りて獨り無類の艶顔に露るゝも是非なし。二十二三と聞きしに、十八九の中に立交ひて、あながち年長に見えざる様ぞ。威ありて猛からず、愛嬌ありて撫かず、温乎としたる風俗自から御守殿の美しい處を備へて、之が地かとも想はるゝ品の好きに、あの御酌にて戴かれるとは、今年一年中の冥加と、新橋邊に嫌はれぬ男ども、見識を失して此幕の中へ込入る。垣間見る女等は品評して、人立山の如し。

三人妻

此處に飲み彼處に啖ひ、禮も糸瓜も忘れかゝる頃、今一人お艶の店の知れぬを衆人喚出して尋ねけるに、築山の陰に花の氣少く、水石の形勢をかしき處あり。四方植込に隠れたる庭の奥に茶寮古びて、新らしき枝折戸を見付け、此處ぞと入れば、竹の奥に碁聲ありて、花も酒も浮世は煩き顔して、五七人の客を友に、心閑に茶筌を拵りて、燧々の釜の松風に耳を清ます女はお艶なり。玉川式の面影を寫して、茶を賣る心の風流、此胸中難有しとおもふものは僅少にして、悪寂に寂びすましたる此體と見るより、飛だ目に遣ふべしと、心得無き輩は恐怖をなして、門より覗きて逃歸るもの多し。お艶はさる窮窟の主意にあらで、酒の湯には妙なる趣向の心算が違ひ、今は葛城夫婦を待つの外無しと思ひけるに、おひく女客の入來て、茶杓の手許忙しく、折角の志も通りたるを喜びけるが、女の此處に入込むと聞知りたる若紳士輩、餘所ながら憧れたる令嬢の跡を慕ひて、聚るもの寡からず。後には椽に腰掛けて、片手飲の横千家などといふ無法流義も顯れ、濃いのを最一杯と、夜店の甘醴飲む氣の醇淡あり。これで醒めた、又改めて腰の瓢を取出し、一組始むれば、三組四組となりて、此庭も散々に騒がされけり。餘五耶夫婦は自立たぬ装して、まづおオの煮賣店から巡覽り、紅梅の幕の内、お艶の茶事、いづれも氣に稱

ひ、諸客の遠慮無き浮かれ様に満足して、夕暮人の散るを待ち、今に月も出づべし、更に夜櫻を肴に内曲の酒盛、と寮の二階に席を設けて、お才、紅梅、お艶の顔を揃へ、夫婦を上座に相識の盃を回らせり。横櫛の意氣、御守殿の品、茶人の寂、庭の櫻を併せて四絶の色、お麻は女ながらも此中におて、掃溜の側に立つ心地にはあらず、成る口におのづから過して、春の夜のおもしろや、花の露に酔を醒まさむと、五人連立ちて庭に出づれば、夜色朦朧として風寒からず、月を踏み花を分けて、もう二十年若くば鬼事して遊ぶべき夜頃、茲に一人婆が疵にて七百金の春の宵、と餘五郎が皮肉を言へば、其舞ゆるに四百圓とお麻の唄ひぬ。今宵は此に雑魚賤、と二階の十疊の間に床をとらせ、いづれも然そや疲れたるべし。はや寝まむと口には言へど、月のおもしろさに餘五郎 欄の傍を離れかねて、酒に癡き頭を紅梅に掻かせ、お艶茶を持来いと大噺して、此観を見捨て寝るも惜しければ、お才何か意氣な音を聴かせよ、今日奥方へ謁見の験に、錦々藝盡と望みけるに、三味線も琴もこゝに用意無ければとて事寝みけり。餘五郎はなほ寢惜みて、何か爲ねば氣の濟まぬ顔して、雲時髭を折りけるが、聽て手籠の底より黒髭時繪の小匣を取出し、中なる物を覆くれば、拊指の半分ほどなる花骨牌なり。お麻は昔からの好物、當時は上流にも行はれて、賭博は西洋

にて皇族方も公に遊ばされ、仙人も碁を打ち、殿様も將碁をさして咎めざる世中に、花鳥の牌の獨り卑き理はあらじ、と歴々の奥には繪合といふ陰名つけて、三人寄りて物閑なる席は此遊びと直に人の合點するほどの流行に、唆かされて、覺えある手を一寸出したる一度が、二度三度、毎度餘五郎が仲間の一夜千圓の勝負の場にも現るゝ上手なり。お才は下手の横好、待合の奥に徹夜の鼻孔を黙くして、取られて腹は立てど、忘れぬ面白みと膝を進めて身構へけり。紅梅は雪村の別荘にありし頃、折節は朋輩と慰みける事あれど、金錢の沙汰にはあらず、言問團子の賭にて、修行したる腕前の覺束なきを断れど、何も洒落と勧められて、枯木も山の賑しと帝に着けば、お艶も此へとお麻の言に、不調法にて一向心得ませねば、私はこれにて拜見をと、外貌には田舎ものゝ不束を愁ぢて、心には身分ある士女のかゝる遊爲ることを驚けり。さらばと、お艶は除けものにして四人の勝負、餘五郎夫婦は負けたらば金にて拂ふべし。二人は裸躍と聞くより、紅梅は法氣立ちて、心底から舌を言出せば、いづれも面白がりて聞入れず。種々の難題いひかけて、撒かぬ前から雨桐の絶體に、紅梅も爲やう事無し覺悟して始けるが、半途よりお才の大敗續きて、苛立つほど散々に敗れ、吟味はお麻、裸躍はお才と離立てられ、其だけは御勘辨を直過りに過れば、紅

梅が纏に否といひし時何と言ひしぞ。罰金として即金五十圓出さば免さむと、其方が立てたる憲法を自身破るべき謂無し。目前に五十圓並ぶることが克はずば、脱げく、躍らぬかと夫婦に迫られて、是非無さは御殿場のお三輪と、しぶく御解捨て、何を躍りしやら、お艶は顔を背けて見ざるなりけり。

(二) 口説の種

今日の花見を相識に、此後は心易く折々出入るべしとお麻の言を、三人ともに難有くお承して、互ひに朋輩の誼を思ひ、末々までも睦しう渝らじと挨拶美しう別れぬ。

歸來の馬車の中にてお麻の言ひけるは、那の三人には大抵の男は殺さるべし。女の日より見て難ざらば、言ふべき麻の無きにはあらねど、紅梅は温乎として内懸く、園中に手ありて情も相應に深かるべし。お才は快にして張強く、男に我儘なる所弄ぶに面白かるべし。お艶は無垢なる生娘、唯優しくして實あるを取柄とす。銘々の役割といへば、お才は酒の酌、紅梅は床の口説、お艶は茶漬の給仕と、二人して哄と笑ひて、一番の御意に入りは誰と尋ねれば、餘五郎當時は物言はで、聽て煩の邊に笑を含み、されば、お才は確ならざる處ありて物足らず。お艶は底に幽婉としたる處ありながら素氣無し。紅梅こそ聞きて、然も

あるべし。昔ならばお家騒動の曲者としてお麻は笑ひけり。紅梅は人先にお麻の機嫌伺ひに行きて、例の三指にて侍女の御前様に冊くがごとく、寵を恃む心は無くて、憐を求むる色のみ見せければ、如在なき女と思ひつゝ、憎むべき様無ければ、来る度毎にお麻も可厭な顔せず、後には有繋に不便も加はりて、折節には餘五郎にも噂して響むるまでになりぬ。

されども用無き身の餘りに類繁の出入は、眞を露はさるゝ基と、大方御機嫌伺ひの日を定めて、月に二度よりは行かず。二度は鉄かさす神妙なる處を見せて、可愛きものになるべく努めければ、去るものは疎く、来るものには親まるゝ人情の脆さは、蜘蛛のお重も異ること無し。日頃は我慢強く、他のいふ言は聞かぬ女も、昨日出来し裕の見立にも首から紅梅の助言を聴きしぞかし。

お才お艶も二月に一度程は尋ねれど、紅梅に比べて無沙汰勝の間には、自から隔意有て、待遇は親類客の如く、紅梅に相相あれば無遠慮に小言いふなど、萬の仕向内の人に同じく、外を伴れ歩けば、懐にも見ゆめり。お艶には意地から思を繋け、お才は浮氣から疎かせ、紅梅には餘五郎も心の底から惚れたる氣味あり。地女なれど天性備はる男殺し、格別巧みて言出づるにもあらぬ辭に情を含みて、何處に一つ媚かぬ處も無

三人妻

く、拵へものゝ賣色が及ぶことにはあらず、樹に咲ける花と絹絲細工の剪綵花のごとし。男も茲に執着して、一際情からぬ思あるに、尙お麻の陰ながら響むるが力を添へて、いと可愛きものになれば、深川の道の外はおのづと忘られぬ。もとが菊住への意地から、然した譯のお才の心には、微塵も餘五郎に好いたる處あらねば、思はれてからが嬉しくもなければ、疎まれたとて苦勞にもならず。何分とも宜敷やうに先様次第と構へて、之が御意に召さす。飽れて棄てられたらば棄てられた時、最一度左様も可笑かるべし。色も慾も離れたる身に、一月は扱置き、半年お出が無くても子細無けれど、飼れては鼠を捕るが猫の務、騷の道を切りたる旦那殿を、戀ひしやうな顔もせず、怨言の一句も言うてやらずば、月百圓といふ扶持の手前も冥理悪く、惚れましたといふよりは、怨言いふを男は悦ぶものと、知りながら悦ばさぬも罪深し。近頃久しう舞殿の見えられぬは、聲も青い内のお艶いぢめに精が出られるのか、若又風など引かれてか、北の方にも久しうお目通りをせねば、其をも兼ねて股懐の安否聞かんと、本宅を訪ねける日は餘五郎留守にて、奥の別室に遠音幽しく、お麻を正座に紅梅が琴を調へておたりしが、お才の入来るを横目に見て、手をも停めず悠々と一段関ひて、それからの挨拶が昂然として言算く、横柄なる物の言様、音羽の花見の時とは

三人妻

人が違ふたか、と想ふほどの見識になりぬ。
 今お朋輩なれど、此間までは雪村の私寓に、卑くさるゝ我にあらず、と氣満なるお才は胸に著るかねて、日に唾の溜るほど言ひたかりしを、お麻に遠慮ありて辛抱すれば、小癪に障る仕打いよく目に餘りて、此上に勘辨の爲様もあらず。長座せば事を起さむと、立際に紅梅を睨めつけて、ちとお遊びにお出なされまし。今日の様子にては、紅梅め疾よりお麻に擦込みて、朋輩の我等には附合うてもらはずとも、困らぬ心の驕から、虎の威をかりそめにも高飛車に出て、他を目下に見くさる憎さ。世に胡麻磨の種は盡さず、何處にもある奴ながら、側で見えておて此位可厭なるは無し。縁も恨も無いものにして、道腰奴には折があらば誘いうてやらでは寝心の好からぬ氣に、我慢のならぬ今日の状態。彼等風情に臂を張られて、すつこんで獻敬かく女子にあらず。松の間の判官ではなけれど、飛着いて唯一撃、と躍る胸を撫りて事無く濟せしは、苦勞せし身にも似合はず、場所を辨へぬ爲方、と他の思はくも可慙しさに、了簡のならぬ所を了簡して、還りしほど恨は重なるぞ知れかし。近き内に此返報は屹度する。其時泣くなど折を待ちしが、出會ふことも無くて久しく過ぎけり。此頃聞けば餘五郎は紅梅の許へのみ足繁く、お艶も我も日陰になりて、朋るも同じ草なるに、

三人妻

さりとは枯れゆく身の意氣地無さ。此方からは望までも、男から慕うて来るほどの勢でなくては、妾といはるゝ顔の潰るゝ道理。取らるゝ男は惜からねど、之を鼻に懸けて増長する紅梅の小面が憎ければ、何がなしと思ふ様腹立たせ、喧嘩して此徒然を慰めむと、見事ならぬ筆に文認めて、餘五郎の打絶えたるを辭、媚かしく散々に怨みて、末には紅梅が見ては悪い言を多度書散し、御前様と上書して、わざと深川なる紅梅方へ持せけるに、折から餘五郎の居合さゞれば、確に預り置く由をいひて、何處よりと問ひけるを、使の男はお才が誂への通り、此方の名を裏みて、胡散臭き言を遣し、文函を置きて歸りければ、一つ口説の種が出来たと、紅梅は切に紐の封を解きて披き見るに、手跡は誰とも覺あらねど、紛ひ無き女子の文は、何處あたりの浮氣、と心面白く讀下せば、格別變りたることもなき怨言盡し。合點のゆかぬは、末におのれを譏りたる文句、様子を知れるものならぬは、書けぬ答の事まで書いたり。此よりもなほ可訝しきは、文を届くるに處もあるべきに、商賣敵の妾の方へ持するは、盗人に金銀預くるも同じく、かゝる淺薄なることは兎も爲まじきに、色でもせうといふものゝ、さりとは底の知れぬ不用心、と爰に考へつきて、此方の様子知れることを思ひ合すれば、我を弄ばむとて誰かの惡作劇か。御方來らば何事も解るべし、と舊の如く封じて預りぬ。

三人妻

次日餘五郎に始末を語りて文函を見せけるに、手をも觸れずして熟々と視めたりしが、聽て憶出したる氣色にて、忙しく巾なる文を取出し、五六行讀みて呵々と笑へり。末を見るほどなほ笑ひ、投出して又笑ひ、馬鹿めがと庭を見向きて、笑は眼中に名残を留めたり。何方からのお文やら大分麗はしい御機嫌、と紅梅は知らぬ顔して、搜を入るれば、閑なる餘りにお才めが馬鹿をするわ。讀んで見よといはれて、始めての顔して一通り讀み、何意趣ありて此様な私の悪口を。書るゝ覺はある答と流暢に掛けられて、紅梅は面羞げに俯きつゝ、文函の縷を燃りて、三度に一度はお才様へもお越ありて、お體様をも訪ねておあげなさりませ。かく絶々にしたまふは、皆私が左や右いうてお引留め申すか、何そのやうに思はれまするも愁ければ、此後は随分お二人をおお悦びがり、又私をも忘れたまはぬやう。女は心狭く愚痴なるものなれば、此文は根も無き戯れとは思へども、遂には此様な譯にもなるべし。三人姉妹と睦じうするも、また替敵の間になるも、御前お一人の爲され方ばかり。道慶言いうて、明日は知れぬ秋風の我身や。

(三) 三尺餘の長文

紅梅は此文を送り越しお才の肚を見透して、手出しせば他の坪に陥る譯なり。遠くへ退いて笑うてゐたら

ば、業を沸して陶く處を見物するも好い復讐、と餘所を風の吹く顔して取合ざりき。

お才は紅梅の返事あらむ、と待てと暮せと沙汰無ければ、案に相違して、ぬるい事ではゆかぬ女子、あれほどの言をいばれて、痒さうにもせぬ根性はいよく憎し。賣りし喧嘩は買はれず、器量を下げられたる腹癒に、是はさうだと焦心になりて、筆を走らせし三尺餘の長文、いひたいほどの雜言を書散して、先日は御手製の胡麻汁、結構なる御加減に思はず載き過ぎて、今日までも胸悪くと、無遠慮に水破抜きて又送りけるに、紅梅は恚ある筈と驚く氣色も無く、披き見て餘りの手強さには呆れぬ。有紫に響めらるゝに腹は立たず、心に覺ある事を散々に辱めたる文言の、畜生呼はりしたる處もあるに、心は焚立つばかり、身頭ひして憤りけるが、二度までも恚る事するお才は、我と刺違へて死ぬほどの覺悟なるべし。狂人の敵手になるは大人氣無し、捨て置きて構はず、苛ちて何百本の文を寄越すとも、見ずに濟さば腹も立たじ。敗けた風して後から攻むる分別あり、と其文は小皺もつけず、封のまゝに仕舞ひ置きぬ。

今度こそはと待ちけるに、幾日経ても例のごとく返事無ければ、腰拔めとお才も愛想盡して、此上は面と向うて思ふ様言ふてやるべし。書けぬ手に骨折り損と眩きて、其後文通は思ひ止りてけり。

紅梅はお麻の許へ駈着けて、悔いごとがござりますると、帯の間より彼の文を取出し、之をと涙ながらに差置けば、お麻は心得ぬ體に驚きつゝ、取り上げて讀下す二三行にまづ呆れ、然と見るほど、他事ながら腹立ちて、これまでにお才の毒言吐くは、いかなる恨ありてか、と段々様子を訊ぬれば、露ばかり然る覺は無けれど、事の起因は、最初の文の概略を語りて、嫉妬からかく怨まるゝやうに微見かせば、お麻は一々領きて、何と言はれても然る無法ものは對手にせぬが善し。此方に思ふ子細もあれば、悔しからうが勘辨して、何事も我に委せよ、と底に頼ある言を聽きて、紅梅はやうく目を拭ひ、勘辨せよとの仰無くとも、場敷を踏みたるお才様の片腕にも足らぬ意氣地無しのお才は、手出しもならで泣くばかり。おやさしき御前までも途にはお才様の上手なる口車に乗せられ、罪無き身に難付けられて、捨てらるゝまでも物は言はれぬ勝効無い私を、奥様の不便に思召されて、其の様に仰せられて下さりまするを力に、何事も辛抱いたします。このやうな不束な私なれど、行末ともにお見捨無きやう、其ばかりを頼の心細さ。何分とも宜しう願ひ上げます、と艶なる聲を曇らせて、凋るゝほどなほ美しき姿には、女の心も消えぬべし。

(四) 歌舞伎座

三人妻

近頃閑の身にお才は無事に苦しむ餘、新唄の作して三味線持て見ても、格別訝えもせず。うろ覚えの茶事を最少しと、師匠を呼びて稽古を始めしが、旨くもあらぬ水泡にも飽きたれば、挿花をと思ひ立ちて習ひけるに、氣の向かぬではなけれど、閑雅過ぎて、之ばかりにては適興にならず。錢ありて爲す事無き樂の身の今となりて見れば、質置きて旨いもの喰せし柳橋の古樂も折々は憶出さるるなり。

歌舞伎座の夜芝居、團十郎の高慢なる勤王論が呼物になりて、開場以來の大入と、かゝる事まで八重神の中へ知るゝは新聞の徳なり。團洲の藝は女子に面白からぬと、誰がりは解る顔して、次手に三好屋をも好いといはねば、可慚き事に思ふ雌雄豆腐も多し。お才はこれぞといふ最良も無く、誰の芝居もおもしろき目を久しう慰めず。長く見ねば見たくもあらぬまゝに過ぎけるが、此頃のつれづれに不圖憶出して、一日涼しき日にと思ひ立ちぬ。

髪ならねば話相手無くては興薄し。好同伴もがたと覓むるに、柳橋の朋輩には心の合うたる女あれど、此群に立交ることを夙て餘五郎に戒められたれば、誰彼と謂うより、閑なる體は我と同じきお艶を誘はばや。温順ばかりにて別に旨味は無き女なれど、心に毒を有たぬが何よりと、左も右も附合ふ氣になりて、花見の後

は一度も會はぬ無沙汰見舞にして尋ねれば、寂しく便無き身に殊の外歡びて、見物のことは快く語ひぬ。

正午の開場は二時になりて、風通しよき鞆も暑さ蒸すばかりの大入。人煙に眩暈して、弱き女は血道をおこし、何も吭に入らで幾に果物氷水に浸ぐ。土間棧敷に扇團扇の揺くこと、不忍池に風吹遍る風情あり。

此の人数の中に、見事の綺羅飾れる女は多けれど、美麗なる容顔は寡きものなり。土間の六に木桶縮の浴衣きたる唐人鬘の娘、粧らねど美し。此外にお才お艶ほどの面を見ざるに、華族方かとも想るゝ衣裳の疎、持物も應じて疎かならず、茶屋の待遇も虚のやうに恭しければ、瓦に交る玉は人目を牽きて、舞臺の役者までがそゝるにぞありける。

眞向の高士間に、黒絹の羽織、柳條敷寄屋の古單衣、鼠色なる白縮緬の兵子帯に、金色の角繫の鏢を巻着けて、銀時計の金の龍頭ばかり見せかけたる男、水牛製の双眼鏡の筒口を、始終二人の方に差向けて、執心の事なりき。身分をおもふに、書生の風ありて書生ならざる處あり。多分は下宿の奥二階を二間借りて住ふあたりの官吏と覺し。肺病をりげに華車なる美男子、手などの白く纖く軟かきこと十八九の娘のごとし。鼻下に八字の消路ありて、前齒の端に黄金を貼けたり。格別嬌めける様子は無けれど、何處やらに我は色男

三人妻

三人妻

といひたま風ありて、女子さへ見れば殺したがる了簡、恐るべき人のやうに見えたり。幕間に二人の立つを見るより、男は衝と身を起し、疾足に跡を慕ひて茶屋を見届け、聽て物案じ顔にて還りけるが、眼色も尋常ならず、心の落着かぬ輕躁に、火の着かぬ巻蓑を啣へて、人無き鴉も可憐しく待つに程なく、とろくと雪風の音凄く聞ゆる頃、二人は紺の中形の浴衣に衣更へて、見るから涼しげに打扮ち、茶屋の女房を始め五六人の男女に送られて入来りぬ。彼男は幕の開きかゝるにも關はず、また升を飛出して、假花道の口より鴉の様子を窺ひて、霎時佇むを制せられ、階子を昇りて三階の運動場に、酪酒賣る店の椅子に腰掛け、欲しくも無き葡萄酒を一盃取りて、巻紙硯箱を借り、四邊に人の在らぬを幸ひに、假名にて細く認め、引結びて手の中に藏るとほどの文にして袂に入れ、此幕は見ぬ氣にて悠々酒を飲み、後は氷ラムネ、胸の清くはずの水も痞へて、半分にして立ちぬ。場所へは還らず、柝の音を餘所に聞きて、例の如く思ある方を望み、折々は舞臺を覗きて、此幕の長さも待遠なる顔色。

彼の鴉に何尋ねに來にけるか、年輩にして篤實さうなる茶屋男の、禿げたる頭顱西日を承けて光るを見付け、途に歸來を待受けて呼止むれば、御用で、と解しかねたる様子。小陸に招きて、まづ五十錢の銀貨を握ますれば、

ば、いよく理の解らぬ顔して、受取りながら禮は言はず、男の顔と銀貨とを可訝げに見較べぬ。男は小聲にて、今其方が行きし鴉の束髪たづなの女に、人知れず此文を、伴の者にも曉られぬやうに、と袂なる用意の結び文を渡せば、老漢いよく以て合點ゆかず。あれは葛城様の、と皆まで言はせず、それを其方に聞かうか。相識なれど伴の女に知られては、都合好からぬ子細ありて、彼所へ顔は出されず、文にて呼出し、茶屋にて一寸會ひたま用あり。少しも懸念に及ばず、此の取次頼むといへば、胡散臭い文とは思ひながら、先方も承知の事ならば、骨折賃の出る仕事と、やうく祝儀の禮を述べて、唯今直にと行懸くるを呼び、必ず他に曉られぬやう、外へ呼出してから頼むと叫ばば、其邊に忽は無顔で断行くを、見えぬ處に身を忍びせて、首尾は什麼と胸穩からず伺ふに、老漢は難無くお才を呼出し、頼まれし始末を語りて彼の文を出せば、容易に請取らず。内證にて恠る物を贈らるゝ覺無ければ、早々其人に戻すべし。名も書かず、譯ありげなる可厭らしき文、と目尻に掛けてついで内に入りけり。老漢は疎忽なる事して面目を失ひ、飛んだ目に遭ひました、と文を男に打付けるやうにして、半助の貰ひ徳にして逃行く。

頼の綱は切れても、なほ未練ある女の方を眺めて、去りもやらぬ間に幕になりぬ。見物一度に立ちて、便所

三人妻

三人妻

の路の混雑は忍ぶ便、首尾を見て素戻りの文を何卒握らせむ下心の男、思ふ轉の後に立寄れば、折から茶屋の迎來りて、今客の出でむとする氣色なり。彼男今更心怯れて身を退けば、其處は風の路と隣に涼む男に除され、進むに進まれず退歩して土瓶を購介し、小言吃ひながら又進む時、最先に出づるお才と端無面を合せけるに、吃驚せし女は忽ち然あらぬ方を見向き、草履つゝかけて戸外に出でぬ。

取逃して残念なる男、氣の抜けたる顔して伸上り、つくぐ後影を見送るところを人に撞當られ、其心とも無く帯を探れば、今の奴にか大事の時計を拘られて、洋銀の鍵子半程より断れてぶらりと垂れたり。此男には無二の實草なるべきを、然しては惜さうな顔もせず、断られたる鍵子を指頭の玩弄にして、何やら思案するも女の事らう見えけり。

これほどに思へども、一向他へは通ぜぬ様子。出來さうも無き事を男は根で貢す氣か、なほ其の邊を彷徨して歸るを待てば、やがて入來るお才は男の顔を見て、先のごとく驚く氣色は無く、召使の團扇の風に背後を吹かせ、霎時涼みて、婢どもを三階へ遊びにやりたる迹は、お艶と二人ゆるりと坐りて、更紗の筒より紫檀羅宇の金煙管を取出し、紙切に火皿を拭きて外へ捨つれば、男は四邊を胸し、足の下に履着けて二三間引

三人妻

擦りゆき、拾上げて人無き處に披き見れば、明日の午前十時頃淺草なる母の隠宅へ行きて待てとの文言、未だに番地書あり。鼻紙に人目を忍ぶ禿筆の走書、神妙に書いても上手にはあらぬ手の、いと不見事なる蚯蚓様。男の身に取りては定家卿の色紙よりも尊く、喜悅腹に徹へて持つ手も自ら眠くなり。

さりとは思ひ懸けぬ吉報に、讀違へではあるまいかと、躍る心を鎮めて、一字づつ拾讀に讀みかへせど、其に相違無きに安堵して、肌の守と保存したきは山々なれど、もしもの事ありてはと引裂き、咬み丸めて窓の外へ遠く投げて、久しく空けし我場所に戻れど、餘りの嬉しさに狂言はいよく身に染みず。遂に前面の鴉を眺めて、あれほどの女が己の、と小指を握緊めて、獨り笑まるゝ顔を俯け、時計は奪られても九圓六十錢の代物、眼で鯨を喰つたる哉。

(五) 焼木杭

死なば此處の土、戀しきは故郷、淺草花川戸の町を少しく引込みたる處に、目の藥になるほどは庭木もありて、造作も念入り、小體に外見好き家を買受け、奢らす奢らす中位の樂世帯、お才が母は左團扇の夕涼、暑氣拂ひの銘酒二三杯の酔も醒めて、蒲席の手觸露に冷つき、蚊阜提灯の火の寂しうなりたるに心着きて、

三人妻

此の戸を鎖めよと婢の坐躰を喚び、奥の間の蚊帳へ入らむとして、格子戸の開く音に立戻れば、取次も待たで入来る客を、誰と賚戸の陰より覗けば、もうお寝みと聲懸けて、座敷へ通るはお才なり。いつ見ても腹は立たぬ子の顔に、珍しき客と手づから椽の涼しき處に革蒲團敷きて、今頃一人何處のお歸りと尋ねれば、お才は振返りて、支關の閑きに控ふる侍婢を呼入れ、今日は歌舞伎座へ苦みに行て半病人になりたる仕合。夏は放縱にして我家に涼むに勝る保養無しと言へば、其は私達の言うて可い事なれど、幾歳になりても飽かぬものは、芝居に米の飯と母親は笑へり。

お才は話したき事ありと母を二階へ伴れて、今日歌舞伎座にて菊住に會ひし始末を語れば、焚木杭にと年寄は苦勞さうな顔して、關り合はぬが身の爲と、先も聞かすして意見の冒頭。關り合ふではなけれど、以前に變る姿のやつくしさをを見るにつけて、涙脆き心から不便を催し、聞けば女房持ちて此頃は子もあるよし。今は身を堅くして某會社の會計の下役を勤め、昔の借金に艱苦残りて、と世帯染みたる泣言を聽され、少しばかり悪む氣になりて、明日の午前十時頃此家に訪ねて来るやうに言うたれば、來らば二階に待せて、内の婢の前をも可然に取繕ひたまへ。我も侍婢に氣取られぬやうにすべし。此事人に知られては面白からずと頼

めば、母は容易に得心せず。不便と申うて金錢を悪むも、私から謂へば要らぬ情なれど、それほど思ふものを強ひては止めず。但會はでも濟むべき事を、と半分聽きてお才は怫然としたる顔色。不承知ならば此家は假るまじ。會はむとおもはく會ふ處は許多も外にありといはれて、氣の弱き母はお才の機嫌を損せしと、夏からぬ事とは思ひながら、どうありても會はむとならば、外へ行くには及ばず、此二階を貸すの借りのことで、其方の家も同前なれば、遠慮も何もある事ならねど、もし會うたらば舊時の馴染だけに、縁が戻りてひよんな事などありては、主ある身の御前様へ義理が濟むまじ。愚ならぬ其方なれば、そのやうなる了簡はあるまじけれど、賢きものも格別の此道と、大方お才の心を識りても、強く言れぬ佛性に、頼むやうにして言へど聞入無く、あれほどの譯ありて切れたる男に、未練ある女にもあらねば、其心遣には及ばぬ事。又とは言はず一度切、此後は外にて會ふとも言交すまじき了簡なれば、と立派なる口上はいへど、知れた嘘と母親は獨り氣を揉みて、一度では濟まぬ腐縁の接續なるべしと思へど、可厭な顔せば慍らるゝが怖さに、快く待つて居ると言ふも切無し。

山島のおろの鏡や、のつペリと生れたるより當事も無き不了簡を起して、女で食ふ氣の男、古今其跡を絶たず。

三人妻

三人妻

眉毛を剃りつけて黄な聲する息子、一町内に二人宛は必ず居るものなり。近所の娘どもに騒がるゝが嬉と、職人なれば職を疎かにし、商人なれば算盤を餘所にし、書生は學問を名のみ、飯食ふ道は忘れて、扮す事を専とし、親父が亡後は何とする分別ぞや。世間の淫行後家を目的に、男妾にて身を立てむとの心得、不届の極度といふべし。妾を賣る心は女も可慚しさに、男と生れながら然りと情無き根性。生け置きて効無き穀潰しの遊民ども、慈悲に命は赦して北海道へ移住させ、せめては國益の一端にして取らせむ、と力みかへる男の顔を見れば、理せめて可笑かりき。

三年立てば子供も三歳になるに、色男の隊長菊住専三行年三十にして志未だ立たず、旨いもの食うて、美衣被て、美しき女に仕送られて、緋鹿子の腰衣帯して暮したいが一生の願。世界萬國に白装の濡事師は無きことを識らず、一週間に一度宛理髪して、髭鬚は隔三日に剃ることを忘れず。扮すが故に二十五六の優姿を、張儀が妻に見よといひける舌ほさに待みて、眼中男無く願撫のぐい澄し、器量自慢が因となりて、才藏に切れてから小唄を物せる最中、吾妻といふ待合の主婦を引懸け、下谷にはお茶羅といふ娯遊者を購めて、二ヶ所の浮氣三軒の騙持、近頃色に忙しき軀と喜びしに、小唄は此事を嗅付け、男早はせぬもの

三人妻

を、踏みつけられては寝て居る犬も起きて噬むに、憚りながら柳橋の藝者様、と臂にして寄せつけぬ間に、客色が出来て菊住は他人にされぬ。お茶羅の方もいつか不維になりて、今も熱の冷めぬは吾妻の女房のみ、是一人にては食ひ足らず、其處等に出没して餌を漁れど、此の地には賣れたる人咲鬼、異名を戻橋とつけられて、誰も關るものはあらずなりけり。

暴し盡して此土地を思切り、吾妻だけを大事に守りて、數寄屋町に巢を變へ二三人對手にしても思はじからぬより、方針を轉じて素人の後家介を始め、感すには藝者より易けれど、錢廻思ふに任せず、脂の減る割に財布の肥えざるを可關く、左右は其道の女と思へど、昔に異りて今は兵糧の續かざるに是非無く、偷盜するやうな色事に氣が塞りて、華美なることは彼に限る柳橋の待合遊。浮名も世間嗽れて面白きを憶ふにつけて、藝といひ、容色といひ、腕といひ、心意氣といひ、耐らぬほど好かりし柳やの才藏こそ、いまに忘れぬ女を、その折は如何なる氣粉から、牛を豚に乗換へて小唄如きに關りしやら、我身で我身が分らぬ不了簡を悔みても、今は及ばぬ高嶺の花、葛城餘五郎の壁妾と崇められ、東京の名所に風流なる構して、此上の願無き榮華の身の上、那が舊時は泣かすも笑はすも、我心の儘なりし女と思ふほど、玉を見損じて石にて汚

三人妻

りし不念さ。そののみ心に繋りて、一生に那時ほどの果報は、亦と無い事に諦めても、諦められぬ愚痴から、遺物に残る圓鬘姿の寫眞を取出し、折々の自適にして、遠かるほど未練は勝るなりけり。

料らざる歌舞伎座の再會は、菊住の艶福未だ艾さざるなり。女といふもの脆さは、三味線の胴の割るゝほど撲ちし面も、有繋に憎からぬ舊時の馴染。此文は母の口直しに爲てくれる志か、忝なさと嬉しさに一夜の明くるを待たび、五時半の朝湯に念入れて磨き、母親へ愛相の手土産掬けて、約束の刻限前に花川戸の隱宅を訪れぬ。此虫につかれては、始終は陸な事ではあるまいと、母の内心は顔見るも面白からぬと、杖と侍の大事の娘の言ふことなれば、餘所々々しき待遇もなり難く、不取敢二階に通して、進まぬながら客普通に遇しけり。されども今日の始末、他に知られては事難し。婢には慰み鼻薬くれるよりも、邪覺拂ひに一日の暇遣る昨夜からの約束なれば、用は勿々にして出せし後、菊住の履物の日傘帽子まで藏して、客無き體に装へたるは、お才の侍婢を憚りてなり。奔走の使、勝手の用向には、裏障に賃仕事する女房を頼み、自身は菊住の對手に出で、二つ三つ雑談する間に時刻となれば、お才はいつもの仲といふ婢を伴れて來りぬ。直に二階へは案内せず、下座敷に茶煙草盆を持出し、此處で緩々と談すやうなる様子に見せて、夕景ならで

三人妻

は歸らぬを、何處で待つも同じなれば、吾妻座でも見物して、好頃に戻れ、と若干か紙に拵りて與ふれば、切りに辭退するを呵るやうにして、母の言を添へて取せければ、雖有く載きて得々出て行くを見澄し、お才は小聲に、來たか何と問へば、母は頷きて、先之から二階にと快くは答へながら、お才の顔を心あり氣に見遣りて、何ぞ間違の無いやうに、と詞短く急所を衝けば、大丈夫さと安請合して行きかくるを、又何か言はむとすれば、可厭な顔されて辭塞り、言はぬも可笑く、氣を著けなよといへば、此家の櫛子は急過ぎてと笑ひながら昇りぬ。何するやら知れぬ二階の對座。要らぬ世話焼くとて、又盪らるゝは知れたれと、拾てて措れぬ大事の場所なれば、應待に出る風して張番するならば、ひよんな間違もあるまいと、と階子の口まで行きて、否々此家で間違は無くとも、逢はむとおもへば外に幾多も逢ふ處はあると、お才の言ひしは誠にもあらで、首尾する宿は何處にもあるものを、邪靈入れて盪らるゝ分は構はねど、其効無くば盪られ損なり。左右は劇場で會うたが毒なれど、復らぬ事は是非無し。母子の仕合も轉寢の夢の間、お才の身の破滅も近けり。其とは知れど、思ひこみては是が非でも、徹さねば肯かぬ氣性に異見も無益な。さればとて目に見えたる不爲を心着けぬも愁し、と母親は獨り物思の大息吐き、此上の願は、陸でなしの男め、早く歸れど、用

三人妻

意したる酒も出さぬ先から、奥の間の隅に締立てたる心中の哀れなるに引易へて、二階には私語の忍音聲無きまで閑に、唾壺打つ音のみぞ折々聞えける。

菊住の服装劇場にて見しに異ること無く、此外には持たぬ一張羅と覺し。有るものなれば衣更へて來べき今日なるに、然りとば哀にも落ちたる身の果を、己も憚る氣色見えて、我持物にせし折の才藏とは、今姿から吐きで改まりて、おのづから神々しく威を備へたるに香れ、斑竹骨の扇子を捻くりて、着端無きの他人がまじき挨拶振。お才は心に可笑しく、茸々と髭髯無き男は、度胸も無いやうに想はれて、打解くる藥は酒と、支度を急がせ、積る話ばゆるく。先一口と猪口を差せば、お酌では恐多い。はて繼子根性など笑うて、獻酬漸く繁く、少く酔が廻れば遠慮の隔もとれて、お才は母の浴衣に衣更へ、専三は双肌脱ぎて麻襦袢に涼みながら、相互に別れてがらの物語になりけり。

近頃は誰を情婦。いつまで柳橋でもあるまい、最早河岸を變へても好い頃、何邊を暴じてか、受賃無しで辛抱せうと言れて、専三は故と眞顔になり、氣も無い事。一二歳も年取ればおのづから分別も出で質なる了簡起りて、染色の流行も知らず、米の相場に兩を氣遣ひ、箱奴に投げてやるほどの紙幣があれば、薪の幾把買

三人妻

へるといふ勘定立つる心になりて、あれから二月目に小めに断れられ、其後は會社の勤務、漸給も腕だけと諦め、見じめにも神妙に暮して、茶屋の酒飲んだら、三度の愉快は覺束無き金額に、一月を送るも切なけれど、人を怨むべきにもあらず、是皆誰やらの罰と養れかへれば、お才は打笑みて、罪を作りし報の可恐しさ、色男の末は皆然したものに極れり。女の執念は蛇よりも深ければ、忘れても色事は慎みたまへ。此のお才の怨念ばかりにても、好き往生はむづかしき睡なり、と思ありげに男の顔を視れば、目に入る小鬚の創。其はと訊ねれば、之も罰なれど三味線の胴にて撲れ、男の面を割られながら、手出しのならぬも此方の過失と啣つ。お才は膝を擦寄せ、創の痕を篤と視て、彼時にかと驚けば、外に此様にされて唯舍くほど惚れた女も無ければ、殿ちし覺えのある人が殿ちしなるべし。此創こそ菊住が一代の色事の遺物。此の舊時に今一度なりて見たらば、また隻眼潰されても更に惜からず、と思ひ遁りたる縁言、お才の耳には哀も一入に聞ゆめり。

弗つり色事は止めたと言ひながら、以前に變らぬ口頭の好き。其調子では發心といふも嘘にて、法衣着たる狼のまだく油断はならず、と男の口端を彈きて座に還れば、菊住はいよく眞面目になりて、言ひたくば

如何にも言ふべし。思うたどて主ある女を何とすべき。其に換ふべき女も無ければ、色戀も可厭になりて、何時までも若くてあらぬ行末を考へ、稼ぐといふことに目の覚めたる男が、彼折の不實は幾重にも勘辨して、此後は便無き此身を兄弟同様にといひたけれど、襟に着くやうに想はるゝも可憐し。單の知己にして、未長く附合ひ給へ、と言ふもどうやら押付がましく、此様な無能漢は知人に持つも恥辱とあらば、何事も二年前の夢、と涙を零さぬばかりに播口説くを、お才は打消して、二歳ばかり年取りて、それでは愚痴になり過ぎる。そのやうな了簡なら、際疾い首尾して會ひはせぬ。昨日劇場で見た時から影の薄いほど衰へたる姿と思ひしに、心から見すばらしい、今の若さにどうする氣ぞ。大道の易者が着るやうな、そんな羽織は盛籠にでもして、しやんとした風體を爲たが可い、と帶の間より五十圓男の前へ投出せば、えと驚く顔を横目に見て、最一度舊時の菊住になる氣は無いかえ。

男は風に捲る紙幣の鎮に煙管を置きて、こんなにかいてはと、わざと憐らしく頭を下げ、恩を以て替を復さるゝ心苦さ。なかく此様にさるゝ義理にはあらぬと、折角の厚意なれば難有く納めます、と紙幣を取上げて戴けば、えと見ともない、那樣眞似は止にしやんせ。女なぞに物貰うたら、嬉しい顔はせぬ方が、男

らしうて見好いもの。さあ〜酒々、酔うて言ひたい事が多度ある。今の返事も聞きたいと言へば、久しぶりなる旨い事の板挿みに、菊住はわくつく胸を推鎮めて、今は籠の煙に煤び、堅氣一團の男を弄ぶとは酷い殺生。よし無き嬉しがらせも眞に受けて、承知したら何とする。酒の肴には酷い座興、と口頭を思へば、もつと剛い答の女が、今日に限りて、然りとば娘過ぎた解けやうも可疑しきに、恚う先言つて見たものなり。

お才は可笑がりて、そんな文句は小本仕入の素人殺し。彼此有仰る事ならば、強つて御迷惑を願ふは御氣毒様見たやうなれば、いつそお頼み申しますまいかと、手強く出られて、否々どう仕りの、實は此方より願ふところなれど、以前に變る其方の身の上、大事の主があるものを、悪い事しては義理が濟まず。第二には知れ易き事の旦那の耳に入らば、其方の身に關る事と、爲を思へば言うたのを、悪く聞かれては迷惑と、お才が會うて以來の殊勝さ。その御意見は阿母から懊惱いほど聞かれて、又改めて承はるにも及ばず。旦那に濟まぬ事も、露はれたらば御被箱になる事も、何も彼も知らぬではなけれど、其曉には其様に、いかにとも成るべき考慮もあれば、聞いた風な事は言はぬが可い。唯々委細畏まりて、何事も御意には背くまじき菊住、煮るなりとも炙くなりとも、宜しきやうにと、お才の方を見遣れば、少しく笑を含みて閑に煙草燻らし、片

三人妻

言も無い處に情ありて、さうも耐らぬ美しさに、専三の目は自から縋うなりぬ。

樓下には母親の氣を揉むこと大方ならず、二時間餘の長話、と七八度も柱時計へ駈着けて、好加減にして措かぬか、金子遣るだけならば五分ぐらゐで済むべきに、酒を出したが第一氣懸りな、いつまで捨て措くとも際限無ければ、自宅から使が来たと言つて、お才の方を歸すが上分別。居て損のゆかぬ菊住が、夜になるとも立つことではあるまじ。さりとて其手ではお才が歸るまじ。最一度慥られる覺悟にて、下へ呼んで言つてやろ、言ふは善けれと背く子にもあらざれば、其も無駄か、と親の心は闇にあらねど、途方に暮れて、立ちつ坐りつ、みしくと椽踏鳴らして二階を驚かし、或は梯子を昇りゆく音を立つれば、何ぞ用かと聲を懸けられ、こそくと過歸りても心は休まらず。辛氣臭さに燗冷を飲めば、三杯で酔くなり、又更に切無き思つて、やうやく醒むる頃に梯子を下りくる足音は、まだ男の歸るにはあらで、午飯いひつけにお才が下りて来て、風呂を焚いてくれとは、やれもく。

蕃椒々々の聲絶えて、町は片陸になる頃、菊住は名残惜げなる顔して、裏口より歸行く。迹は大方阿母の御意見、聞されては此暑熱にいと頭痛、とお才は直に簡枕引寄せて、午睡して丁ひけり。是ではどうもなら

ず、母は獨り行末を案じて、覺めたらば一言と念ひけるに、夕暮の歸去を急ぐに紛らされて、何の事は無しに宜しぬ。

一匹の男としては齒應の無き菊住が、末の望のあるにあらず、衣類は箆笥に、食物は戸棚にある中のみの對手なれば、鑑札受けぬ俳優買うも同じく、一時の慰みにする氣にも忘れぬ可愛き處ありて、其の後は主ある身の人目を忍び、大川端なる挿花の師匠の奥座敷に逢引して、此樂供につれらるゝお仲も知らず。一六は弟子の來る日と避けて、月に四回の出會。御前は紅梅方へなりとも、お艶の許へなりとも御出次第、此方へは可成遠々しきを奇貨にして、挿花は定めて上手になるべき執心、腕ばかりで月身は利かぬ大谷先生、左様なる義の有るべしとは、なか／＼存寄らざるなりき。

昔愚なる智者ありて、二臼の米を一つの杵にて一度に舂かむことを考へ、上に置かばはならぬ一つの臼は、倒に梁より釣下げむとして、米を入れる工夫に盡き、折角の仕掛も空になりぬ。思ふ女を自由にして、樂みながら金を獲むことの難き、正に此發明に同じきに、菊住の仕合は、人の眞似はなるまじきことなり。昨日に變る紳士の打扮、女にして貰うたと思へば身錢で衣たるよりは十倍の天狗、色男には誰がなる。疾風の

三人妻

三人妻

とどく過行く馬車の中は、威風凛々、相貌室々、内閣には我一人が某の大臣、彼奴才蔵を悪口説して、面撲られし意氣地無し。それも此専様がある故、と恠る身上も羨まれず、但我に於いて男子の能事畢ぬる心意氣。お才を扱うては外に手に取るべき女子も無く、今は見るも可厭なる吾妻の噂の方は断縁にして、今度断れては二度目の覆水盆に復るまじきお才様の大切さに、一切餘所の浮氣を断ちて、口こそ出さぬ、心には大事のく、旦那様と崇め、自から其様なる待遇もして、ひたぶるに御奉公を勵めば、お才も憎からず、身の毒とは知りつゝ、夜半の茶漬の罷められぬ哉。

(六) 一段半の艶種 (上)

白鬚なる妾宅の隠目附、實は北辰一刀流の達人、大谷傳内、金五兩の扶持の手前、役目に懈怠ありては不相濟譯、と油断無くお才の坐臥行住に眼を配るといへども、更に怪むべき隙は見えず、空しく夜番の老漢にて過ぎぬ。夜は晩く寝ても、朝は眞先に目覺め、起きた處が用は無けれど、用が無くても耽々と臥て居られぬ性分は、昔把りたる竹刀柄、やつとう鍛への習慣、血氣の壯なること今の二才が及ぶ所にあらず。東の空の白むを合圖に勃と起きて、坐敷の戸を開け、掃除仕舞へば、折から鈴の音勇ましく新聞の來るを例とす、

三人妻

の香高く印刷の濕氣しつとりとしたるを、封切に見るを午前の娛樂にして、午後の樂は晩の一合にあり。待構へたる小説、徳川の其頃は如何様かうであつたものと、兩刀帯したる挿繪から見始めて、今日の滿潮、昨日の寒暖計まで、一字遺さず丹念に讀む日は逸さぬ三頁に、一段半の艶種、標題は歸咲隅田櫻、人の名は臆に震めたれど、知る人には歴々と綴りたる妾の色事は、奥に寝てござるお才様の噂。思ひも寄らぬ記事に直と呆れ、これはと驚かれて、もしや似たる餘所の人の身の上か、と繰返して見るほど動きの取れぬ筆の跡、耐らず汗の出る處あるに、律義の老漢烈火の如く腹立て、賣女に貞女無し、御前が傳内を附置ると用意も今ぞ知られたる。猫とはいへど四足にもあらず、恩といふことは知るべき人の心を持ちながら、さりとは謂はうやう無き不所存者。武士にていへば敵に通じて主君を賣る奴、倒産にしてもなほ隙らぬ人非人、免さぬと鼻息暴かに拳を握りて、一刻も捨置き難し、直に注進と心は躁れど、今から飛出されぬは、人非人でも主に持てば、許可なくして我儘に成難し。暇もらうて出ぬ事はあるまじけれど、かゝる早朝に何のやうな用事と問れて、親類といふものなければ、親き友も持たぬ事は能く知る彼に拙き嘔吐まで、胡乱におもはれむは拙し。今朝にも限らぬことなれば午後にして、まづ此の新聞は彼に見せぬが肝要と、

三人妻

小く折りて紙入に捻込み、此處置は什麼御前の付けらるゝ事か、我ならば其分には置かじ、唯一刀に首打落し、生首契けて男の家へ歸込み、此奴も眞兩断にして、三十年前の了簡勃々と起りて、今明治の法律は變りたれど、奸夫姦婦を討つに何の子細かあるべき。私に成敗せし罪は免れ難まかは知らざれど、討果すべき情實ありて手に懸けしを、咎むる法はあらざるべし。さるをも罪科は命に及ぶとあらば、何吝むに足らぬ。皺腹一つ、裁判所の門を早桶で出るまでなり、と末の末まで考ふるほど、胸は爛よ沸ゆる如く、壁に倚懸けたる鐵鑢の大刀を睨みて、切味は覺えある土佐の爲道薩摩の三一を打斫つた水道橋の闇の喧嘩も憶出されて、生けては掛れぬ奴等。

聽て婢も起出で、それより一時も過ぎてお仲の聲も聞えぬ。主婦の枕頭へ煙草火と新聞持行くが例なれば、寢亂髪も梳かず、頸筋に白粉の斑々なるまゝ大谷の居間に新聞取りに来るを、今日は如何にせしか未だ來らずと答ふれば、格別疑ひもせずして出行さぬ。

二人の婢輩は傳内の浮かぬ顔して、多く物言はず、食も毎のやうには無くて、今朝の人並を訝り、氣分を問はれて、こは口惜し、色に出でゝは覺らるゝ因、と輕き事に紛らし、廣小路まで買物のつもりにて暇貰ひ、車を飛して餘五郎を商社に訪ねれば、久しく我の打絶えたるを、呼寄せむとて事ありげに此老漢を遣せしか、と高を括りて何川ぞと問へば、傳内懐中を探りながら、容易ならざる儀の出體致し、至急密々に申上げた、と彼新聞を差出し、眞偽は確實ならざれども、お才様の醜行恁の通りと指せし記事を、餘五郎篤と見訖りて、幾度か頭を傾け、かくあるべしと想はるゝ舉止も見ゆるか。一向さる御様子は無けれど、挿花の御稽古とて、近頃仲を件れて折々出らるゝことあり。其外には文一通參らねば、私も油断いたしたるが不調法。いかにも御指圖次第心を碎きて探索仕つるべしと恐入れば、左も右も挿花の稽古とやらの行先を調べ見よ。此方も手を廻すべし、と落着きたる面色常に變ること無し。よくよく思ふ女なればこそ、高金出して圖ひ置くものを、人に奪れて吝くも口惜くもないといふ理窟は無さうなるものを、嫉しと過ぎて手鈍い穿鑿、平素の短氣に似合はぬこと、餘五郎が怫然ともしてくれぬに拍子抜け、他の脇効無さを我心に憤れて、淫婦なほ憎く、いかに遊ばさるゝ御思召と青脈出せば、餘五郎莞爾として、其方ならば何とする、と聞くより傳内可憐しき眼色になりて、唯一刀と言ひかけ、過言を心着きて、御恩を知らぬと申すものでござりますると濁せども、氣の毒なる顔して控へけるが、問入りては都合よろしからねば、御用無くば御暇と立上る。早速

三人妻

の注進大儀なり。此後とも随分油断無く。委細畏りて、歸途は大川端へ廻り、かねてお仲より住所氏名を聞きたる挿花の師匠の門を通り、近所のものに様子を尋ねむとも思ひしが、時刻の移るを氣遣ひ、今日は此儘にと白鬚に還る。

(七) 一段半の艶種 (下)

萬般に如在なきお才も、浮名の新聞紙に唱はれしことは知らねば、露顯の端緒となりたる事はなほ思も懸けずして、今日は挿花にと、午後よりいつもの婢を連れて、大川端へ出懸けたれば、傳内は浴にとて、奥婢のお横に留守を囑みて、直にお才の跡を追ひぬ。

挿花の師匠の門に来て見れば、主従の人力車二臺門外に待つこそ、必定不義もの此内にと、覗むことは、覗みたれど、無用の輩入る可らざる他人の門へ踏込みかねて、傳内も之には當惑せり。裏口へなりとも廻らば、證據を見届けむ手廻もあらむかと、此土地不案内ながら、唯有横町を入りて裏町に出で、此處等と想ふ邊の露地に入ること三個所にして、一向分らず。老舗らしき酒家のあるに心着きて、袖岡といふ挿花の師匠の裏口を尋ねれば、店前に水撒く御用の格別丁寧に教へけるは傳内の所、思に違はず、袖岡は此酒家の

花客なり。

傳内大いに喜びて、教へられし露地を入れれば、衝當りに板塀高く、何の樹やら木末五寸ばかり見えて、木戸に袖岡裏口と表札打ちたれば、此處だわえと驚歩に忍び寄りて、内を覗くべき木眼もがなと探せば、處々に筋はあれども、孔は無き極上檜の厚板、之には幾と當惑して、爲様事無しに片耳塀に附けて、話聲の砕片も泄る事もや、と息を過めて聽けば、内にはじやきりくと花鉢の音のみして、人の聲はせざりけり。

目的が違うて、かういふ筈ではなかつたにと、氣の脱けたる顔して四邊を胸し、邪魔物の高塀を面憎さうに眺めて、花鉢の音はしても内の様子が見えねば、何爲ておるも知れ難し。然れば輕々しくしやきりくも信すべからず。よし今は實に挿花の稽古にしても、これから後が何とも知れざれば、最少し氣を長う待たむと、始終塀を離れずして、立つこと良一時間に迷れども、格別變りたる様子は無く、更に人の聲は聞はずして、唾壺撃く音と、折々えへんといふは、聞馴れたるお才の咳拂ひなり。扱こそお在なさるわえ、と傳内は一念に耳を欬て、今や證據の上る事と、夏の日影に背中をあぶら汗、顔より流るるを拭きく張番する

三人妻

後に、偷むが如く露地を入來る紳士は、お才の情夫菊住専三、木にも茅にも心を置くは、落武者に駈落者、
 盗人、胤、病、忍、夫、人目を憚れば裏より通ふ身の上、袖間の家を覗ふ男を見るより、愕然として何
 者と見分けむ分別も無く、見尤められては一大事、と窄めし傘を卒に推開き、後姿を藏して露地を駈出
 でけるを、傳内は家の内に氣を奪はれて更に識らざりけり。
 頓て年寄れる女の聲の近く聞ゆると思ふ間に、庭下駄の音して、木月の錠を外す響に吃驚、身を退く爾時、
 月の内より剪髪の老女顔を出して、何の御川と尋ぬるに、傳内うんと辭塞りて、此裏に銀行へ出らるゝ山田
 といふ家はござりませぬかと問へば、其様な家はござりませぬと、けんもほろゝの挨拶。それで引込むかと
 想へば、動かざること釘付の如し。傳内も野面に居たゝまらず、然様でござりましたかと、逃ぐるが如く露
 地を出際に、もう居まいと振還れば、剪髪の首は木月に生へたり。此期に及びて手を空く還るべきか、是か
 らが大事の處と、少湯經ちて又忍び行かむと、水小屋に腰懸けて時刻を量りぬ。
 響に菊住は内を覗ふ男あるに驚き、引返して袖間の正門に廻り、支關より立派に案内を乞ひ、主婦を呼出し
 て裏の様子を知らせ、彼男を逐拂ひし跡より入らむと叫べば、主婦は傳内を旦那殿からの間諜とは氣も着

三人妻

かず、今夜を規ふ竊盜の類にやあらむと、扱は裏木戸開けて誰何せしなり。風體は竊盜などのやうにも
 見えざれば、いと氣味悪く、此事をお才に告ぐれば、少しも氣に留めぬ顔色。彼奴の又入り來らむかと、
 主婦は木戸を細目に開けて露地を覗へば、果して人影は、來たかと熱視れば、盗人なれど、戀にまぐ住。
 月には内より錠掛けて、お二方とも御二階へと、主婦は獨り此座敷に番して、鴨越を固むるとは、更に
 知らざる大谷傳内、もう好時分と、氷の塊を頬張りながら、濡手拭を頭顛に戴せ、そろりゝと忍び寄れ
 ば、塀に物の觸るゝ音を、主婦は來たとは心着かず、犬かと聞捨にせしに、犬にはあらぬ人の聲、音と聽定
 め、又うせたかと腹立しさに、手水盤の水を柄杓に掬ひ、塀の外を目懸けて十杯ほど立續けに浴せければ、
 傳内も之には避易して、蟻牛のごとく塀に取附き、頭の上越す水を眺め、頸を縮めて居たりしが、裾袂
 の纒に濡れたるのみ、やれ難有やと塀を離るゝ拍子悪く、最後に不意の一杯、然しつたりと身を閉く隙もあ
 らせず、横面にさふりと沃きて、頸より胸に流れ、胸より落つる水は、懐に溜りて川を成せば、赫と怒を
 作して、あはや木戸叩きで捻込まむとしたりしに、内には更に手桶の水を取寄せ、銅柄杓は面倒なりと、
 片手桶に汲替へく、火事や夕立と撒く水は、先刻よりは功者になりて、塀に取着きても道るゝ處無く、眞

三人妻

向より二杯浴せられて、傳内鼻端よりほたくと果を滴し、五七間も迷延び、恚まで根強く悪戯するは、内の者め我が様子を覺りたるに極れり。長居せば不覺を取らむ、と遺恨の胸を摩り、水だらけの顔を撫で、露地を出るより早く俥に乗りて白鬚に戻れば、時間の長さといひ、濡れたる容體といひ、一々衆婢の詰問を受けて、ちと窮りしが左右言脱け、部屋に入りて、此後の手段は何としたものであらう、と拱く胸の解けぬ間に、車轡々々、お歸り！

(八) 安請合

餘五郎は我手にて別に探偵せむ、と媒妁分の山瀬を招き、彼新聞を見せて、此不始末實況ならば捨置き難し。此新聞社に知人あらば、事實を確めたきものなるが、什麼とあれば、山瀬は朱點打ちたる雜報を一讀して、如何様く、此文面は白鬚のに相違無く、對手は菊住に紛れなし。白鬚のは普通の藝者と心性同じからず、勤せし頃より浮きたる事はあらざりし女なれど、菊住の中は心から譯ありて切れしにあらず、謂はば此方が苦肉の計に陥れしなれば、いつか此内證を相互に識りて、焼木杭に火の付きたるか。是非無き事に及びたりといへば、餘五郎不興なる顔して、設ひ計を以つて陥れしとも、我妾になりたるからは、守るべ

き男は我一人ならずや。我は外面だけに、内實は菊住と樂め、と其様な粹立せし覺なし。昔より女には好れぬ葛城が、お才に惚れよと無理なる注文はせされども、妾にしたるからは我妻も同然なるに、名も無き奴に、心を運びて、我を踏付けたるが了簡しがたし。彼の女一人呑むに足らざれば、此廉立てたる後は、欲しき犬に投げて遣らう、と暴かなる辭氣に、山瀬も返さむやう無く、一々御尤なれども、暴立てなば御顔にも關する事なれば、不肖に委せて、隠便に濟ませたまへと宥むれば、餘五郎阿々と笑ひ、此等の事に腹立つ餘五郎にもあらず、随分機便に濟ますべし。左も右も實否を衝留むるが肝要なれば、新聞社へ手を廻して、確なる處を探らせたまへ。何といても媒妁なれば、迷惑ながら頼むとありければ、私媒妁とは申すもの、婿君の御鑒識にて、切て彼をどの御意なればと言出せば、もう言ふなく、媒妁に過失は無いとて、其話は罷みけり。

山瀬は再び新聞を取上げ、此社の記者には通傳あれば、少許握らすれば、雜報外の詳報をも齎すべし。小新聞の記者といふもの羽二重破戸の一種にして、文字を讀得る無賴漢なり。二三十圓の給金は人力車と花牌との代にも足らねど、小人錢無くして不善を爲すの輩、陰事を計き、脅迫を働き、芝居に出入りて三階

三人妻

三人妻

座主に諷ひ、茶屋、待合、女郎屋、藝者屋に往來して、弱き家業を救ふなど、彼等が内職の本職なれば、麝香臭き紙の典と大判なるを一枚も見せたらば、善き事は知らず、悪事といふ悪事は、草を分け、土を掘りても捉へ來らざる事はあるまじ。頼めば中には妾の世話する男もあるよしと語りけり。

牛込の奥のさる差配は、陸軍士官と新聞記者とに限りて、五圓の店を十圓にても貸さず。此譯を問へども語らずして、性來好かぬゆゑとのみ謂へり。之を餘所の大屋に尋ねしに、軍人は夜中二階より屋根へ溺する由。さる國家の干城あるをおもへば、山瀬がいひし如き新聞記者もあらむかし。

山瀬は配下の伴頭を使ひて、彼新聞社の雜報主筆なる某に、賄ひ、歸、咲、陶、田、櫻の虚實を糺せしに、御菓千料の多分なる効驗は、餘聞までも悉う探りて聞かせぬ。山瀬は此儘を注進するに忍びず、即刻白鬚へ車を飛してお才を訪ねければ、思ひ懸けぬお方の御入來、と奥の客間に請じ、今日はいづれへ御成の御道筋といへば、山瀬は勿體臭く、内々御話し申度事ありて、態々参りたるが、此座敷にては不都合なれば、二階へとの註文。お才は其事とは思ひ着かねども、内談といふに何とやら心穩からず、ちと合點のゆかぬ顔するをもう口説くことではないと舊時を言出せば、お才も一度そんな覺のある男の、改まりたる用ありげに、ま

つい生真面目が邊に可笑うなりて、そのやうに愛相盡さずとも、最一度お試しなさいまし、と連立ちて二階に昇れば、東の軒に萩簾を卷きて、見ゆる限りは青田漢々として睡も覺むべき心地。南窓には梧桐柳、櫻の綠涼しく、風は自在に吹きぬきの團扇入らずの夏座敷、蟬の聲の喧しきと、日中にも蚊の鳴くが可厭にしても、洒落に住みては見たまはなり。

主客座に着きて茶の出づる頃、お風呂が沸きましたれば、さつと一杯といふにまかせ、御前の浴衣を拜借して湯殿へ行けば、お才が湯好とありて、總御影石の格別なる結構。お仲といふ、娘の薄化粧して、新しき紺縮の中形の浴衣着たるが流しに出で、髪洗ふとて玉子持來るまで、行届ざる處もなし。浴衣のまゝ少焉二階に涼む間に盃盤出で、まづお一盃。あなたがお酌では痛入る。痛入らぬお方を呼びに遣はしませうか、とほや話説の和さかれば、真面目の説法今の内と、山瀬は時ならぬに、時にと口を切りて、近頃の浮氣筋御前の耳に入りて、と半ば聞くよりお才は有繋に心躍りぬ。

此密會のいつかは露はるゝ時もあるべしと、其時の了簡も大方は附けて、度胸を据ゑて懸りしものゝ、未だ人は知らじと頼みたる陰事を計かれて、半は惑ひ、半は愧ぢ、合はせかねたる面のおのづから背きて言

三人妻

三人妻

無ければ、山瀬は膝を進めて、袖岡にて逢ふ事、對手は舊時の菊住なる事、歌舞伎座が再會の始の事より、おのれと菊住との外には、神も知る筈は、無き細き事まで一々陳述するに、お才は唯呆れて、何處より憊る種は上りしか、とゞろろ可憐さに身毛も彌立ちぬ。

勤の身の舊時なれば、祝儀を貰ひ、御酒を戴き、初の客の座敷にて怪しからず詔けても、人にも心にも咎らるゝ事はあらざる習なれど、今は主ある身の淫行を、道ならぬ事と識れる心には、山瀬の文句ひしくと衝りて、聞ゆる耳ぞ愁かりける。種は十分に上げられて、道るゝ所無く、菊住との舊時の情實を知れる山瀬に、家暮らしく今更何をか憂むべき、とお才は其通りを深く白状してのけたり。

山瀬は猪口を手にして、飲みもせず、措きもせず、類に耳を傾けて逐一聴出し、口て其までに打明けらるゝ此方に冗を言はいはず。唯一言承はりたきは、まこと菊住と切れて、以後を神妙にせららるゝ氣か。但しは手鍋提げても、添添びぢ了簡か。御返事次第いづれにても、御身の爲必らず悪くは計らふまじければ、遠慮無く思ふまゝを告げれば、お才は少しく口籠りて、あのやうな譯になりながら、辯ふはどうかやら異なものなれど、亭主に持ちて始終の覺束なきは、目に見えたる菊住を、何として御前に見換ふべき。今度の不始末は若

三人妻

氣のと謂はむも可恥し、一時の出来心と謂はむも面無し。重々私の過失のみ、外にいふべき機も無ければ、御前のお腹立はさらく無理ならず。かゝる不埒の女なれど、心を憐れめなば一度は釋してやるとの思召ならば、未永く御前のお側を離るまじき身の願、と前非を悔いて執成を頼めば、山瀬も憊ては忠告の効あるを喜び、其の心意氣ならば、御前へは私より好きに申上ぐべし。若又今日の言を反古にしたまはば、佛の顔は三度、人は二度目を用捨はあらじと吃と言へば、この上御心配を懸くることにはあらず、ふつゝり思ひまじりましたと、然りとば安請合の断れ方に、山瀬は得心しかねて念を推せば、お才は打笑ひ、此前も那ほどの間なりし菊住と、甘々手を断らせし怖い軍師の山瀬様、今度も断られいなか、と舊恨を異に言れて、山瀬は苦笑。それまでにして我物にしたる御前の執心を思ひたまへ。彼時の計略は御前の爲、今日の忠告は貴方の爲、主といふ字に二つは御坐らぬ。實にも山瀬はお家の忠臣、と仇口交りに歸支度すれば、まだ時刻も早きに、御意見の爲立てはどうかやら心濟まず。是から寛いで久しぶりにて昔語と留むれば、御守殿のやうに男珍らしく、我等へ然るまでに仰せらるゝは、近頃御前の御入來の遠々しきゆゑか。早速明日にも御越あるやう取計はむほどに、私はこれにて御暇と起上れば、浮氣も畢竟は其が原。これは御挨拶と笑うて

三人妻

歸る。

口では何様にいうても、肚には仍尊の字を思ひ断らず。此頃になりて始めて聞けば、升屋の小メが菊住を横奪せしも、自分が一圓の心から葛城に身を委せしも、巧の段に罹りしにて、いはば此方の不覺なれど、憎い仕方に腹も立ちて、當座に心の着かざりし無念さ、恨は今も遣れり。今度の事も其爲返と思はゞ、御前も強いことはいはれぬ義理、此方も格別通り入るには及ばぬ理窟。此處を山瀬に一間答して、散々言うて遣つても可かつたものを、否々、舊時の情夫も今は毒夫、その言分は通らぬ身でかし。

(九) いとしい貌

新聞社にて探りし事實を明、白に葛城の耳に入れなば、一鐵短慮の假藉無く、什麼なる椿事を爲出でむも知れざれば、彼記事こそは、お才に棄てられし遺恨露しに菊住の口より出でし虚説と繕ひ置きて、左右はお才に意見を加へ、向後身を慎まば、世間の噂も七十五日、行水に流るゝ芥の返ることなしとは、山瀬の最初の了簡なりしが、爰に一つ拙きは、白鬚を訪なし事なり。後に此の事傳内より知れば、我は可笑きものになりて、お才の講中に入れられむも心苦し。さりとして用事のあるまじき身にして、李下に冠を正せ

三人妻

し辭疏の立つべきにあらざれば、此事明かに言はでは克ふまじ、千慮の一失、はて困つたれど、是非無く葛城に逐一報道せり。

但し虚偽は少しも言はぬかはり、事實も半分は掩して、罪の重からぬ廉々を拾ひ、まづ勘辨のなるやうに言上して、此事直にも申上げむとは存せしが、例の御氣性なれば御了簡しかねて、又々「隅田櫻」の後日譚の材料を尋くやうなる事にも及ばむかと、それが氣遣しさに差出がましかれど、昨日白鬚へ参り、御前には内證の分にて、段々意見を申せしに、悔悟の様子確に見届けましたれば、此度の不埒は媒妁に免じて御容し下さるべく、お才殿の浮氣の原も御前が深川へのみ凝られて、自然外をば疎まると、態のあるゆるなれば、此後は何方へも滿遍なく御越ありて然るべしといへば、餘五郎も笑出して、媒妁が折角の頼なれば、此度は知らぬ分にて何も言ふまじ。菊住は今何して居る。某省の雇となりて、さる若後家の男妾を稼ざる由と答ふれば、あのやうな意氣地無き男を忘れかねるとは、那奴の氣性にも似合はぬことなれど、此道の格別といふは其處なるべし。

お才は事の露れしより、有聲に心樂ます。淺ましき夢など見るにつけて、いと結ばるゝ氣を紛らむむと、

三人妻

一銚子つけて見れば、手酌の酒は呷飲になりて大分過して、微に酔ひ、これから午睡して暑熱を忘れればやど、獨り二階の風に寝轉びて、うとくとなりける耳元に、お仲が慌忙しく、御前様の御入來といふに驚き、しやら解の帯引締め、寝亂れの裾婆姿々々と、二三段階子を降行く下より、餘五郎お才を仰ぎて、無事かと機嫌好き言を懸くる。

お才は嬉しげに、何方様か、失禮ながらお見それ申しました。主へ御用ならば深川の別荘へ御訪ね下されまし。此家へは足懸け十年も見えませぬ、と憎いほど可愛き餘所々々しさ。否、主人には用無し、御内儀にちと逢ひたさに。これはく櫻色の御機嫌、となた様のお合をなされたことか。此方も早速肯りたいと、劈頭から和かに出懸けて、何事も知れる氣色を見せず。急に逢ひたうなりて、出て來たやうな顔であれば、お才は一昨日の山瀬の忠告は、御前へ内々口には言へど、確に謀合はせしことと想はるゝに、遠き親類はと音信なかりし餘五郎の、珍らしくも今日見えたるは彌よ怪しく、様子見に來られて様子見らるゝお才にはあらず。先方がその氣ならば此方も負けず、御前一人が眞箇に悦しい貌。下には傳内が、隙もあらば御前に近づき、先達て袖岡の扉の外に千辛萬苦して、探得たる子細を申上げむものをと、部屋の口に面差出して、

階子の足音を氣にしてぞおたりける。

此夜餘五郎は一泊して、酒も旨く、お才も美しく、月も良く、風も涼しく、何事も御意に稱ひて、此家の座敷開きせし爾Hのやうなる機嫌にて歸りけり。

(十) 妊娠劑

お艶は妊りて早や五月になりぬ。殘暑過ぎて九月に入り、其の二十一日は亡母の命日、彼岸にあたれば厚く佛前に供養して、墓參のならぬ身の不孝を詫びけるが、今更の恥にはあらぬと、今日の一人入身に徹して、在るにも在られぬ思ひするは、このやうなお腹を抱へて母懐に會ふことぞかし。言うても復らぬ事なれど、馬場夫婦に給かれ、餘五郎に誘拐され、無理往生の妾になりて、穢れたる身上とは首から知りながら、金澤へも還られぬ義理より、恥を忍びて心ならぬ月日を過す中に、いつか性根腐りて、明日は此家を出でむとも思はず、馴染めば可厭な男の情にも絆されて、今は了簡から立派なる妾になりぬ。

人の妻は初産を一生の手柄にして、親にも歡ばるゝ例を思ふほど、我身の重うなれるは、不孝の罪の重りたるかと、物堅き兩親の面梯胸に浮びて、佛壇の前も過ぐるに愁く、それより五七日は此の事のみ思ひ出

三人妻

されて、餘五郎が来ては嬉しさの戯言も情無く、このやうな思をせうよりは、琴の指南の微なる世渡も氣安きが勝しかども考へけるが、善き心懸のつい忘れ易く、いつか今の身上を勘辨して、はや宮参りの衣服の心支度。象ほどの狗張子を夢に見て、覺めて獨り笑ふなど、氣散じなる此頃。

女子にてもあれ、子一人と明暮思續くる紅梅には其沙汰無くて、さまでに願はぬ方に出来たりと聞く妬さ。これよりは此の身の籠の衰へぬまでも、子の愛ゆゑに御前の心自からお艶に移らば、始終は口惜き事あらむ、と紅梅は卒に騒ぎて、知るゝ限りの妊娠劑を持薬の如く試みても、一向驗無きに可悶く、何様と聞く神々に信心を凝し、或は種々可笑き咒詛も利かず。いかなる石女も請合孕む秘傳の按腹、名譽の筋揉兩國に在りと聞きて、其へも通ひしが、何の事も無く、それでも諦めかねて仍心役は息まず、餘所目も氣の毒に憂身を察しけり。

鼻涕垂してびい／＼哭く見れば、世話焼けぬ人形に縮緬の衣服着せて床間に飾り、親はいつまでも若くと願ひしは嘘にて、千金にも換へられぬ寶とは今思ひ當りて、爰に一人の子だにあらば、紅葉のやうなる手中に十千萬圓の掌握もなるべきに、餘所に出来たる妬さの已む方無く、此の上はお艶を本家へ不首尾にし、

て、母子もろとも邪魔拂せば、我念の通らぬまでも、他に好事さるゝ無念はあるまじと、此魂膽あれば、前よりは本家へ出入を繁くして、お麻の前に根強く取入り、其の心を左右することも幾と思ふまじになりぬ。

お才はそのやうなる妾根性も無く、お艶の目出たき音信を聞きて、格別羨むにもあらず。子無く苦勞なく、華美に、氣樂に、世を面白く渡りたいが願。その面白き浮氣が露はれて、どうかと想ひしに先は無事に濟みて、加之御前の御機嫌に變ることなき仕合に安堵したれど、餘熱の冷むるまでは堅氣の趣を竊に袖岡方へ文して遣れば、菊住は一日約束の日に殻を踐されて、さる一大事のありしとは知らず、其次の六の日に、少しばかり無心する氣で行けば、袖岡の老嫗は力落ちたる顔色にて、寂しげにかの一通を出せば、近頃旦那殿の御越が激しいことと見えると、披けば案外なる文音。菊住は蒼くなりて、近き内に音信せむとあれば、其節は端書にて早速知らせたまへ、と餘の事は一口も言はず、忪々として立出でけり。

(十一) 芝居茶屋

お才はそれより一月ばかりの間は、纒に兩三通の文書にて辛抱せしが、お艶の帯の祝など、餘五郎も男子

の沙汰の嬉さ珍しさに、自から紅梅にさへ疎くなりて、産婦の見舞に餘念無く、白髪などは酷いお見限り、寄りも着かざる此頃の首尾、そろく好い頃と浮つく氣を鎮めかねて、花川戸へ母の機嫌伺ひに行く事にし、て家は出たれど、傳内といふ見張あれば、それだけの格の身にて、供をも伴れず出る事は協はず。盗みする間に提灯挈げて行くやうなるお仲を、邪覺さうな顔もせずに伴れて、花川戸の隠宅を訪ね、これから市村座へと母親を誘へば、幾歳になりても此道の所好は、歴々の後室にもある例、中には名題役者の手拭を集めて、今から經帷子に拵へおくなど、後生善き年寄のことを思へば、喜ぶも其苦の母親は、何よりの孝行と、無理なる等よりは寒夜の鯁鮓を望むも、子に甘き親心なり。お仲は其と聞くより、噫氣の口に牡丹餅の落ちたより、まだ旨い仕合に胸騒ぎ、小陰に懷中鏡取出して、髪梳つける、襟正す。十時の開場といふに牛も過ぎたり、と母親は年効も無く、支度しながら騒ぎ立て、悪落付に落付くお才の前なる煙草盆を片附けて、川留ではないよと促きたて、猿若町へぞ飛ばせける。

お才の樂屋は愕くべし。かねて合圖の文を送りて、指名の茶屋に菊住を忍ばせ、幕開の囃子に二人はそぞろ心になるを、おのれは茶屋の女房とゆるく話しながら、一足先に場所へ逐遣りて、人氣無き裏座敷に、其

幕の半分ほど菊住と忙なく物語りてから出て行き、又もや長き幕の始め頃より拔出して、思ふまゝの首尾してけり。

世界を變へて此處に樂むこととは、思ひ寄らざる傳内は、また出をつたな。大川端に三十四五の男の母親はない筈。今度露はれたら首は差を飛んで了ふぞ、とまた袖間まで探りに出懸しに、門外に車も無ければ、内に然る氣勢はなほあらず。何處へ陰れたか、車夫を糺せば直に知れることと、歸宅は夜に入りたるほどいよいよ怪しきに、先づお仲を素引けども、芝居のことは弗と言はず、車夫に尋ねれば掴ませられし物の義理に、花川戸へとばかり。傳内大いに憤り、そんな譯は無いと獨り力めども、手證あるにあらねば奈何もならず。此度に限りて見道すとも、いつまでか其分に措くべきと、袖間事件破裂以來、嚴しき用心おのづから目顔に表はれて、此非人の淫婦め、憎しみの念内に在れば、主として仕ふるも屑からず。それにつれて行儀も舊時ほどにはあらざる端々の、此方には油断せぬお才の目に着きて、あの事ありてより格別に御前の嚴命ありて新開をしつらへ、警固をするも役目なれば、憎むべきにはあらねど、以前に變りて無禮すたる仕打は、夜番の分を知らぬ利いた風の老爺めが。

三人妻

お才の不始末のあらざりし前は、陰目附といふものゝ、此家に扶持されて用人格でゐれば、舊は藝者でも今は旦那様、只管御主人と仰ぎ、忠義を盡して仕へければ、面貌こそ怖けれ、憎氣無き老爺の酒だに飲ませてやれば、昔話の兵法自慢、人は聞いても、聞かなくても、面白さうに喋るを一藝にして、不器用でこそあれ、頼む用は何なりともする處が可愛さに、お才も随分目を懸けしが、近頃は貰ふものに獨り極めたる折々の寢酒もくれず、つひした事に口をたたく小言いふなど、今までに打つて變りて、稜々しく遇はるゝより、傳内はいよく面白からず、何かにつけて抗へば、お才は腹立つほど傳内は癪に障り、此間三を以て一を除するに同じ。

我見露ほして手柄にせむと、傳内少しも油断せざれど、お才の舉動に是ぞと稜立ちて胡亂なる處も無く、十月は月の初に花川月へ、牛過に一度、中村樓に宇治の名弘會ありて、舊時の師匠の義理に顔出しせしのみ。此の二度の中に遺縁ありしかと、疑は々疑ふまでの事にて、先は別條無しと見ゆる擊刺に、傳内も稍心を弛せど、固より油断のならぬ女と、一圖に念ひこみたる志は鑽石のごとく、今の處は無事なれど、氣は常に満ちて、旺ならざれば、虚に乘られて思はぬ不覺を取ること、劍道に於いても是第一の心得なり。敵

は豈獨双を交へて切結ぶ時のみ在りと謂ふ可からず、可恐可慎。一藝一道の達人たる心懸はいや又格別のものど、允可の傳書は一々胸に疊みて、今度こそ不意撃は吃はぬ氣でぬながら、疾に二度やられしことは夢にも知らず。之が木劍の仕合ならば、手裏劍に袴の裾を縫はるゝ人なるべし。

御前の御出あれど、お才は全く前非のあらざらむ人のことと、前に倍して狎々しく、我儘も常談もいふ中に、自から男心の蕩然となる旨い仕向を出来るだけ爲て見すれば、固より憎うて圍うたる女ならねば、餘五郎も味に氣が乗りて、菊住とはまだく脈の通うてゐる事は、十分に疑ひながらも、恚うされて見れば悪い心地はせぬかして、以前よりは思召のちと深いやうに見えけり。

お才は此機を外さず、久しう無沙汰にせられし見舞としてなごご、勝手の好いこと言ひて、溜めておきたる品々の強請。御機嫌罷はしき折は、餐餘の桃さへ王に旨がらるゝ例ありて、憎い時に物もらふよりも、可愛き時に遣る嬉しと。どのやうな事を望まるとも、有餘る金錢の幾百萬分の一の、其の百萬分の一ほどの無心は、何の釋もないことと、言ると儘に投出せし類は、何のかのと三百圓許。其内百圓餘は買物して、殘類は小算笥の抽斗に袱紗包にして、ちびくど情夫が不時の需を須つ氣。然りとは知らずか、近頃御前

三人妻

の多愛たあいなど。間男まをとこするほどの女に未練遺して、醜ちのまき彼態は賢き御方には似合はしからぬ事とは思へど、茲こゝに元祿げんろくの昔を鑑かがみみれば、祇園ぎげんのれに酔よだれの犬武士いぬさむらい、醒さめての後の大忠臣、大石内蔵助おおいしの内蔵助真雄が胸中、その始はじには測はかるべからず。爰こゝ時御前の爲ためむやうを見ばやと控へをれば、お才は旭日あさひの昇る勢にて、目下の身を以て之に逃にがふは、目下めつ勘定かんぢやうにしても大きな損なれど、傳内ひたすらは唯管忠義張の魂を固めて、そんな事は更に意と爲なず、剛情我慢に四角張るほど、いよくお才の眼前めつはりを煩うるはがられ、一向懸酒いこうけんしゆの御沙汰も無くして寂しく部屋に閉籠ひしる時は、壁に向ひて木太刀を拵あひくり、居合ゐあひを抜きて慰みけり。

お才は二度まで芝居茶屋にて首尾せしが、袖陣そでじんの奥二階とは世界變りて、火事場で碁を打つやうな怪徳せはしき、逢ふといふは名のみにて、鏡に映る影を見るも同じ事。これでは危き思して、忍合しのあひふ効無ければ、何とか外に巧うまい工夫を、二人の智恵にて案ずれど、出るには供を伴るゝ身なれば、何事も面倒なるに、内には傳内といふ敵役かたやくの我張がんばれば、其手前も氣儘には出行ででる難く、八方に人目ありて晦くらき事はならぬやうに、其處は忽いちらぬ葛城の方寸、連も一人の味方無しにては奈何どうもなることに非ず、と菊住も煎じつめたる處をいへば、お才も考は同じく其事にて、今までは他の口の脆もろきを氣遣ひ、自分は獨りどればど苦みても、人は頼まぬ了斷りやうだんなりしが、

此上は是非無し、お仲を手懐てなづけて、贖あはれて逢ふのも悪くはない話。

(十二) 義理と慾

お仲は十九といへど晩稻おくらにて、不愛相ふあいさうのかかりには口數くちすきかず、陰ねづ忍しのと温おどしき女なれば、味方に附けて、容易に事を泄ひすべしとも想はれねば、否いな應おういはせず申入るゝ、貴道具きめだうぐには恩と義理と、お才は胸に一物あれば、爾來これまでとても相應にせしを、一入心いちしん着けて、給金の外に何とか名をつけては餘分の物を與へ、此家に不用の品は人知れず宿元へ運ばせ、此年頃の喜ぶ物を氣の毒がるほど取らせて、何事も仲やくと御意に入らるゝは、此上無き奉公人の面目と、肚裏はらのなかでは一方ならず喜びながら、軽く口の頭に器用な言のいはれぬ氣には、此恩を懐なつふこと格別に深く、なほ否のいはれぬやうに、辛抱して我方ちやうに長年せば、嫁入道具いひの一式は私が祝いわうてやるなどゝ、狡猾なる男も騙たるゝ旨い舌頭くちで、氣の茫然ぼうぜんとするほど結構なる話を、如何にも真まことにして聞かせらるれば、堂々たる國會議員こくわいぎいんのさへ悪くない話には、世の毀言こいごも身の耻辱ちよも棄あつる氣になるものを、お仲は悪事の加擔かたんせよと唆そとかざるゝにもあらず、奉公に精出して落度なく長年せば、と道理かみに慥たへることなれば、其氣いきになれるは理ことわりなり。

三人妻

最早薬の十分に循りたる頃と、お才はお仲の様子を篤と見澄し、菊住との事情を一條作して、道れぬ義理から此方の御前の世話にはなれども、菊住にも縁は切られぬ因を、知らずに聞けば如何にも理に、哀に、氣の毒に話されて、生なるお仲は毛筋ほども疑はず。折々の密會を知らむものは、二人の外にはお前ばかり。私を主人と思ひ、大事と思ひ、此身上を不便と思はば、忘れても口外してくれな。其代りには私も行末長くお前の力となりて、及ばずながら世話せうと、内証の底を見せられて、そのやうな事をも、色に染まらぬ娘氣に吃驚せしが、お才の思はく通り恩に絡まれ、然に牽かれて、自分に悪い事せうといふではなし、何も知らぬ顔して口になさへ出さずば、其にて濟む事と了簡して、おとなしき返事すれば、お才は痛く喜びて、其夜竊に縮緬の羽織に三圓添へて、何も言はずに與れぬ。此格で行けば、一年の内に立派に嫁入の支度は出来て、其上に道具は祝うて下さることと、嬉しさの始の羽織が氣になりて、睡られぬまゝに葛籠から出して最一度見れば、裏の墨繪の秋草が、もうくく好くてく。

又這慶事と思ふ怨と、二つには義理ゆゑ味方となりけるが、まだ一度も其場には臨まぬ前から、今まで然もあらざりし傳内の癖なる上、眞が、速に薄氣味悪く、お前の舉止までがどうやら今までとは違ふやうに

三人妻

思はれて、謂はむ方なく心苦しきに、お才はいつも絆々として、苦勞も憂慮も後晦き事もないやうな、あく無くては那ほどの事は出来ぬ筈と驚かれぬ。其の後餘五郎の來にける時は、浸々可恐しく、二階へ膳を運び、銚子の更りに通ふにも、先階子の口にて一度悸々、座敷へ入る前に二度目の胸を轟かせけるに、お才は餘五郎の側におて、楽しいに笑ふ聲の聞ゆるには愈よ驚かれけり。

お才はお仲を手に入れてより、月外の首尾は思ひの儘に、少くとも月に一度は出合ひけるが、先度に懲りて山瀬も絶えず探索を入ること嚴しけれど、お才の用心は疎かならざれば、一向種は上らざりき。

十一月の末に菊住は小袖二枚、羽織二枚、其外に向上なる携帶品三品ばかり出来て、仕送らるるもの饒に、金時計も買ひ、春衣も調ひて此年は暮れけり。紅梅は不相變お麻に取り入り、お艶は明暮身を大切に、梅咲く頃を樂み、葛城商社は益好景氣にて行年を送りぬ。

(十三) 染井の寮

一月の二十二日の朝、椽の日影に列べたる二盆の梅は、枝頭に開かぬ花も無く、垣根の霜柱消えて、鳥の囀は春めけども、寒風の空に大風風の風弓遠く響きて、九時頃と覺しきに、お才は未だ闇を出でず、先刻

三人妻

新聞を取寄せけるが、讀みてから又睡りぬ。

傳内は爲す事も無き閑の身に、無性ものも朝湯にと門の出合頭、馬車を飛して來たるは、本家の執事の一人永田某なり。傳内は見るとより、恭しく一禮すれば、永田は帽を取りて、旦那様は最早お目覚か。急の御用ありて参りたれば、此由を取次がれよとあれば、傳内畏みて客間に請じ、お仲は慙くとお才に告ぐれば、本家より執事の使とは、如何なる事か、更に心當りはあらざれど、もしや御前が急の思付にて、正月の催でもある事か、薄々はそんな話もありしが、と手早くしても駄手水から衣服着更ふるまで、小一時間も待たせてやうく立出づれば、永田は煙草吸はぬ男、手爐を抱へて肩を聳かし、寒さうに退屈さうなる顔して控へけるが、裾を下りて懇懇なる挨拶了り、御前は今朝ほど染井の御別荘へ御越ありて、後より貴方をお伴れ申せとの御用を、私承まはりて罷出でましたれば、直様御支度をとは、はて何の用やら合點行かす。御用の趣はと問へば、私も一向存じませぬが獵銃を御持参あそばしたれば、大方小鳥狩の御慰と聞けども、まだ臍に落ちずして思案するを、永田は傍より、御存じの通り短氣の御前なれば、時刻晩なほらば、私がお謝責を受けます。馬車も待たされたれば直様御供と促さ立てられ、今日は午後後菊住と逢ふ約束を飛だ御

川に邪覽されて、腹は立てども美しく衣飾りて、わざと素顔に結び髪、徐々と支關に出でたる姿には、敵傳内の心も和ぐ。

總て馬車は染井なる別荘の門に着きぬ。お才はかねて話に聞きたる此家の、別荘といふからには、音羽ほどにはあらずとも然るべき構造と思ひの外、昔はいかにも然るべき構造なりけむ、垣の朽つるまでに古びたる、幾歳雨晒の門の處々損じて敵のことさ昔のつきたる、今は宛然相馬の古御所。植籠竹藪は千日苺らぬ頭髮の如き茂みに、百鳥の囀轟しく、なるほど小鳥狩には風竟の場。まだ始めぬか、轟然といふ音もせぬと、永田に案内させて門を入れば、門外から見しよりはなほ驚かると荒庭の景色野中の如し。雜司谷の鬼子母神に詣る道に、此の様な處ありと、後よりお才が話しかければ、もとは染井に二つとはなき庭なりしが、と永田は立寄りて、此の自然石の燈籠が價值にいたせば五百圓ほどの名物でござりまする、其も今は悪寂に寂びたる庭の奥に、書院がりの廣間の様高く、障子の紙の新しく白さが際立ちて見えぬ。

此方の登音を聞きて、出迎に見はれたるは、山瀬の番頭清浦某。此前會ひし折の綿の羽織の打扮と變りて、今日は獨逸仕立の黒綾の朝服。緒黒き頭に眞白き襟を突張らせ、髭まで生して、月給にすれば十五圓

三人妻

三人妻

方も男を上げたれど、變らぬは調子と腰の低さ、之で商賣を上手にする人と聞けり。

過ぐる二間の模様を見るに、普請の始には手を竭せし造作も、長らく人の住まざりしにや、散々に損じ古びて、疊五六層履む間に足袋の裏は鼠色になりぬ。御前は何處にと問へば、清浦は曖昧なる返事して、左も右も那へと、書院へ案内すれど、森として何處の隅にも人は居ざる氣勢にて、送り來りし永田はあのままに歸りけるか、姿を見せざるも訝しく、どうやら一狂言ありげに思ひつゝ書院の襖の外に來にける時、内にとんと唾壺撃つ音、扱は御前は此内にかとおもへば、唯一人山瀬が控へたり。

お才は慄然して、扱は露はれたるかと思へど、わざと落着きて、まづ初春の御慶から、舊冬の無沙汰の挨拶まで式の如く、何に驚きたる氣色も見せず。餘五郎の來ぬことは見抜きながら、御前は何方にと尋ねれば、山瀬は吃々と笑出し、家暮な、それほどの事が知れぬかと衝返せば、お才は言はるゝまゝの家暮になりて、占者ではないものを、其の様な事が私に知れますものぞ、貴方が御前の御名代とならば、御用の次第を聞かせたまへど畏まれば、山瀬はいよく笑ひて、金佛の口頭に鰯を塗りつけても、知らぬ顔では通らぬ譯。かの一件が又破裂たて、と會釋無しに言飛ばされ、餘人ならぬ山瀬には、お才も冷たき汗を掻きて默然

として俯けば、山瀬は力を入れたる聲にて、それほどにも彼男が好いものか、と呆れて感心さるゝにいとど赤面して、此間の御心切を無にするではなけれども、腐れ縁の二度の不埒、貴方には面目もござんせぬ、と有繋に萎れてぞぬたりける。

山瀬へは左も右も、御前へ面目無しとは思はずか。其方を御前の落籍されしも、始を謂へば好かれぬ男の無理取ど、それに免じて一度の浮氣は辛抱せられしは、中本にでもありさうな粹なる捌。其方も諸譯を知らぬ娘にはあらず、其處を買ふ肚の無くては協はぬに、可厭な男を甘く見過ぎて、好いた男に實過ぎた爲方は、餘りといへば義理を餘所にして、念の入りたる蹂躪やう。それで佛でも堪忍したまふまじ。思へば由無き媒妁を頼まれて、去年は家暮な意見番、今日は時次郎に憎まれさうな役廻。女の前で酒飲めば、意氣な事の一つ二つはいうて見たき男なれど、これも君の殿命是非無く、上意を承けて如件。お才は徐に面を擡げ、おほせらるゝ一々胸に徹へて、身の不埒は今更言解くべき様もなし。向後心を檢めむと、二度までいはむも冗ければ、御前の思召すまゝに此身を如何やうとも遊さるべし。昔ならば首は無き女ぞと、色衿着せられたれど聲朗に、少しも悪びれず。

三人妻

三人妻

山瀬は此體を見て、恩を忘れ、義理を棄てたる不埒は憎き女なれど、其覺悟の殊勝さが氣に入りて、念無き女に用無ければ、何處へなりと往きて、好いた男に添へと放して遣りたけれど、葛城餘五郎が一旦念を懸けて召使ひしものを、世間に出して恥曝すは、女の外聞よりは葛城の名折ぞかし。當分此察に窮命させ、篤と思案の後、改めて其方の了簡をも聽きての上に處置すべし。今から其方の住居は此處ぞ。花川戸の母方へは、今まで通りに月々扶持せむとの思召疎かに思ふべからず。白鬚の家財は明日中に運ばせむ、夜具其外當用の道具は今にも持來るべしと言渡す。

それは其か、夢よりも思ひの外なる爲方に呆れ、いかなる憂目も覺悟の上のおオも有繋に思ひ亂れて、身は早無宿の淺ましさを悲しく、半日も居られぬ此廢屋に、幾年を押籠められて、生効の樂み無さを心細く、遽に今朝までの身を懐ひ出せば、我にもあらで涙は胸裏に流るゝなり。

山瀬は手を打鳴して清浦を呼び、老爺をこれへとあれば、直に座敷の外に現はれて、手を支へたるは、今日からの變奴。山瀬はおオに引合はせて、臺所は此老爺に委せらるべし。此方は旦那様なるぞとあれば、老爺は謀々挨拶して立ちけり。

身上を聴かば憐れなるべく見すばらしき老夫を見るに、おオは憂を聚ぬる心地して、罪人には過分なる午餉の膳立、一銚子付さしを、飲めども酔ひはせず。二時頃になりて、支關に二三人の聲するを、誰か來にけると思ひしに、頓て引合はさるれば、我を張番の夫婦もの、支關側の一間に世帯道具身込みて、轉く折から又人の來りぬ。挨拶に出づるを見れば、又これに附絡はるゝ大谷傳内、御寢具其外持参いたして、お次間に差置きましたといふ。仲は如何せしと尋ねれば、御本家よりの御指圖にて、今朝ほどお暇がたまはして、横も同様にとざりまする、私めは御縁がとざりまして、又此方に参りましたれば、爾來通りお目をお懸け下されまするやうにとは、底意ありげに聞えて悔しかりき。

山瀬は清浦を率れて、三時頃に歸りける迹は、廣間に道具少く、洞然とおオ一人、寂さ心細さに堪へかねて、心を慰めむよしもがなと棟に出づれば、落日風急にして、椿寒く、兩三聲は何といふ鳥の啼音やら。

(十四) 龜井戸の梅

二月の初月満ちて、お艶の産は玉の如き男子なり。母は肥立軽く、子はいと健かに餘之助と名づけて、親父との毎日顔見に行かるとに忙しく、半月ばかりも遠退れたる紅梅は、嘆患の焰に胸を焦して、其の子の

三人妻

三人妻

生長つほどお艶に箔が貼くばかり、うかく恚してはぬられぬ身と、思ひつめたる心には種々可恐しき詭計も浮べど、そのやうな事も出来ぬと丁簡はしながらも、妬さ悔しさに蒔蕪して、餘五郎も見えねばいと紛れかねて、垂籠めてのみおたりけり。今朝は此頃は無き長閑なる日和、庭には散際の梅もありて、我が名なればと軒近く裁多たる古木の紅梅、物の實ほどに麗しき苦服れて、珊瑚珠を綴りたらむごとく、好しく眺むる内に、一枝謂はれぬ優しき振に花を着けたるを見出して、手活の慰みにもと剪取る折から、椽に人の氣勢するは侍婢の立てると、其枝をこれ見よと差出して振向けば、お麻なるに吃驚して、いつの間にと呆れ顔。凡そ二時間ほど前に来りしが、梅の木下に佇む姿の、いづれ花やら美しきに見取れて、聲も懸けざりしと笑へば、そのやうな事をと椽に上り、座敷に入りてから主従の挨拶。茶よ手爐と躰ぐを止めて、これから龜井戸へ梅見にと支度を急がせ、連立ちて門外に出づれば、横附にしたる華車製造の小馬車は、お麻の乗料に昨日出來上りて、今日乗初に紅梅を誘ひたるなり。

烏羽玉と名づけたる紫騮に、白革製の馬具を装ひ、小意気なる車を飛ぶがごとく走らせければ、道行く衆の目を着けざるは無きに、内には貴族とも見ゆる婦人の同乗せる、其の一人の美形ながら天女と拜みて

見るもの魂を奪はれけり。

紅梅は車の中にて、お才の押籠られたる不始末をお麻に聴きて、手をも下さで心快く慰討ちたるを、爲濟したりと思へど、わざと打驚き、其様な人とは思はざりしに、大反れた流樂の應報は靦面、幽閉とはまだまだ御前様のお慈悲とはいふものゝ、草深き田舎に人訪はぬ宿の住居の其心の裏は如何ならむ。度々泣かされし怨恨あるお才様なれど、昨日に引變へて然した身の上になられたるを思へば、おいとしやと心底から氣の毒さうに言へば、それもお才の身から出た繻なれば、少しは窮命するも樂なるべし。聞けば情夫の菊住といふは能無き男のよし。何の見所ありてその様な爛死蛇には腐れ合ひけるか、柵根なる女に似合はぬ思さ。人の妻は云ふに及ばず、妾とて、女は操正からでは、爲べき出世をも爲外して、身の破滅も其よりぞと、老人の話の末はいつも爲になる事ばかりを、紅梅は氣障がりながら、いかにも難有さうに聴きて、旋て龜井戸に着けば、梅を見るより人に見らるゝ醜陋しさに、ぐるりと唯一周して橋本に越み、歸路は田舎めきたる路を物珍らしく歩みて、人家の立續く邊より再び馬車にて歸りぬ。樂は見に行きし臥龍梅よりは、車の中の話なりき。

三人妻

三人妻

喧嘩仕掛に突懸かりて、日頃小面の憎かりしお才は獨自片附きて、残るはお艶ばかり。容貌は取立てと美きにもあらず、然ればとて男瞞しの手管も無く、旦那様の仰せならば無理でも唯々ど温順をのみ取柄の女なれば、彼一人は可恐しき敵にはあらず、子を生れたが百人のお艶より油断のならぬ行末と、懸念は其のみなれど、手剛のお才が無き者になりしは、我念の通る前表吉と、私に歡喜の眉を開けり。

世に米の飯と阿諛を好かぬ人無く、彼御前が一目置くほどありて、體中智恵かとも思はるゝ奥方も、今は此方の物になりて、我言ふことの何か通らぬは無く、御前夫婦の惚競、然れば其の紅梅の口頭にてお艶を逐出させんは、易きに似て易からぬは、彼女のおとなしやかなるが御意に入りて、折節は奥方も褒めらるゝに、お艶が又熱と窘みて穴を出懸けぬ無難の女なれば、何を捉へて口實にせむ廉もあらず、左右は落度を拵へて、それからの事。

(十五) 我目の曇

二月晦にお艶は枕直して、まだ兒の血服も明けぬと、本家へ伴れゆきしは、女兒末子の雛祭る日なりければ、紅梅も來會せて、お麻と更互に懷抱へ、我兒のやうにそこら自慢顔に持行きて、爲だら無く穢祿の世

話などして喜ぶを、お艶は狂言と知らねば、親心の嬉しさに打解けて、語合ひける一日の馴染も深く、然も紅梅は人の氣を察て、それぐに仕向け、辯口は男殺しの上手にお艶は滾りと遣られて、いつか一日氣樂に遊ぶ約束も、此日の中に出来ぬ。四五日後に紅梅はお艶の方へ出向きて、手土産には餘之助へ數々の玩具、東西識らぬ子よりは外に喜ばせたき人のあるべし。午前十時頃より日没までゆるく遊びて、二三日の中に是非深川へ、と固く約して歸る、其頃にお艶も行く、先方からも來る、又訪ぬる。數累るほど他人行儀の稜磨れて、二月ばかりの間に、餘所目には同胞のやうなる間になりぬ。

お艶が本家へ出入して、お麻に親まれては、樂屋を見られ、色々機關の邪窟と、紅梅は左右お艶の奥方へ疎音にする工夫して、何かの話の次手には、お麻の世の常ならず嫉妬深き事を語り、今までは然もあらずしが、お前様にお子様の出来てより、男のお子ほど憎悪強く、萬城の身代相續覺束無き、御病身なるお末様の行末を案じたまひ、さる事のあらざらむやう、折々御前へ慨かせらるゝよし。其につけて自からお前様を敵のやうに怨みたまへど、顔にも口にも弗とも出したまはざるほど、いかなる事を巧まるゝやら、底の知れぬほどなほ可恐し。障らぬ神に崇なしとやら、近寄りたまはぬに越したることはあらず。嘘か知らねど、お

三人妻

三人妻

才様に男ありとて幽閉にしたも、内証は奥方の差金と聞けり。
 恚る身にて謂ふは異なるものなれど、我家は舊お麻様の主筋なりければ、其報恩に世話するとて、親しう訪ねらるゝ義理あれば、氣味悪けれど折々は御機嫌伺ひに顔出して、今まで格別の憎悪受けぬも、何の愁も考も無く、子供らしうしてゐる所以ぞかし。明日にも妊ることなどあらば、怖や、本家の門をも通るまじ。事ありて招ばるゝとも、三度に一度の外は出入したもふな。もどが、賤く育ちける女なれば、随分無法なる事を爲かねまじと、まづ十分に威して後、折に觸れ、例を引き、念入してお麻の恐るべき氣性を噂して聞せければ、心善きお艶は一圖に之を信とし、弱き氣に痛く怖れて、我から好みもせぬにエなど設けて、因果なる身を或時は悔みぬ。紅梅は本家に行きて、近頃お艶の訪ね來ることの度々なるよしを語れど、明白に讒訴いふことは無く、まづは善き麻を擧げて褒めておくは、惹ひ悪様に言告げなば、嫉妬からの毀言、と覺られもせむと思へばなり。然れど些細なる事までも語るに、心ありて言ふとは見せずして、聽きて味へば、其言も此様子も生みたる男子を手柄に、身の程を忘れて人も無げに振舞へるやうに、其處は例の辯口。お麻は紅梅のいふ言なれば、萬更の虚言にもあらじと思へど、確に然した女にはあらすと、見拔きたる我日に憂は無

き苦と疑ひけるに、お艶は紅梅の良に掛りて、本家へ呼ばるゝことあれば、彼此假託けて出入を嫌ふ様子は、紅梅の言ひしに思ひあたる節あり、とお麻も少しは念に懸けしが、それが何の事にもあらすと、大きく思ひ棄て居たり。

(十六) 蓄音器無きころ

六月の牛神戸の分區に紛擾起りて、餘五郎は其地へ赴きぬ。

此夏は家族を引率れて興津の海水浴に避暑の心期なりしに、肝心の人が留守になりて、其話は立消になりけるが、お末は例年の暑愆、別けて今年の劇しさに、御歸京を待つまでも無し、と卒に思立ちて明日の發足と定り、幸ひ紅梅も閑なる身なればと、御意に入の徳は、是非に隨從を仰せ付けられぬ。

此春から樂みにせし効も無う、御前様のお留守になりたるに、力落して憐いばかりをりました。明日は二番流車でござりまするか。晦い内の一番流車でも、今夜の終流車でも、一刻も早う参りたく存じます。興津といへば鯛の名所、お庭から垂綸してなごご、十三になる女兒のお末よりも勇み立ちて、二三百里もある所へ徒歩で道中するやうな、事々しき支度話してお麻に笑はれ、それでも聞かず、種々支度もあれば心急

三人妻

三人妻

かれてと暇乞して、真直に歸るかと思へば、迂廻してお艶の家^{まはのみち}に立寄りたり。
 思ひ懸けぬ御出とお艶は歎へば、思ひ懸けぬ事起りて、と紅梅は氣の無き顔。今朝本家より使にて、直來い
 といふは何事かと、行きて御用を伺ひしに、此頃御前様の御留守を好機に、奥方は興津の別荘へ御保養にとて、
 私をも伴れて下さる難有迷惑。否をいへば直に御立腹、其報が可恐しさに、難有う存じますと、明日の朝
 お供じて興津へ行くことになりたるが、貴方とは十日會はずにぬられぬ御馴染を捨て、始終繼子のやうに眠
 まれて、大きな聲して言ふことも、迂廻と笑ふこともならぬ氣險じやの御機嫌執りて、窮風の思ひするは、
 保養よりは壽命の毒になれど、見込まれたが不運と諦めて、一月二月の辛抱はなるべきも、其間お目に懸
 かられぬが何より愁く、行きたうもなきは山々なれど、道れられぬ義理に責めらるゝ切なさを想ひやりたま
 へ。

我身の事は左も右も、若や興津より遊びに來て見よなどと、奥方の態々迎を寄來さるゝ事あらむとも、日頃
 譬のやうに思うておらるゝ人の、何がな思はく無しに招くべき。義理も遠慮も無ければ、其時は必ずくお
 出懸は御無用にあそばしました。御前様の御留守も長き事にはあらざるよしなれば、其間は格別油断したまふ

な。今日も今日とて奥方の貴方の噂して、恥と明けては言はれざりしが、左右に餘之様が邪宛になりて、貴方
 まで惜いやうな言の端々。今始りたる事ではなけれど、心着きしよ此事をお知らせ申したさに上りました、
 と聞いた所は涙も零るべき實意ぞ、鍼を纏める眞綿なりける。

お艶は浸々嬉しく、よう言うて下さりました。知らるゝ通り私には兎毫の頭の露ほども惡き心はあらざれど、
 此子ゆゑに思ひも寄らぬ疑受けて、奥方の憎悪繋る心苦さ。儘になるものならば、割つて御目に懸けたさ
 私の中。私をばそのやうな女と思召してか、何と爲ば此身の證明立つべき。情なきことぞと歎けば、設
 ひ奥方のどのやうに憎まるゝとも、御前様だに御機嫌好くば、心遣したまふことはあらず。されども此事は
 御前様へも仰せられな。一徹の御氣性なれば、其通りを用捨無く奥方へお小言あらば、いと々御身の不爲にな
 るばかり。其内折を見合せ、私から篤と奥方の御合點ゆくやうに御話し申して、御苦勞の無いやうにして進
 めまじよ。それまでは怒ひ毛を吹いて疵を求むるやうなる事せうより、今まで通り手を着けず、そつとして
 措いたが勝と、お爲轉しにされてお艶は深く喜び、何分貴方をお頼みまをしました。御辭に従うて、もし興
 津からお人など遣はさるゝとも、好きやうに御断り申して、忘れても出て行くことではござりませぬ。随分

三人妻

三人妻

御機嫌よう。一日も早く御歸を樂に待ちます。奥方の手前遠慮あれば、わざと此方からお手紙はあげませぬぞ、貴方からは折々のお音信を聞かせたまへ。可羨しうて言ふではなけれど、不束な私と違ひ、奥方にお悦びがられて、何處へ行かるとにも誘はるゝ貴方のお身に、一日なりともなつて見たらば樂かるべしと言へば、紅梅は呆れ顔、お望みならば此株何方へでもお譲り申します。聞いて極樂、其身の地獄。他の氣も知らずで那樣事を、とは聞かせたき人あり、ここに蓄音機の無きこそ恨なれ。

(十七) 興津の文

興津に着きて一週間ばかりは、所變りたる珍らしさに、蚤起から海濱よと黒くなりて騒ぎぬ。田舎蕎麥の味は好けれど、醬に恐るゝ都人は、食物ゆゑに風景佳きところにも長くは居たゞまらず、いつも戀しきは紅塵萬丈の俗境、日本橋通りに過ぎたるはなし、と旅から歸りたる人は必ず言ふなり。若夫鯛の捕れる沖を前にして、茸、蕨生ふ山を後に、柿、栗の林、桔梗、女郎花の野邊近く、冬暖に夏は涼しき所に清き居宅を構へて、金錢の不自由無く、我欲しと思ふ品は何にてもあれ、半日の中に素所に山を成さば、これぞ東京の醬に田舎の生蕎麥、お麻一家の興津に於ける境涯は正に是ぞかし。扱は此處を一生の住所とすとも、倦むの、

三人妻

飽くのといふ事はあるまじきに、其身になりては他の想ふやうにはあらで、清見湯も目慣れては手水盥の水、三保の松原も尋常の松原、富士山とて高いばかり、根から可笑からず。唯涼しきを取柄に辛抱して二十日ばかりにもなりぬ。

此方に御別荘の建ちし頃より、お艶様も此夏は是非行きたきものと、常々言れしに、私のお供したる事を聞かれなば、さぞや可笑しう思はるべし。一人も人の多きを面白き折からなれば、お差支無くはお招び申して下さりませ。然らば私の氣も休り、お艶様のお喜は如何ばかり、と聞けば成程お艶を伴れざりしは面當がまじう、隔意したりとて恨にや懐はむ。喜ぶとあれば喜ばせて心不快き事はあらず。大分飽きたるところへ新手が來たらば、又折返りて興あらむ。

此次の上り流車にて迎を遣れど、従者の岩田といふが庭の亭にて晝寝するを喚起し、口上言合めて誰ばかりの書状を持たせ、待つておてお伴れ申せとあれば、岩田は委細長まりて出發し、明る朝まだきにお艶の家を訪れ、此趣を傳へてお麻の書状を差出せり。お艶は今更心騒ぎ、紅梅の深切にもわざ／＼出懸に心着けてくれむは爰ぞ。おもへば何が憎うて奥方は箇程までにして此身を苦めむとはしたまふぞ。

三人妻

折角の御意を括くは失禮なれど、生憎二三日前より若様の御氣分宜しからず。朝夕醫者に來診うてもらひまする仕儀なれば、よろしう奥様へ申上げて下さりませ。若様の御様子次第にて上りまするか知れませぬが、何日まで御逗留遊ばします。まだお長いとは樂みな、定めて好い地ところでござりませよ。此暑に遠途とほざかのところを御苦勞でござりました。委くは此裏にと返書を渡せば、岩田は受取りて、其日の中に奥津に還りぬ。心から招びたうて迎を出せしお艶ならぬと、來るといふものは待れて、お麻も氣に懸けておたりしに、迎のものは素戾すれして、寂しげに書状のみ持ちて還りけるが、餘之助の病氣とあれば是非無し。私とは性が合はぬかして、いつ呼びにやりても、何か事ありて來られぬ人。迎まで出せしからは、此方の念は通じて、お前もこれで氣が濟んだといふもの、とお艶の書状を紅梅に渡せば、一通讀みて、何やら思案の體は、何を考ふるぞとお麻に問はれて、眞實まこと若様の御病氣か、それが可疑しくと、岩田を呼びて様子を聞けば、早朝ゆる御寝しんなりておらせられしにやあらむ、若様のお姿はお見受申さゞりしとばかり、外に糺すへき手懸りもあらざれば、紅梅は其儘口を喋つみければ、仍可なまじ疑しげに其書を見返し、わざと思案してぞおたりける。餘之助の病氣といふは虚偽うつはと知れど、此處に居ながら知るべき謂なければ、東京へ歸りてから様子を探りたる顔して、此事を言告げむ、と紅梅は何も言はで其場を濟しぬ。

お麻は餘之助の加減悪しと聞けば、お艶の來られぬも無理ならずとは思ふもの、近頃は何時招きても、何とか假託かたつけて左右顔出さぬは、味な仕打と思はるゝ矢先、此謝絶も如何やらと氣が廻りて、紅梅一人件れたる無念さに、拗うねて我志を無にせしか。但しは御前のお供はずとも、我に喚ばれて駈着けて來るやうな、安い身分ではないとの了簡か。東京の内から迎をやりてさへ來ぬものを、富士山ふじのやまの下からでは、來ぬも有理ことわり。然ういふ氣の女とは見ざりしが、男兒をとこのこ生みたる手柄から、自と心に驕慢やこり附きて、今までは打つて變る例もあるぞかし。

高が婢めし 妾かひの分でありながら、那樣真似そんなして奥方に睨にらまれたら大きな損とは心着かず、御前ばかりを恃たのみにして、月の光も入用の世とは知らずや。情みはせぬとも、それではどうも可愛うは思はれぬと、白き物と並ぶるほど黒きものは目立ちて、いと紅梅は御意に稱あはひぬ。

お艶はうま／＼紅梅に計られながら、危くも難を遁れし想して、何に就けても御前の御不在中の心細さ、一日も早く御歸京あれかしと、無事を祈りて待ちける念の通じてや、東京に急用ありて、本屋より直ぐ歸れの電

三人妻

報。神戸も大方處置の附きたる跡を支配人に委せ、又出て來ることにして、一先東京に歸りけり。用濟みて歸來には、興津に寄る約束なりしが、東京へ急ぎの身は素通りにして歸郷し、商用も三日にて果てたれば、取て還して興津へと思ひしが、お艶の獨り遣されてゐるを尋ね、餘之助の顔も見たさに行けば、お艶は折から風呂に入りて、湯上りの餘之助を乳母の抱へて出で來るに廊下にて會ひぬ。直に抱取りて奥へ入れれば、床間に我が寫眞を飾りて陰膳据ゑたるを、古風にしをらしき事する奴と思ひつゝ居れば、御前のお歸京と聞くより、お艶は得々浴衣着にて出來り、歸京の思ひより早く、旅中の恙無かりしを歎び、此處は風も通らず、蚊も多ければ、彼方のお座敷へと端近く席を設けて、月は未なれば庭の燈籠に灯を入れ、蟲の音の聞え初むるに、心涼しく頃日の暑熱を語りて、待つ間程無く、唐木の車のいづれも氣に入りたる肴核を排へ、兒はお艶の膝に機嫌好く、樂しさは夕顔棚の下涼、これも飲める、と杯の數重りて、明日は興津へ伴れむといへば、二三日前奥方よりわざくのお迎なりしを、氣分悪かりければ、若様の御病氣とお断りせしものを、今更お供申しては奥方に義理が濟みませぬゆゑと、進まぬ氣色なりければ、然らば方向を變へて日光見物にせうと言ふ。

何處にしても奥方へ義理の濟まぬは同一なれば、其も願はくは最少し先へ寄りての事にと断れど、今度は肯かず、明日の朝早く立つぞと力むも醉の上。明日にならば忘れむことを望みしに、早くこそ目は覺まさぐれ、起出づれば直に是からと急立てられ、今更否は言はれず、主従五人にて。

(十八) 日光見物

日光は外國人の目を驚かす我國自慢の名所、一つ見てさへ日暮しの門あり。ゆるりと見物せば、半月かゝりても見盡すべきにあらず。一週巡覽して直歸も興なしと、七八日逗留して、まづは遠慮無しに結構といはると身になりました、と供のものまで大喜びにて歸りぬ。

紅梅は興津より歸りて、取敢へずお艶を助へば、御前に伴れられて日光へとは、今年は南瓜の豊年か。不思議さに呆れしが、不便や飛んで火に入る夏の蛾、是がお艶が運の盡にて、奥方を焚きつけむには、詭向の上首尾と、歸りの車の上にて言告口の梗概腹案して、翌日何氣無き風して本家へ行けば、お麻は餘五郎の日光へ出掛けしことは早や織りたれど、紅梅が語る其處までは知らず、おやくと酔骨牌の鼻毛ぬかれた心地。お艶にしては出來過ぎたと笑へば、紅梅は佛然とせる氣色にて、お艶様も餘りなお方。興津へ行

三人妻

て見たいと常々有仰るゆゑ、お願ひ申して、彼處からお迎まで出していたといふ他の深切を無にして、然りと義理を知らぬ我儘な。日を繰り返して見れば、御前様と日光へ行かれしは、此方からお迎が行き其日の翌日、朝夕お醫者が見舞はるほどの若様の御病氣が、唯一夜の中にそのやうに快くなるものぞ。若又快うなられて、日光までも出らるるものなら、何爲興津へはお出なされぬぞ。御前様も神戸からのお歸來には寄ると仰せられしからは、興津へお出の思召はありけむものを、思ひ懸けぬ日光とは、ええ聞えた、私への見てくれか。奥様への面當か。田舎では義理といふこと知らずも濟むか、とお麻への見せつけに口惜がれば、そのやうなる事は言はぬもの。御前が伴れて行くに仰せられしや知れざるに、と言ひも果てぬに紅梅は面を赤めて、設ひ御前から有仰らうとも、興津から恚々と呼びに上げたお話を申上げたれば、御前様とて否は仰せられまじきに、日光とはお艶様から言出した……。もう言やるな。何處へ行かうと銘々の好々、可厭なもの無理に興津に来てもらうて、後で彼此愚痴言はれうより、好いた處へお供して喜ばるれば、伴れて行きたる効のあると謂うもの。お艶はお艶、其方は其方、何せうとも構はぬが可いと、語和に、心に稜も立ぬやうには見ゆれど、今度は藥の利いたやうの加減と、紅梅は肚裏に雀躍して、手始めの此峠一つ越し

てから、後は車の坂落し、手を着けずとも思ふ坪に落ちてゆくは知れた事。これからは又精々お麻の氣に障る種をこしらへて、絶えず突撞かば、其内には堪忍袋も孔あきて破るべし。爲すまじたりと思ふを色にも表はさで、お言はお道理なれどそれでは濟まぬ善の人情、と仍心解けざらむ如く、お麻の分までも引承けて、獨りくどく、眩まけり。

お艶は留守に紅梅の訪ね來しと聞くより、互に積る話ある身の會ひたさに、歸りし次日深川へ訪ね返せば、お麻の前に出づる紅梅とは宛然別人の應待。案の定興津から迎を出されしは十分苛まむ奥方の肚なりしを、お心着け申して置いたばかりに、お出の無かりしは何より重疊。お辰お縫などといふお側去らすの婢たちに、何やら言含めて手筈までせられし様子に、餘所ながら可恐く、眞に危いこととござりました。と根拠も無い事を思に被せて、御前と日光御見物の事も、奥方は夢にも御存じ無ければ、いよく貴方のお仕合。かういふ事は御前の奥方へ一々お話ある例無ければ、知るゝ氣遣はござりませぬ、と散々嘯して後は、海と山との土産話を取易へて、聴しう笑ひ興じ、なほ未は皆仇となる深切を盡して、お艶を當座に歎ばせ、擧句はお麻の肚黒きことを虚説して聞かせけるを、お艶は一々信にして、未を思へば身の措所あるまじく怖

三人妻

三人妻

れて、何分にも紅梅を頼に思ふ危さは、火を風下に避るにも似たらむかし。
 設たごひ此身を苛さいなまむとの意こころなりとも、表面は御深切に興津からお人を下されし事なれば、一寸なりとも
 お禮に上らでは済さいなまむとせけれど、色々様子を承うけたまはれば、行きたくも無けれど、思ひ切りて、近い内に一日
 御本家へ伺はねばならぬ、此様な可恐い事はござりませぬ。御迷惑でも其の日には貴方も御一處にお出なさ
 れて下さりまし。せめて貴方あなたお一人でも側におて下さらば、それぞ私には百人の味方、どれほど氣強いこと
 か知れませぬ。頼みますると思入りたる氣色に、十五六の少女でも、是ほどに意氣いき地無きは鮮あざきに、二十四
 五の曉まで、女一人で世帯張つておたといふ人にも似ず、然りとは世間慣れぬ根性、米屋の言譯は何の口で
 した事やら、と紅梅は心に可笑く、御迷惑の、頼むのと、これしきの事に他人がましく何を有仰るやら、御
 一處に上るはいと易ければ、何日なりとも御都合の好い日を有仰りまし。然れども、奥方が例の御了簡ならば、
 何として私をお側に置るゝもので、屹度何とが言れて、先へ私を還さるゝやうにしまふべし。
 跡にて貴方の御難儀とは知りながら、還さるゝものを剛情がうじやうに還らすにも居難ければ、それから後はお一人
 にて何と遊ばす御心ぞや。よしや責殺されむはと苛さいなまれても、道みちるゝ路はあるまじく、其愛目を見らるゝが

三人妻

可厭こえんさに、遠きからわさく人まで寄來されて呼ばれしをも、陳謝ちんせ言うて逃げられしに、呼ばれもせぬに
 此方から出懸けて行かれうとは、如何なる御了簡か、私にはちと解りかねました。義理の、済まぬのとは今
 有仰おつしやることとござりませぬ。今日になりて御本家へ御挨拶にお出なさるゝほどならば、興津へお出のことを
 何としてお止め申しませう。毛筋ほども罪無き貴方を、仇はしたなき嫉妬から讐のやうに疾はやくまるゝ、那樣方に要ら
 ぬ義理立、打遣つて措いたが可うとござります。強ひて張合ふも由なき事なれば、此方からは手出しを爲す、
 一向取合はぬが何より。繼母が子を憎むも、善さるれば善くさるゝにて、其が氣に障ると同じやうに、今は
 貴方が何の様に盡さるゝとも、効無きのみか、皆身の仇となるべきに、右左は遠避とほひきて忘れむやうにした
 まふに越したる事はあらじ。御挨拶になりとも、奥方に會ひになどは滅相な。義理も折にこそ依れ、と紅
 梅は顔色變へて住すまむれば、お覽も通に可恐うなりて、固より行くを好むにはあらず、奥方の興津へ招れしも、
 底巧そこたくみありてのことなれば、其に何の禮も挨拶も要ることではなけれど、顔一つ出さぬは、此上憎惡にくしみの種とも
 ならむと、其が氣遣しさに何も覺悟して行かむとは思ひしが、言はれて見れば、なるほどと思ひ止りけるが、
 又考へ直して、否々、先方は然した了簡なりとも、氣候涼しく、眺望たぼうも好き處なれば、暑夜なつよぎに來て見よ、と

三人妻

言ひ來されし書狀に對しても、知らぬ顔では済されぬ譯なれば、いかに責め苛まれうとも、死ぬるほどの事はあるまじければ、一寸なりとも。行かるとか。お身の爲を思へばこそ、悪い事は言はぬものを、聞入れては下さりませぬか、と紅梅の怫然としたるに驚き、何のく、お言を反古にするではなけれど、どうも其では私の氣が済みませぬゆゑと、義理は兩箇に心一つを定めかねたるお艶の様子を、紅梅は見取て、此通り心弱き女なれば、強くだに言は、何へなりとも憚るべしと、辭巧みに今まで竭せしことを陳述たて、其を枷に納得させ、お艶自身に行くは罷めにして、餘之助の全快に引續きて氣分の悪き由を言立に不取敢書狀にて挨拶することになりぬ。

お艶は心進まざりしが、さればとて顔出すも愁きに、紅梅には道れむやう無く促付かれて、我筆の書きける書面ながら。

(十九) 御不在

日光くたりまで遊山に出掛けしほど達者にてありながら、氣分悪しとは果報の耐に中りたるか。つい鼻の前さなに居ながら顔出しもせず、手紙の挨拶とは、何處まで増長つげあがる氣か、身の分知らぬ女め、とお麻は最早堪忍し

三人妻

かねて、今度ばかりは腹立つるを、紅梅は爰ぞと、今までは控へて言はざりし譏訴の惣まくり、然うおつしやれば、實はかういふ事もござりました、と陳べ立つる當意の虚偽も信じやかに、思ふさま煽り立つれば、油浸にせる紙の火移り好く、聞けば聞くほど腹の立つことばかり。今に見よと、肉締の蜘蛛も灸の下に蠢くへきお麻の氣色なりき。此様子にては近き内に事起りて、お麻は喚ぐ、お艶は哭く、餘五郎は狼狽うろたへつ、お麻は憐れ、三方四方の亂痴戯を高見で見物して、獨り面白き目を見ることぞと、紅梅は樂みて、待てどもく、其後お麻は絶えてお艶の噂もせず、とんと思切りたる事するらしき様子も無く、此間あれ程憤つておまながら、消炭のやうな他愛など。何日何と爲うとの了簡か、烈しい氣の女とばかり思うてゐたに、此幽癡うしやさは呆れて了ひぬ。

お艶は書面にて挨拶せしことの不躰よつしなりしを悔めど、今更及ばざるほど念に繋りて、然ぞや奥方のお腹立。何とか謝罪せむと思へど、頼にせる紅梅の、本家へは行かぬが身の爲と言うてくれるものを、推して行かむは心ならず。然りとて此儘放棄にしては措かれぬ氣に、いと々胸を痛めけるが、書狀を出せしは當座の間に合せ、いつまで氣分悪ければとて通るべくもあらず、とて一度は挨拶に行かねばならぬものを、一日でも

三人妻

早く行くが萬分が一のお詫を、やうく心を定めて、一應紅梅に此旨を語れば、又何の彼のど仕立するを、お艶は左右聞かずして、其事の絶えず心に懸る由を話して、氣の休まるやうに是非一度はと思ひ入りたる氣色に、紅梅も所爲無さに得心すれば、御一處にお伴れなされて、是も行懸りで否がいへず。私からお宅へお寄り申しませうと、其日の土産物の相談までして還しければ、お艶は喜び勇みて、約束の日も今朝となりて、今や時刻といふ頃、深川より人は来たれど、紅梅にはあらで老漢の長澤、文も持たず口上にて、今日の明方御隠居様御急病の御報知にて、お里方へお越ありけるが、急にはお歸來のほども覺束なければ、失禮ながらお約束の事はと、思懸けぬ故障にお艶は力を落し、今日に限りたることにはあらねど、大病の介抱せらるゝ人の手の虚くを待たれもせねば、已む無く一人して行くに定めけるが、遊山に出づるにしても、契りし友を失へるは心快からぬものなるを、お艶は杖と頼みし紅梅に外されて、是非行く氣ながら進みかねて、被かへたる衣服のまゝ座敷の真中に端然と坐り、空く煙草燻して、何考ふるともなく運ぶ間に、はや一時過ぎて十時の鳴るに心着き、卒に立上りて乳母を呼べば、待草臥れて餘之助を抱きて何處へ行きけむ見えざるを、仲勤が探出して来て、お外出といへば、お外出かねと不思議さうなる顔、二時間前に點けし口紅は剥けて、用意悪き小髪の亂髪を、支關に立らながら掻いてもらひ、待ちし時間の半分もかゝらで、直に車は本家の門に着きぬ。

お艶は門構を見るから心怯れて、どのやうな言いはるとやら、何と詫して可からうやら、木履も重く十間の敷石傳ひ、支關にかゝりて案内を乞へば、いつもの用人出で、今日は奥方は御不在にござりまするが。

此期に這びては會はで還るも本意無く、直にお歸來とならばお待ち申してと言入るれば、用人氣の毒さうに、お歸來のほどは知れませぬば、と支關に幅して通さず。爲む方無さに口上遣して、お艶は惜々立還りけり。紅梅の母親大病とあるに、相識にはあらぬ人なれど、見舞ふは紅梅への誼と隱居所の番地を訊ねむとて、大日深川を訪へば、留守居は下女一人にて何も知れず。此儘歸るも口惜ければ、微覺えに聞きしを目的に其町へ尋ね行きて、知れず仕舞にて亦惜々還りぬ。

二日隔きて再び本家へ行けば、今日も朝からお他出にて、お歸來のほどは知れませぬと、板で摺りたるやうの口上。ちと胡亂には念へど、然る顔もせず、二三日の中にお上りますれば、奥様へ宜しう御取次を願ひまするとて還りけるが、二日も留守のことの可訝く、大方は奥方の御不興強く、それゆゑ會ひたまはぬかと

三人妻

三人妻

思ふほど心細き夕餘五郎の來にければ、其とはなしに様子を聞けば、一昨日も今日もお麻の不在といふは虚らしたに、いと苦勞を増して、我胸一つに持餘し、忍ぶれど色に出でたるを餘五郎に尤められ、込入たる事は故と語らず、只我身の不調法を陳べて、お麻への謝罪を囑めば、それしきの事に心配すな。我が好ま様に言うておけば、何時なりと遊びに行け、と口には言へど例の無貪着、請合ふことの七分はお流れになる、男の氣は尾を結ばぬ絲も同じく、また放棄にされむかど。屹度明日奥様へ有仰つて下さりまじと言へば、微醉の機嫌にて、今し方言うておいたから、安心なものだなど酒落ばかり言うて取合はず。念を推して幾度も囁めば、承知々々。氣の無い顔して鬱いであるゆゑ、されほどの心配があるかとおもへば其だけの事か、はて氣の狭い、奥方が如何に腹立てたりとて、鬼にもあらねば取つて啖ひもせまい。我が附いてゐるからは泥濘を蒸氣船で渡る氣で丈夫に思へ、と髯を撫でく高笑す。お艶はそれなりに黙りで、獨り惚々物と思ひけるが、我手一つにて事の始末の着くべくもあらず、頼むは左も右も御前の外に人はあらじ、と明る朝になりて又此事を言出せば、餘五郎も其心根を不便に思ひ、酒氣無ければ眞面目に請合うて還りぬ。お艶は其を頼に、二日経ちて後、今日こそは會ふ氣で行けば、亦お留守と、有繋に用人も極り惡き顔色。一

度ならず二度ならず、三度までも足を運び、御前の御言さへ懸りけむものを、仍はお心の解けぬとあれば、此の上に爲むやう無し、とお艶も怫然とせしが、噫人の妾などすればこそ、此様な口惜き目にも遇へ。誰を恨むべきにもあらず、皆自ら招きし事と勘辨して、此子あるゆゑの奥方の憎悪と聞けば、どのやうに御機嫌取るとも其効はあるまじきを、何と思ひ違へてか、よしなき事に氣を揉みける、我ながら鈍ましかりき。度々上りまして然ぞかし御迷惑の事、と用人にも淑に會釋して立出ぬ。いつでも留守に乳母は呆れて、御本家へ行くも可けれど、御支調の立往生は恐れるよと、歸りて仲働に語りけるは、道理せめて可笑かりけり。其後紅梅より絶えて音信のあらざるは、病人の容體難しく、夜をも睡らぬ看病の、身一つにては足らぬ忙しさに取り紛れての事か。身も覺えある、二人無き親を裏す思はと、お艶は棄ておかれず、また深川を訪ねて、今日は長澤の居るを幸ひ隠居所を問はむとせしに、旦那様は御内に、と思ひ懸けぬ言に不審ながら奥へ通れば、更に贏れたる氣色も見えず、髪も結立に薄化粧して、美しき例の紅梅が是から午睡のところ。一年ばかりもお目に懸からざりしが、お變りもなくなど、餘り苦勞の無さ過ぎたる挨拶に、お艶は張合抜して、どうなされました、と段々様子を聞けば、病人も今は恢復したる模様なれば、二三日休息に昨夜晩く歸りて、明日

三人妻

三人妻

はお訪ね申さうと思つて居りましたに。

これ皆頭から虚偽にて、母親病氣にはあらず、お艶と伴れ立ちて本家へ行きては、ちと面倒なることあるゆゑ、餘所に虚病を拵へて、逃げて其の實は本家に匿れ、お艶の訪ね来て門前拂になりし始終をも善く識れり。

然れども今始めて聞いた親して、一々吃驚して、それで奥方の留守つかはれしに疑無き。かねて然る事もあるべしと知れば、あれほどお止め申せしを、露ばかりも用ゐたまはず、わざ／＼辱められにお出なされしも同じ事。一度焦うと思込んで、可恐く執念深き奥方なれば、御前のお聲が懸らうとて、それで我を折る方にはあらず。之に懲りて此後は必ず／＼お構ひあそばしますな。

三度まで支那から逐還されしとか、聞いても腹の立つ。私ならば惜々と唯歸りはせざりしものを。乞兒ではあるまいし、支那から逐還すとは、えと貴方はそれで口惜とも無念とも思したまはぬか。おとなしう爲ておらるゝにも程のあつたもの、御前へまで申上げたが可うござります。餘り蔑んだ待遇が氣に入らぬ。惣體奥方といふ人は、目上を笠に被て爲たいまゝの無理我儘、其の身の外のものは皆犬か猫かのやうに思つて、

増長したる爲方は是々と、自分も悔しき目に遭ひしことを教へ立て、それも皆虚なり。

性善もお艶も有繋にお麻の爲方を快からず、これまでになさへ可怨き事はありけるを、三度の居留守以來無念さの精神に徹へたるを、紅梅が散々にお麻の非を擧げ、我には少しも罪無き身の可哀を説かるゝにぞ、今までは會て聞かざりし、虫様も餘りな女などといへる言の幾句か、今日に限りてお艶の口より出でけり。

倭辯俐口は甘きこと蜜のごとく、明主も刑部典膳に惑はさるゝ例、賢くても女ぞかし。紅梅が顔見るたびの諷言を、お麻は始めのほどは一々心にも留めざりしが、お艶との間疎くなりて、悪き事を聞くのみにて、善き事を暗ることなければ、氣性やさしき女との初念は次第に薄きて、中頃は可愛うなくなり、未は遂に憎うなりて、此分ではお艶の片附くも長いことにはあらず、と紅梅は獨り頭を縮めて憤ふなりけり。

(二十) つれなき人や

秋過ぎ冬となりて、人は節季師走と、明日にも地球の破裂せむやうに騒ぐ中を、葛城夫婦は熱海に冬籠して、やう／＼明る年の一月末に歸京せし當座、餘五郎はお艶を訪ねしよとて、二週間餘も姿を見せず。若様の出来ぬ前までは、一月に唯一度のお越の事もありけるが、お子の可愛さに、此頃では一週間に一度は缺され

三人妻

三人妻

ぬ、其の心こころなほ慣なに待るゝを、何とした事やら、案じられて紅梅に訊たづねれば、私へも弗とお出の無ければ、御同様に案じ切つてをります。直に様子を探りまして、知れ次第お話を致しませぬ。どうもお浮氣筋ではあるまいか、多分は其と鑑定いたしました、と當推慮の噂のみにて別れけるが、二三日経ちて、探りあてたりとて紅梅はわざ／＼來りて、鑑定に違はず、新橋での大浮れ、新聞にまで出たる始末と聞けば、又お才様の二代目が出来やうも知れませぬ。追々お年も取らるゝに、浮れ過ぎはお身の毒でも、こればかりは御意見がならず、と狐色きつねいろに焼く。

お艶お艶は妬ねたまし顔もせず、餘之助の愛らしさに慰められて、三月にもなれど更に音信はあらずけり。いかに餘所に面白き處ありて、遊ばるゝに念の入り過ぎた、此のお子の初の誕生日をも忘れて、今日までも便したまはぬは、難面き人や。我身は左も右も、血を分けたる餘之助様を悦よろこびとは思ひたまはぬか。會には顔見たいと思はるゝこともあるべきに、ようも辛抱のなることぞ、と有ありて怨うらみながら逢あひには行かれず。書信など出さむも憚りありて、思ひ結るゝ折の友の欲しきに、紅梅は道を忘れたるやうに絶えて訪ひ來ぬは、如何にしけむと、此方より訪ねれば、不思議にいつも留守にて、また母親の病氣の重りたるにや、氣遣はれて訊たづねるに、然にもあらざる由。

三人妻

何事も打明けて語合ふ中に、彼人の出先も大方知らぬことは無きに、恚いかく類しげ繁何處へは出らるゝぞ、と疑念は霽れず。折好くも會へる日、餘五郎の近頃の様子を問へば、其後は知らねど、相變らず新橋と、もう穿せん鑿さくも爲飽あつて、構はず放はなつて置まします。此方で何のやうに氣を揉みましても、降るだけ降らねば駄せまぬ雨、時節を待つに覺悟して、聞いて下さるせ、此頃は慰なぐさみがてら、和歌うたの稽古を始めまして、出次でついで手に煎茶をも習ひます。そんなことに忙しうて、存ぞんじながら酷きつい御無沙汰ごむさたをいたしました。必ず悪う思うて下さりませ、と事情を聞けば疑ふところも無く、其日はゆる／＼物語して、別れて後のお艶お艶の寂さびさ、仍餘五郎は見えず、紅梅は訪ひ來ず、庭に花咲きて麗かなる日も、心は秋の暮に似て、譯も無く物思はるゝ。

今日は朝から鳥影の映うつすこと繁く、御前の御越ごこりても好よく、と儂ほかなき事に頼たのみの繋つけらるゝも、心弱き折ぞかじ。支關しかんに客來の氣勢けいせいは、御前かと嬉しく立出づる居間の紙門を外から開けて、奴こしもとが、轟とどろ様の御新造様のお出と取次ぐ。鳥影もさやし答、珍めづしきお客、と座敷に出で待請まちかければ、轟の内儀しんぎ淑しよくに入來りて、挨拶一通りすれば、早速ながらと膝を進ませ、今日上りましたは外の事でもござりませぬが、貴方は御前様の御病氣を